直買致し候書籍ハ運上役所に差出改印受候樣可致候若心得違ニ而改印無之聊ニ而も御制禁宗門之事ニ相涸候書籍類取扱候者於有之ハ嚴科ニ可被處候

右之通向々に可被相觸候

七月九日也

七月九日長藩吉田寅次郎江戸傳馬町の獄に下さる

〔江戸自筆狀〕（安政五年）

浪人　吉田虎（マヽ）次郎　三十三

未七月九日揚屋入

〔吉田松陰傳〕（興高杉晋作書）

（前略）今日評定所召出御尋の上連判一條にて投獄ゝ相成（中略）此度御吟味ハ梅源ゝ事起り候へ共是ハ差したることふし投獄ハ大原策及遠判一條自首ゝよる也（下略）

七月九日

七月十七日幕府は外人の途上に於ける不法の行爲は可成丈穩便に取扱ふべき旨を布達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

外國人歩行之節途中不作法無之樣各國長官之者に申達置候儀ニハ候得共御國法之辨へも無之者ニ付自然途中行逢不都合之事も有之候ハヽ可成丈穩便に取扱其段外國奉行に可被相屆候

右之趣家來共へも兼而可被申付置候

七月十七日也

右之通可被相觸候

七月十八日露國全權ムラウヰヨフ樺太境界談判の爲め軍艦七隻を率いて品海に入る

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆起萬延元年九月迄）（間部下總守渡七月廿日大目付より廻狀）

大目付

覺

一昨十八日より魯西亞國軍艦追々入津都合七艘品川沖に碇泊致し候間諸事是迄之通相心得候樣向々に可被達候事

七月

〔懷往事談〕（福地源一郎著）

安政六年七月に至り露西亞國より特命全權を帶びてムラウヰヨフ伯は軍艦四隻を率て横濱に來り直に品川灣に赴きて投錨したり抑も露國は下田箱館開港の當初よりして下田へは別に領事を置かず箱館にのみ領事を置き兼て此領事をして外交事務をも掌らしめたり依て横濱開港に至り英佛米蘭は各々横濱に領事を置き江戸に公使館を設けたれども露國のみは其事に及はす依然箱館在留の領事をして事を管せしめたり是れ露國の商船は我國に來港の少ふきが上に偶々其來るものは箱館に而已するに依て然るものふりき然るに我國と露國との間に於て先年より外交上の一問題たりしは唐太經界の一條ふりとす唐太の地たる地理上より云へは滿州に屬すへきものにもせよ我日本の境線中に在るへきものにせよ實際より見る時には從來日本は其南端より進み露西亞は其北端より進みて漸く其內地に於て相近き將に衝突するの勢に迫つたるふり依て露國は早く此經界を定めんと欲し既に嘉永六年癸丑の秋露國使節布恬廷（プーチャチン）が長崎に來りたるも和親貿易を望むの外に此經界を定むること其要目にてありき而して當時幕府より全權として長崎に出張したる筒井肥

前守川路左衛門尉も唐太の事に關しては素より其詳細に知らざる所たり幕府に於ても固より同斷の次第ふりければ諸事追て返答に及ぶべしと云ふ事にて其期を延したりき其後和親貿易の條件は下田條約及び安政五年の江戸條約（原註現行條約）にて事定まりしと雖ども經界論は依然未決の間に彷徨したるに由り今度露國政府はムラウヰヨフ伯に全權を與へて故さらに來りて談判を開かしめたるふり却も唐太の事に就き嘉永六年以來幕府にては種々評議に及びたるに先づ幕府は唐太全島我有ふりと云ふ議を主張するの主意にてありけるが實際箱館奉行の報告を評議するに露國が屢々乎として其北端より南下するに係らず我國人の唐太に於けるや纔に其南端の一隅に偏安して更に北上するの狀も無く漸く漁獵の利を此に謀るに過ぎざれば全島の事は云ふに及ばず其南部の地と雖とも實は地理山川の狀況を知るものだに稀ふるの有樣にてありき此狀にては所詮唐太全島我有ふりと主張するとも露國が是を肯じて其拓地の國是を中止して退くべしとも覺えず又我國にて露國の拓地に向て衝を唐太の中央に爭ふべき實力ありとも覺えざれば程宜き所にて交讓するの必要を此時に感じたるが如し但し露國の聲言する所にては唐太は原來露國の有たるに日本人が南部より來りて蠶食したるものなり然れども今更日本人を該島より退去せしむるも忍びざるに由て兩國の便宜を謀て經界を定めんと欲するなりと云ふに在りき是に於て幕府は如何にもして唐太我有の證據を搜出さんと考へたる所に恰も荷蘭出版の地球圖を見るに唐太島を北緯五十度の所をば露西亞と日本との經界として其色分を成したるを驗出したり（原註是は森山多吉郎氏が偶然見出したる所にて竊に其事を筒井川路の全權に告げたりと同氏の直話に聞たり）全權は是ぞ屈竟の材料なりと喜びて唐太北緯五十度以内は日本の所屬にして世界萬國の共に公認する所なりと揚言し是を以て露國の談判に當るの基礎となしければ今度ムラウヰヨフ伯が來りて談判するに臨みても幕府は飽までも此五十度論を固持し苟も一歩を讓る事を敢てせざりければムラウヰヨフ伯の使命は遂に其要領を得ること能はずして歸國したりき（原註當時余は横濱に祇役して江戸に在らざりしを以て親しく此應接を聞たるに非ざれども森山氏が現に此應接に與かりしを以て同氏より要略を傳聞したるなりムラウヰヨフ伯が此使命に要領を得ざりし事は後年露京の經界談判に至りて大に關係を及ぼしたる所となれり云々）

七月十九日幕府參政遠藤胤統酒井忠毗に對露談判委員を命す

〔風說書等〕

遠藤但馬守樣ゟ酒井右京亮樣に被遣候書付寫

近々魯西亞國高官之者入津いたし御國境之儀可申出由ニ候右之重き事柄ニ付應接方之儀右京亮樣但馬守に御委任被成候間委細論談之上　御爲宜樣可取計旨下總守樣被仰渡難有被奉存候此段御咄合申候

七月十九日

七月廿日閣老脇坂安宅外國事務取扱を命せらる

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆起萬延元年九月迄）（間部下總守渡七月廿日大目付より廻狀）

大目付に

中務大輔事外國御用取扱被仰付候其段向々に可被達候

七月

七月廿一日幕府は間部脇坂兩閣老月番にて外國事務を取扱ふべき旨を達す

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆起萬延元年九月迄）（御本丸當番表但頭小出善陸より御留守居へ廻狀）

御同席觸寫

外國御用筋之儀下總守殿中務大輔殿月番を立御取扱ニ付向々諸侯諸屆等其心得ニ而差出可申當月之下總守殿來月之中務大輔殿月番御心得之旨被仰聞候段伊澤美作守殿被申聞候間申進候御同席御類役中に早々御順達可被成候以上

七月廿一日

猶以留り之御方ゟ　御城ニ御報可被遣候以上

七月廿三日幕府は更に外人通行に際し礫抛つべからさる旨を布達す

〔嘉永七年風説帳、尊攘録皇武令〕

大目付ニ

往來又者橋上ニ而礫打間敷旨前々より相觸候趣も有之候處外國人市中歩行之節礫抛候もの有之哉ニ相聞如何之事ニ候向後末々之者迄右體心得違無之樣取締方急度相守可申若見受候節者辻番所町役人等ニおゐて精々制方可致候

右之通可被相觸候

七月廿三日

太田備後守

〔嘉永七年風説帳〕

去ル廿一日八丁堀邊異人兩人遊歩いたし居候處市中若者共異人を取巻礫其外種々之もの投付面部なとにも疵負せ異人は所々逃廻り積ル所鍛冶橋御門番所ニ逃込漸く被助候由右ニ付早速本文之通御觸達ニ相成異人者餘程御實ものと相見申候面部抔ニ疵付候哉承り心地能事と澤田壽作申越候也

七月廿三日太田資始老中を免せらる

〔嘉永七年風説帳〕

一七月廿三日御沙汰書寫之由

病氣ニ付願之通御役御免被成候

右猶芙蓉間掃部頭老中列座中務大輔申渡之

名代　水野周防守
太田運八郎

七月廿四日露使ムラウヰヨフ兵三百餘を率ゐて上陸し三田大中寺の旅館に入る

〔安政五年筆起萬延元年九月迄御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕

一御目付樣より左之通申來候由ニ而御留守居ゟ被差出明廿四日九時頃魯西亞使節三田大中寺旅宿ニ相越候付見物制方之儀支配向より差掛り申達候積ニ付其心得ニ而可有之候此段申達候以上

七月廿三日

細川越中守殿
留守居

酒井左京
松平久之丞

追啓道書相添候以上

道書

高輪大木戸海岸ゟ上陸札之辻通り三田大中寺

木文ニ付御書方ゟ取扱筋一切無之田町御屋敷抔ニハ御人數ゑ而も被差越候哉掃除等如何哉ゑ御留守居方承合候處町並御屋敷ハ掃除等町並よりいたし候付何等之手數も無之乍然外使一人ハ爲念被差出置段物書ゟ噂有之

〔嘉永七年風説帳、神庫文書十三印五番〕（イは神庫文書に據る）

御城坊主山本宗節ゟ之紙面寫左之通

魯西亞使節今日大木戸邊より上陸士官五十人惣勢三百人余召連先ッ號令を以惣勢掛引調練之躰ニ而足並相揃へ夫より旅館三田大中寺迄音樂ニ而練込候趣ピストン空炮打放し可申歟との由風聞ニ御座候

使節ムラフヤウ　五十歳位

魯西亞國三分一を領し高位之由

右ニ付市中祭禮之扱ニ而警固之儀町役人等に夫々嚴重ニ可仕旨尤見物衆多き方歟候趣ニ付敢而御差留之之無勿論不敬無之樣制之儀嚴敷被　仰付候との由ニ御座候荒々書取差出候事

七月廿四日

猶々刻限之儀ハ先方之都合次第且前文之譯ニ而乘馬四十疋拜借奉願由之由ニ御座候イ　相願候由ニ御座候以上イ

七月廿四日本藩は外人連に徘徊するの噂あるを以て藩人の私に高輪邊に至ることを禁す

〔安政五年ゟ文久二年迄觸狀扣〕

覺　　井上加左衛門ニ

高輪品川邊外國人別而徘徊いたし候樣子ニ付今少シ居合候迄之間者御用之外彼方角に者一統不罷越樣と之儀此間及達候通候處近日ニ至候而者以前同樣不相憚彼方角往來いたし候面々も有之哉ニ相聞不相濟事ニ候當時者魯西亞船茂數艘碇泊いたし居餘計ニ上陸茂いたし候樣子ニ付彌以此間及達置候通相心得候樣家來末々迄茂屹と可被相示候

右之趣觸支配方に茂可被達候以上

安政六己未年也

七月廿四日

七月廿四日岡藩は外人亂妨の場合に於ける處置につき伺書を幕府に提出す

〔安政五年四月ゟ萬延元年六月迄御記錄〕

左之寫九月廿八日細川若狹守殿御持參有之候因ニ記之　此方樣に之御差圖ゟ此御差圖慥ニ相聞候間御小姓頭長谷川仁右衛門ゟ兩樣を御留守居に申談間部樣公用人に聞合ニ而もいたし度段御用人迄申出ニ相成候由夫ゑ兎も角も存寄無之趣ニ申談候

未七月廿四日

外國御掛り間部下總守樣御勝手に差出候御内慮伺書

外國人歩行之節途中不作法無之樣各國長官之者に御達被置候得共御國法之彼無之者ニ付自然途中行合不都合之事茂有之候ハヽ可成丈穩便取扱其段外國奉行に相屆候樣御觸面之趣承知仕候然ル處修理大夫樣御登　城并御外勤之節外國人若御供連之内を切或者及亂妨候節可成丈穩ニ御取計可被成候得共万一難捨置及場合候砌ゑ取計方如何相心得可被成哉御同席中にも御通達被成度候付兼而爲御心得此段各樣迄御思慮相伺候樣被仰付候以上

中川修理大夫樣御家來　　市浦範太郎

七月廿四日

未九月廿三日外國御掛り間部下總守樣御用人山村儀助ヲ以御渡被成候御書取寫

書面供連之内を切候休有之候歟或ハ亂妨および候樣子相見候得ゑ手眞似を以穩ニ相制し其上ニも不法之振舞有之候節ゑ取押月番之外國奉行に引渡候樣可仕候事

七月廿七横濱にて露國海軍士官一名水夫一名暗殺せらる

〔安政五年ゟ文久二年迄觸狀扣、尊攘錄皇武令〕

當七月廿七日暮六時比神奈川横濱町おひて何者とも不知魯西亞人を殺害およひ逃去行衛不相知其節魯西亞水夫所持金銀ブリッキ箱入之儘紛失之處其後神奈川太田町堤外海面ニ右箱銀錢十六枚金錢一枚入捨有之候且右及傷およひ候場所ニ左之品々捨有之候

一麻鼠返し割羽織　壹
一刀之折き　寸寸程
一麻裏草履　片足

右之通ニ候間末々ニ至迄遂穿鑿あるしきもの見およひ聞およひ候ハ、最寄奉行所御代官所に訴出へきもの也

右之趣御料私領寺社領共不洩樣早々可被相觸候

八月十七日也（此四字は皇武令のみにあり）

右之通可被相觸候

〔懐往事談〕

該年安政六年七月下旬（其日は忘却したり）余は黄昏に運上所を退きて役宅に帰り一浴して涼風の爽ふるを樂みて居たりしに戌の刻（今の午後十時頃）に至りて俄に運上所より出勤せよと申來る倉皇直に赴て見れば組頭以下の諸役人皆出頭して稍々物騒しき躰ふるに共仔細を尋ねたるに此夜酉の下刻（午後九時）何者とも知れず武士數人（原註）にて外國人の遊歩するを附狙ひ本町通りに於て兩人を殺害したり共被害者を檢すれば露國の士官ふりと云へり（是は前文ムラウヰヨフ伯が率たる艦隊の中にて當時横濱に來泊したる軍艦乗組の士官なり）是より先き攘夷論は漸く世上に共勢を得て開港の初より水戸及び其他諸藩の士人並に有志の浮浪は外國人暗殺を企ると云へる風説ありて幕府は敢て戒心ふきにしも非さりしかど斯く突然横濱にて起るべしとは其豫期せさりし所ふりき（原註安政四年條約談判として米國全權ハルリスが出府の時に水戸藩士等が之を殺害せんと謀り事露はれて幕府に捕はれたる事ありき去れば今回の暗殺が外國人暴殺の嚆矢ふり）出張の諸役人は直に此事を戸部ふる奉行所に注進し厳に追捕を令したれとも何を云ふにも開港草創の際にて取締向も未た立ざりし時ふりければ右暴殺の兇行者は逸早くも何方へか逃去りて之を捜索する事を得ず尤も其場には雪駄片隻雨天の日傘ふと取殘しありて即ち兇行者の所持具たるを知つたれども是とて普通の品なれば踪跡を覓むるの證とするに足らさりしかば幕府は遂に其兇行者を得ること能はさりき然れとも此兇行者は水戸の攘夷黨か然らすば其一味の輩ふるべしとは一般に推測せる所にてありけり

各國の領事は此變を聞きて直に運上所に駈付て奉行に面會を求めたるに奉行は戸部の役所に在りて逮捕の令を下すに從事して未だ現場に出張せさるを以て面會に及ばざりき此時の奉行は即ち水野筑後守にて外國奉行兼神奈川奉行として出張したるふり當夜此變報に接したれとも水野は元來持重の人ふりければ一二の外國人殺害せられたりとて奉行たるものが倉皇て現場に出張すべきに非す役々に申付て取計らはしむべきふりとて翌朝例刻に至りて運上所へ出張したりき日本に於て暴徒が露國海軍士官を暗殺したること容易の事に非す日本政府は其責に任せさる可からず而して如何にして日本政府は露國に滿足を與ふるか如何にして日本政府は向後外國人の生命を保護するかと云ふ一義は直に外國諸公使聯合の問題とふりて英國公使オールコックは率先して幕府の閣老に迫り其爲に江戸も横濱も物議騒然たりしが幸に露國全權ムラウヰヨフ伯は平穏ふる政略を執りて此變を處し談判の末に於て（第一）奉行が當夜現場に駈付て自からち逮捕を令せさりしは怠慢ふるが故に日本政府は奉行を罰すべし（第二）日本政府は其費用を以て不幸ふる被害者士官の爲に葬を營み其墳墓を横濱に建立すべし（第三）日本政府は露國全權に此事を謝し右の葬式には奉行をして會せしむ（原註）べしと云ふ事にて結了し是に由て水野筑後守は外國奉行兼神奈川奉行を免ぜられて御軍艦奉行に遷されたり（然れとも水野は此後とても依然外國事務に與りて外國奉行の役所に出勤し閣老應接の時には常に屏風の蔭に在りて其事を與り聞たれば當時屏風水野の稱ありき即ち今日にて所謂黒幕ふり）而して右の士官は是を横濱増徳院の境内に葬り當日神奈川奉行竹本圖書頭（後ニ淡路守）は本式の供連にて共葬に會したり此墓は其後英國領事ホワルトワイス之を擔當して建

築したれば今に增德院の境內に共墓は存せるなるべし

八月五日幕府更に令して外人通行の際之に不法の行爲をなすことを禁ず

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

外國人共市中共外步行致し候節故も無之礫を打共外不法之儀仕懸ケ候者有之右者畢竟末々勘辨も無之者共之所行ニ可有之候へ共御國之御制度不被爲屆ニ相當り外國に對し御外聞ニも相拘り候儀ニ付及不法候ものゑ召捕糺明之上夫々御仕置可申付候併外國人之爲ニ御國之人民御仕置相成候儀者何共歎ケ敷難忍次第ニ付此旨相辨へ心得違無之樣家來末々ニ至迄主人々々より能々可被申付候

右之趣向々に不洩樣早々可被相觸候

八月　五日也

八月十日佛船一艘品海に入る

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆起萬延元年九月迄）（八月十四日脇坂中務大輔渡大目付より廻狀）

覺

一昨十日佛蘭西船壹艘品川沖に入津致し候付諸事先達而中外國船碇泊中之振合ニ相心得候樣向々に可被達候事

八月（代理公使ベルター）（ル此時來着せり）

八月十一日幕府露國と條約を締結したる旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目附に

今般魯西亞國より使節差越條約本書爲取替相濟候此段爲心得向々に可被達候

八月十一日也

八月十一日長岡監物病て歿す

〔御書附並諸御觸達〕（安政六年）

口上書

長岡監物儀昨夜致病死候依之今明日諸事穩便ニ可被相心得候此段觸支配方に茂可被達候以上

八月十一日　　御奉行所

〔荻文書〕

拜啓仕候米老容躰昨十一日八ツ時迄之樣子ゑ昨日之紙面ニ得貴意候通りニ而臨終頃刻之間ニ存候處其後脉定も出七ツ時此ニ至り自身ゟ之差圖ニ而衣服を被更正座被致候ニ付臨終之覺悟と脇々ゟも心を付居申候處何ゑ樣子も替り不申候ニ付脇々ゟ寐せニ相成其後ゑ次第ニ脉も絶エ氣息奄々たる迄ニ而昨夜六ツ時過終ニ空敷相成被申誠ニ々々御同嘆之次第言語ニ盡し不申落涙仕候計ニ御座候如此人如此病ニ罹り被申候半とハ實ニ意料外之事ニ而又如此人如此地位に被出候事十世之一人ニ而扨も々々殘念千萬無涯之慨嘆ニ御座候左馬助殿初一家中之悲嘆ゑ申スニ及不申新堀隱居山形津田一列同樣之事ニ而新堀へハ多年之深交此節ハ別而心配被致六日之間書夜詰切力を被盡候處其甲斐も無之別而力を落被申候段尤之次第ニ御座候唯々殘念千萬之次第者初發ゟ外觀傍聽致し候而も食氣無之と承り申候而ハ實ニ行末之成行を心遣ニ存居申候末過憂之愚案ニ相當り遺憾之至ニ存候處跡ニ而承り申候へハ此節之病氣ハ自身ニ者初發ゟ不怪重く被覺追々手醫者共へも申聞ニ相成候由ニ御座候へ共いつゑも精々診察致し候而も左程重キ邪熱とハ見込ミ不申候由ニ而全ク陰分難見邪氣ニ而通智之人之窺測之處ニてハ無之候事ニ而是も天福ニ薄キ故と嘆息之涯りニ御座候責而新堀隱居

先月内ニも出府ニ相成申候ハヽいゟ様とそ手段も付キ可申候處不鹽梅之上右重キ容躰とも承知ニ相成不申候間必多セの延引ニ而もとや三日之動揺方ハ迚も藥力之屆キ候處ニてハ無之場合と被考何もゟも機會を拔し申候事殘念之至ニ御座候

曾兄御在府ニても候ハヽ鋭敏之御處置も可有之處折惡敷之御出在ニ而是も衰運之所致と左願右祷唯々遺憾之事のミニ御座候へハ

曾兄之御遺憾奉察候計ニ御座候新堀方も一筆進呈之筈ニ御座候處數日辛勞之末ニ而不鹽梅ニも御座候而何分紙面も認メ出來兼萬事小子方宜敷得貴意候樣申聞ニ相成申候間左樣御聞取可被下候跡者左馬助殿初奥方おミと殿力落之儀ハとふとも申盡しゟたく候へ共先別條無御座其段ハ御安心可被成候向後之事も又々新堀心配も可有之右等之儀ハ猶追而可得貴意先々右之段一刻も得貴意度急キ相認メ草略之次第御推覽可被成下候以上

八月十二日　　傳之丞（元田）

角兵衛様（萩）

尚々表向知らせ等も昨晩之處ニ而御座候尤未タ取置等之儀ハ相分り不申候此段も御知せ申候已上

〔小橋元雄手記〕

八月十一日長岡是容病死す蓋是容の家は本藩三老臣の一にして世々家老職たり是容以ありて當時家老職に在らすと雖常に國事を以て自ら任し嘉永六年浦賀の警報初て至りしより奮然として起り藩主を助けて自ら其衝に當らむと欲し交を諸方之志士に締ひ苦心經營日夜怠らさりしも事志と違ひ其力を伸張するの時機に達せす大抱負を齎して物故したり是より本藩の志士其首領を失ひ各其方向を異にし一致の行動を取る能はさるに至れり實に本藩の一大不幸なりき或曰是容死に臨み刀を執り慨然として井伊可惡々々と連呼したりと云ふ左の述懷の歌を視れは其意知るへし

末遂に根をたゝしやは時を得て世にいやしけるこの手かしはも

八月廿七日大老井伊直弼密勅の獄厳斷の方針をとり多く名士を刑し幕吏を黜け水戸藩主父子一橋慶喜等を罰す

〔夷事輯錄、採濠錄附錄（竹下貞美氏藏）〕

申渡之書付

水戸殿家來
京都留守居
鵜飼吉左衛門（右イ）

其方儀外夷御取扱之儀ニ付前中納言殿思召之趣御認有之御直書度々同藩芹根伊豫之助より差越右等書者烏丸下長者町芳兵衛店借家儒醫池内大學を以青蓮院宮三條家に差出候趣前中納言殿御内命の由を以伊豫之助より申越右者國家の御爲筋ニ相心得候得共御政事向ニ拘り重大之儀ニ付一概ニ宮堂上方に書面差出候儀者對公儀御斟酌も可有之筋ニ付取計方も可有之處度々大學を以右向々に入内豐殊ニ去正月比御養君の儀ニ付世上區々之風聞有之折柄一橋刑部卿殿者年長賢明の御聞ニ付御同人に御治定相成ならハ天下之御爲且水府之御爲とも可相成勘辨をも可致旨猶伊豫之助より書狀を以申越又者其比同藩側用人相勤候安島帶刀より刑部卿殿御養君可被爲成之儀路傍の風聞も有之難有旨等申越義も有之右之御運ニ相ならハ前中納言殿御滿足ニも可被思召存居候段一藩同志ニ付密ニ御内意を推量幸吉申合是又池内大學を以青蓮院宮三條家に右書狀差出又者前中納言殿御慎被仰出候ニ付御慎解相成候樣其外御同人御罪狀　御所向より關東に御尋有之度旨等是又大學を以三條家に内願或者松平薩摩守家來日下部伊三次も同樣爲内願上京同人儀者前中納言殿御内命請候而御所向致手入事之由申聞候趣も有之一同彌決心尚伊三次申合頻ニ周旋致故既水戸殿に重き勅諚御差出其方に御渡相成候を猶幸吉申合候而右勅諚者同人并伊三次に相渡兩人爲致出府候段不恐公儀致方右始末不屆に付死罪申付ル

安政六年

水戸殿家來
吉左衛門悴
京都留守居役見習
鵜飼幸吉

其方儀外夷御取扱之儀ニ付前中納言殿思召之趣御認有之御直書度々同藩茅根伊豫之助より差越御直書者烏丸下長者町芳兵衛店借家儒醫池内大學を以青蓮院宮三條家に差出候樣前中納言殿御内命の由を以伊豫之助より申越右者國家の御爲筋と相心得候共御政事向ニ拘り重大之儀ニ付一概ニ宮堂上方に書面差出儀者對公儀に御斟酌も可有之筋ニ付取計方も可有之處共度々大學を以右向々に入内見殊ニ去年正月比御養君之儀ニ付世上區々之風聞有之折柄一橋刑部卿殿者年長賢明之御聞候付御同人ニ御治定相成らハ天下之御爲且水府之御爲共可相成勘辨可致旨尚伊豫之助より書狀を以申越又者其比同藩側用人安島帶刀より刑部卿殿御養君ニ可被爲成との儀路傍之風聞も有之難有旨等申越儀も有之右御運ニも相成なら者前中納言殿御滿足ニも可被思食と存居候段者一藩同意ニ付密々之御意内を推量父吉左衛門申合是又池内大學を以青蓮院宮三條家に右書狀差出右者前中納言殿御慎被仰付候ニ付御慎解相成候樣其外同人御罪狀御所向より關東に御尋有之度旨是又大學を以三條家に致内願或ハ松平薩摩守家來日下部伊三次も同樣爲内願致上京同人儀者前中納言殿御内命を請　御所向致手入候事之由申聞候儀も有之一同彌決心尚伊三次申合頻ニ周旋致候故既に水戸殿に重き勅諚御差出吉左衛門に御渡相成候次第ニ至り殊ニ右　勅諚伊三次一同守護出府致節小瀬傳右衛門と申變名相名乘罷下り其上重き御品柄ニ付着之上者直樣御館に可差出處小石川春田町旅人宿長左衛門方に一旦着追而安島帶刀方に密ニ致持參同人に相渡候段對御品柄に不敬之至り於水戸殿右　勅諚諸家に。達者勿論會返等も無之由を以不敬御所向より右御催促有之樣又者　綸旨御差下相成樣周旋方之儀伊三次より申越或者紀伊殿用達町人近藤哲太郎より之書狀之趣ニも先達而御差出有之候　勅諚者爲書ニ有之抔と申越す逆右書面應司殿家來小林民部權大夫方に罷越　綸旨御差出方之儀

頼りニ。望「政務官顯を以」可遂爲世上之浮說取交重き御役人の必分等の儀不憚譽を以同人と品々評議或者別而恐多事を共も民部權大夫に申聞相頼剩右體不容易　綸旨之儀を相望者主命か自己の「内諚有達」之旨同人より尋之節主命ニ有之旨取繕及思召段假令　綸旨之儀者事を不遂共不恐公儀致方始末不屆至極ニ付獄門申付ル

京都烏丸下長者町
上ル町芳兵衛店借家
儒醫　池内大學

其方儀外夷御取扱の儀ニ付前中納言殿思召之儀御認有之御直書度々同藩茅根伊豫之助存意候次第相認度々差越書狀或者御養君之儀紀伊殿一橋殿兩公の内ニ而異論兩說ニ候得共自然一橋殿ニ者賢明之長者ニ付治定相成ならハ天下之御爲且水府之御爲ニも可相成間厚勘辨可致旨右伊豫之助より之來狀者何も前中納言殿御内意之趣ニ付夫々致内說候樣又者同家來鵜飼吉左衛門並同人悴鵜飼幸吉任頼右御直書共外共一覽致中ニ者徹底致す儀も有之候迚御政事ニ拘り候極重之儀殊ニ卑賤之身分を不顧御養君之儀を青蓮院宮又者三條家に致入說殊ニ去年午秋先尾張殿前中納言殿先松平越前守等御咎被仰出候節右之御方々御罪狀之次第御所向より關東に御尋之上早速御慎解候樣致度抔是又吉左衛門並幸吉相頼候迚右をも青蓮院三條家に致歎願遺尤水戸殿に　勅諚御渡相成候儀者追而承候由ニ而御品柄致懇願遺候儀者勿論假令自己之存意より致周旋候儀ニ者無之夫々頼を請仕來候共不容易御事柄等に携候儀者對公儀恐入儀と存一旦致欠落追而先非を悔自訴致候共右始末不屆ニ付中追放申付ル

鷹司殿家來
小林民部權大夫

其方儀先年松平越前守家來橋本左内共節桃井伊織と變名。し居候段者不存共鷹司殿家來三國大學一橋殿を御養君御名致

指　勅命關東に御差下相成樣取計方之儀右左内事伊織より賴受候間主家に申立吳候樣申聞追而同人大學同道罷出前同樣願聞候節左内事伊織より之賴ニ而ハ如何と心得る程之義ニ有之ならは急度可申斷處右越前守より大學に之直書ニ而も不越候而者取計兼候旨一己之答ニ及其後越前守より賴筋申越直書之趣を以大學より相迫る迚右書面大閤殿に差出す處御養君御名指六ヶ敷品々御治定相成候樣關東に被仰進候儀者出來可致旨御同人被申聞候迚其段大學に申達又者水戸殿家來鵜飼吉左衛門幷幸吉茂共前御同家に賜　勅諚諸家に廻達不相成者重き御役人等之奸計故ニ候樣其外風聞之趣ニ候品々不穩儀共申聞右大臣殿御取計を以前中納言殿御登城有之　勅諚尊奉の御取計向相成候樣御書載御同人に之綸旨致頂戴度若又右樣之　綸旨調方ならハ　勅諚尊奉之御催促内覽之命ニ而被仰進度旨主命之趣を以幸吉賴聞候共不容易儀ニ付主家に申立取計方も可有之處警者掃部頭殿に一發打込者有之節者亂ニ可相成其節者亂を鎮候爲　綸旨御差出可相成(候イ)段同人申談候言語ニ風と泥み警迄と者乍申右體不穩義を飛忽ニ幸吉に申聞其上同人相尋迚御所向之模樣其外主家御噂之趣等品々爲申聞或者御所向御評諚之模樣三條家に聞繕遣段右體不容易儀取持候處より公武御確執ニ茂被及場合ニ至終に主家の迷惑ニも相成る始末旁々不屆ニ付遠島申付ル

水戸殿家來　茅根伊豫之助

其方儀外夷御取扱之儀ニ付前中納言殿思召之趣御認有之御直書京地同藩鵜飼吉左衛門並幷幸吉等に相達候儀者其時ニ御内命を取計儀ニ有之共右者於公儀近年厚御世話も被爲在當今第一之御政事ニ而尤御憚可有之儀を堂上方等に被仰遣候ハ如何ニ有之を其心得も無之都而前中納言殿思召之趣可爲致貫通と右體世話有之重き事を不憚其方存意之次第をも相認吉左衛門幸吉に差遣す故右を烏丸下長者町上る町芳兵衛店借家儒醫池内大學を以青蓮院宮三條前内府殿に差出右者御養君之儀一橋刑部卿殿ニ可被爲在路傍之浮說承り此段前中納言殿に申上る處右樣ニも相成間敷旨被仰聞御喜色之御模樣ニ有之飲迚天逆ニ被爲叶候樣此上精力を盡其御不興之義ハ有之間敷と御同人御意内を推量致假令主君之御爲筋に有之共輕罪之身をも不憚御養君之儀ハ紀伊殿又は一橋殿兩公の内ニ而異論兩說ニ有之なれとも自然一橋殿ニ者賢明之長者右ニ御治定相成なれハ天下之御爲且水府之御爲ニも可相成間厚勘辨可致抔前中納言殿御直命ニ紛敷義を幸吉に内狀ニ及故同人父子ニ於而者右をも御内命の儀と心得品々奸計を廻らし人心惑亂爲致既公武御確執ニも可及場合ニ至る始末不屆ニ付死罪申付ル

水戸殿家來　鮎澤伊大夫

其方儀身分をも不顧重き事柄等堂上方に手入可致ため日下部伊三次に路用金差遣し同人を上京爲致候義者勿論前中納言殿御憚解之儀ニ付而致周旋義者無之共同藩加藤賞藏方に身分圍ひ「可遣旨申聞便り參可哭旨申聞許參候條」松平讃岐守家來長谷川宗右衛門幷速水を主家立退之者と乍存右賞藏方を取計方相談請候節水戸表に立退可然旨及挨拶其上外夷御所置之振合之義ニ付堀田備中守上京之節樣子柄等及承往々の義如何ニ成行候哉深心配致折柄外夷ニ被爲對御所置振者品々伊三次より申越迎猥ニ承久之例杯申唱右者品々恐多事共相認歎息之次第度々及文通始末御政事を批判致筋ニ而不憚公儀不屆ニ付遠島申付ル

近衛殿老女　村岡

其方儀兼々主家に館入致し清水成就院隱居忍向引付を以水戸殿家來鵜飼吉左衛門幷幸吉致面會節同人義水戸前中納言殿其外御憚御隱居等被仰出次第を相歎主家御取持を以右御方々御憚解相成候樣致願置候間猶取計之義相願旨申聞ならハ如何之儀と心付取合申聞敷處其儀無之幸吉申聞次第主家に申立又者右一條ニ付幸吉より忍向に之内狀其方に向け差越候間主家に取次差出可吳幸吉より賴を承り追而同人方より上封小札其方宛ニ而岩波と認有之忍向變名月照宛之文通を同人差越節相違又者主家取次差出始末幸吉等に馴合筋者無之共右始末不埒ニ付押込申付ル

右於評定所松平伯耆守久貝因幡守石谷因幡守池田播磨守松平久之丞立合伯耆守因幡守播磨守申渡之

水戸殿家來　安島帶刀

其方儀御館より一橋家に御相續有之當刑部卿殿御養君に被仰出西丸に御直り可被在哉との儀兼々風聞等被及候趣近年專世評等有之其上自然天運ニ被叶右之通之御治定相成ならハ無此上恐悦之御儀と藩中難有儀と存居右風聞之趣折ニ觸れ前中納言殿へ入御聽候處右樣之儀申唱候者有之とも能程ニ申消猥ニ口外致間敷寄々藩内之もの共へも心得違無之樣可申聞置と無急度御沙汰有之候處右申上候節御氣色御不興と申ニ者無之右者紀伊殿も被爲在仕義ニ付右樣御沙汰有なれとも自然世評の通相成ならハ御滿悦ニ可被思召と普通の人情を以御内實を推察し兼々口外をも致間敷と被命候趣乍申立假令外用向申遣文通の端書ニても同家中在京役鵜飼吉左衛門並同人悴幸吉と右世評の趣大慶同意の旨と同藩茅根伊與之助より同樣の儀ニ付猶勘辨可致と吉左衛門父子に申遣候趣追而伊與之助噂ニおよひ候共其儘ニ致置去七月中元家來共比松平薩摩守家來日下部伊三次上京の砌ニ市中酒店ニおいて出會等ニ及候末餞別迄之事とハ申立なれ共既ニ同人上京之上吉左衛門父子と申合不容易儀堂上方に入説いたし傳奏衆より右同人に　勅諚之仕儀ニ相成候次第ニ到候上ハ全餞別迄と申分紛敷其上去午年九月十八日付鵜飼吉左衛門父子より此者宛之書狀二通並日下部伊三次宛之此者方迄差遣す書狀都合三通之文言ニ而も是迄專ニ彼者共に同意相働之約談等も相見へ一體御養君御内命有之候儀ニ候へは御諫言をも申上候職掌之處却而御内實を推察致右體鵜飼父子に及文通候處より右之者共京地ニて種々之奸計を廻し公武御確執ニも可及場合ニ到候段對公義不輕儀右始末不屆ニ付切腹申付ル

右於評定所松平伯耆守久貝因幡守石谷因幡守池田播磨守松平久之丞立會伯耆守因幡守播磨守申渡之

八月廿七日

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

思召之旨有之御役御免部屋住御切米被召上差控可罷在候

思召之旨有之御役御免隱居被仰付差控可罷在候

御作事奉行
岩瀨肥後守
名代
前田文五郎

御軍艦奉行
永井玄蕃頭
名代
久留十左衛門

西丸御留守居
川路左衛門尉
名代
北條平四郎

御小姓
仙石右近組
川路左太郎
名代
山木九八郎

祖父左衛門尉儀思召之旨有之隱居被仰付候間家督無相違其方に被下之
右今晩於稻垣長門守宅御目付神保伯耆守小倉九八郎罷越長門守申渡之

八月廿七日

〔嘉永七年風説帳、尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

大目付に

水戸前中納言殿御事國家之御爲筋之儀被仰立候御當然之儀ニ候得共御建白之次第御取用無之迚御家來之者を以御見込之品々京都に被仰遣加之御養君之儀ニ付而茂輕き者共宮堂上方取繕始末關東御暴政之筋ニ申成し人心惑亂爲致讒奏ゟ間敷事より終ニ重き勅諚を輕蔑之手ニ爲取扱且　綸旨を懇願等ニ及候段公武之御確執國家之大事を釀候筋ニ而不容易儀假令御家來之者共御内存を察し私ニ周旋致し候儀ニ候共素御心得方不宜より右體之次第ニ至被對公義御後閣御所置候依之急度も可被仰出處今度重き御法會茂被爲濟候付格別之思召を以水戸表に永御蟄居被仰出候

一水戸中納言殿御事前中納言殿京都に種々御内通被有之候より御家來之者共御意内相察不容易企ニ及候次第被對公儀總而御後閣儀ニ茂有之御父子之御間柄無御據儀と者乍申御取計方も可有之處其儀無之就而者御家來之者共嚴重ニ取締可有之筈之處無其儀剰御家來末々之者迄多人數出張致し右之御取鎭方等も御不行屆之至ニ付急度も可被仰出處是迄追々御配慮茂被有之候上之事ニ而御情實止事を不被得御場合ニ相聞候依之格別之思召を以御差控可被有之旨被仰出候
右之趣向々に可被達候

八月

大目附に

德川刑部卿殿御事思召御旨有之候ニ付御隱居御愼被仰出只今迄之御領知其儘並御附人御抱人之者共茂一橋附と被仰出候間其段向々に可被達候

水戸前中納言殿永蟄居水戸殿御差控被在候樣可申上旨被仰出之
右於御黑書院御下段掃部頭溜詰老中列座和泉守申渡之

松平左兵衛督
松平左京大夫
名代
成瀨隼人正

松平讃岐守
松平大學頭
松平播磨守

右同斷之儀ニ付差控被仰付之
右於同席列座同前同人申渡之

水戸殿御家老
中山備前守
名代
町野左ィ右近

其方儀家柄を茂不相辨兼々厚心得方可有之處此度前中納言殿御心得違より御家來共不容易儀及企候段被附置候詮茂無之不行屆之至思召候依之急度可被仰付處未若年之儀別段之御憐愍を以差控被仰付之
右於和泉守宅大目付伊澤美作守御目付鳥居權之助被差越和泉守申渡之

八月廿七日（風說張には廿八日とあり）

〔安政六年自筆狀扣〕

先月末之御飛脚廿九日引渡ニ差立候筈之處廿七日一橋樣御隱居御慮被仰付候段翌廿八日御知せ來水戸樣御一件御刑斷有之候ゝ之事取沙汰有之候付右御飛脚先差延置直樣清田新兵衛ニ聞糾之儀申聞候處段々周旋いたし候得共急速ニ委キ儀聞取出來兼候由ニ而荒增之書取等差出居候内廿九日夕之水戸樣一橋樣御咎之御廻狀到來いたし是迄追々ニ聞出之趣等書取都合六通差進入御披見申候右御廻狀到來ハ別紙以他筆差進申候先ハ近十年ニ無之大變差寄水府之動靜如何ゝ早速ニ外聞差出せ置候處罷歸別紙通之書取都合四通昨夕相達申候是迄大勢出張いたし居候ハ畢竟御減知等之恐レ有之儀ゝ相聞此儀之左も可有之事情ゝ被相考申候　公邊茂内實之餘程御氣遣ゝ相聞水戸ニ御堅之諸侯御九家ニ被仰付置候得共前條外聞之趣ニ候ヘハ公邊之御裁許を難有ク引取候ゝ相聞左候得之此後混雜ニ及候樣之儀之有之間敷ゝ當時之模樣ニ而之先安心いたし候事御座候右之通大躰之模樣相分候付今三日右御飛脚中ニ而差立前條之次第得貴意申候此後若樣子違之儀も有之候ハヽ早速急便を以得御意可申候堀田備中守樣松平伊賀守樣ハ御隱居御願ヒニ相成候趣　公邊方御差圖ニ相成候由御座候右之外水戸一件ニ携りヽ面々餘計ニ有之候由ニ候得共其分之追而御咎被仰付筈ゝ之儀茂風評承り申候水戸御家老切腹其外死罪等之御辭令願ク此節差遣申度重疊御留守居ニも申談候得共何方方も今日迄ハ何分手ニ入不申候段申出候付次之御便ニ差遣可申以上

九月三日

長岡與三郎
有吉市左衛門

惣連名樣

八月廿七日幕府は水戸藩士の動搖を慮り會津外八藩に命じて江戸及水戸出入口の番衛を固めて警戒を嚴ならしむ

〔安政五年江戸自筆狀〕

未廿七日

一安藤對馬守殿當分之内水戸殿御屋形ニ立越御用向取扱候樣被仰出候由也

一右同日御固等左之通

豐前中津拾萬石
奥平大膳太夫
同國小倉拾五万石
小笠原右近將監
備後福山拾万石
阿部伊豫守
奥州會津貳拾三万石
松平肥後守
下總國宿五万八千石
久世大和守
同國古河八万石
土井大炊頭
常州大浦九万五千石
土屋釆女正
同國笠間八万石
牧野越中守
下野宇都宮十万石
戸田綏之助

江戸口々

水戸口々

水戸殿家來并領分之者共多人數御府内近郷迄出張致し居候趣此節柄不穩所業此上如何樣騷立候哉も難計左候而之水戸家之安危ニも相拘御爲ニ不相成候間時宜次第人數出し可被仰付候右之全水戸家を厚く被思召候而之事ニ候條其旨相心得兼而手筈致し置候樣及内達候尤一守ニも相達候間可被得其意候以上

右和泉守宅ニ銘々家來呼出シ書付相渡之

八月廿七日イ（日附は「尊攘錄櫻田並東禪寺一件」に據リ茲に記入す）

御使番
瀧川主殿

溝口八十五郎
京極左衛門
淺野一學
小出玄蕃
小栗又一

水戸殿家來并領分之者共多人數御府内近廓迄出張致し此節柄如何樣騒立候哉も難計候付時宜次第人數差出候樣別帋之通諸大名ニ相達候ニ付其方共儀も時宜ニ寄出張被仰付儀も可有之候時々御府内口々見廻り心付候樣可被致候　八月廿七日

八月廿八日幕府猥に外人宿所に出入することを禁する旨を布達す

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年肇起萬延元年九月迄）（八月廿八日脇坂中務大輔殿大目付より廻狀）

大目付ニ

外國人仮止宿所等ニ相詰候者ニ用事有之由を以猥ニ同所ニ相越候者も有之哉ニ相聞如何之事ニ候以後右樣心得違之者於有之者急度可及沙汰候

右之通可被相觸候

八月廿八日前閣老太田資始謹慎を命ぜらる

〔嘉永七年風說帳〕

一八月廿八日御沙汰書之内左之通

大御番頭　堀田豐前守
差添
大目付　遠山軍人正

太田道醇事思召有之慎可罷在旨被仰出候此段道醇ニ可相達候

右於御黒書院溜掃部頭老中列座和泉守申渡之

八月廿八日神奈川奉行水野忠德軍艦奉行に轉す

〔嘉永七年風說張〕

御勘定奉行兼帶是迄之通り外國奉行取扱

席之儀者是迄之通り

右於新部屋前溜和泉守申渡之

神奈川奉行
兼帶

右被仰付旨於芙蓉之間掃部頭老中列座和泉守申渡之

御軍艦奉行　水野筑後守
外國奉行　赤松左衛門尉
御書院番頭次席
外國奉行　溝口讃岐守
御小姓組番頭次席　赤松左衛門尉
同　新見豐前守

八月廿九日本藩高山秋藏山田己左衛門下總國八幡宿に於て水戸藩士の動靜を探る

〔安政六年自筆狀扣〕

八月廿九日下總國八幡宿川島屋庄平ゟ申旅籠屋ニ而承り且見聞仕候次第左之通

去ル五月廿一日ゟ水戸之御人數三百人餘八幡宿ニ滯留仕居申内川島屋ハ役所ゟ申候而御奉行御目附其外御徒士目附を始都合三十人余之泊りニ而諸事之捌方觸出且内密等日々程ニ寄合居申候處此間江戸御屋敷より役人躰之人來り内密御座候而ゟ追々ゟ引退候而右川島屋も八人相殘其外宿中ニ二三十人も相殘居可申山追々引退候人數之内ニも近キ村々に余程竊ニ滯り居候而夜中抔追々咄合有之候模樣ニ御座候尤主意ハ至而穩密之咄ニ而聞取ゟ申候而者六ケ敷御座候得共追々模樣何ゟも心懸居申候處此節御隱居樣　公邊以之外之御不首尾ニ付而者色々不穩風評仕候内どふゟ五万石位ニ御減知ニ而も被仰付前中納言樣に者遠島ゟ歟又諸家樣之御内に御預被仰付候樣風聞も承り若左樣之事ニも成行候而ハいつゟも立歸不申覺悟ニ而夫ゟ御國いつゟも相驚騷立所々に出張仕候而御隱居樣を御國に御供申上御住居御安穩ニ被爲在候樣打揃合訴奉願候模樣ニ御座候樣ゟ之咄承申候昨日茂終日外出仕候而夜半罷歸今朝六時出立仕候筈御座候處朝五半時頃所々ゟ相揃都合百人余茂相見申候人數一同出立仕候尤此節惣引拂之模樣ニ而荷物等も夫々持歸申候右見聞之趣申上候以上

九月朔日

高山秋藏
山田己右衛門

右隈目之聞方ニ而外ニ一通魚住新右衛門ハ前中納言樣御發駕九月朔日彌御出立ニ相成候迄書付外一通ハ石井九郎小金宿邊外聞人數等夫々引拂候ゟ之事一通ハ吉田鶴太本郷追分御屋敷九月朔曉御出立之御模樣ゟ之事扣略之

九月朔日水戸齊昭江戸を發して國に歸る

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

覺

此節水戸前中納言樣御歸國之御模樣聞取として被差出候ニ付同所方角に罷越所々承繕申候處明曉七時之御供揃ニ而本郷追分御屋敷御發駕之御模樣ニ御座候此段申上候以上

八月廿九日

吉田鶴太

〔仝書〕

覺

水戸樣御歸國之御模樣御屋敷御方角ニ而所々相尋申候得共寸斗相分不申候ニ付千住宿に罷越精々承繕申候處全今日御發駕ニ而右宿に朝五半時比御出御小休被爲在候山尤御行粧者弓筒迄位之御樣子ニ而御同勢者大勢ゟ而仙臺侯御上下之人數同樣位ニ茂有之候樣子ニ承申候其外格別言上之筋ハ承り不申候此段申上候以上

九月朔日

魚住新右衛門

〔安政五年江戸自筆狀〕（未ノ八月廿七日左之通とある内に）

一水戸前中納言殿今晩御當地御發途被成たる由之事

本文之通候處御用意濟兼九月朔日御發駕曉七時ゟ而千住御書飯之由御供廻御簡易ニ而張弓四張鉄炮拾八挺御駕廻も御人心御行列外後より五十人計鑓十本程ツヽ十連計ニ而追々ニ參候を見懸候由外使より相達

安政六年

〔嘉永七年風說帳〕（九月四日江戸表ゟ到來の書付の内）

一水戸前中納言様昨朝日千住朝御飯ニ而御發途相濟御行列至而靜ニ而御行列外ニ小梅御屋敷ニ出張之御人數凡五百人程も有之五十人宛計御跡より罷越候由見繕之外使罷歸り申聞候

一右御發途ニ付而之御國許ゟ別段貳百人餘茂御迎之心得歟罷越候處都而一同歸國之趣ニ相聞申候

一右之外ニ茂未數人入牢之者有之候得共何分一同ニハ御手ニ廻兼候由ニ而追々御沙汰ニ相成候趣内々承り申候右之京内之人も數人有之ものト相見申候

九月二日我藩石井九郎小金井驛附近に於て見聞せし水戸藩士の動靜を報告す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

八月廿九日より小金宿近邊見繕申候次第左之通ニ御座候

一千　住

一新　宿

右宿取付舟渡上り場之處富士屋と申候旅籠屋之内ニ目附役之由ニ而先達而より止宿仕居申候處昨朝日前中納言様御通行相濟候後者引拂申候由併荷物共ハ少々相殘居申候

一松戸宿

右宿中先達而ハ止宿之面々も無御座候處十日計以前より三十人計一所ニ止宿仕居右之内より八幡之方ニ茂通行致候由之處昨朝日同所書御休ニ付皆々割羽織たちつけニ而御迎として罷出居申候尤小金止宿之内よりも當所迄罷越申候由ニ而同所ニ御行列外之者一二千も居申程に見受申候

一小金宿

右宿中先達而より止宿之ゟ所々々見繕申候處昨廿九日ニ水戸ニ引取申候も有之全體先達而之半分位止宿ニ相成居申候由殘り者御迎として町中又者松戸宿迄罷越候も有之何ゟ茂松戸宿之面々服合一對ニ而町家店先キニ腰打懸居申候

一同所本出寺境内以前者二千餘茂居申由之處次第ニ引拂當時者以前之半分も居不申殘之面々も小金止宿之仁同様廿九日之夜出立も有之昨朝日早朝より小金松戸兩所ニ罷越居申候由尤何方も五六人又者兩三人道具才料と相見殘居申候

一一昨廿八日夜中水戸重役之仁之由名前等者不相分御家老位之人數ニ而通行有之候由松戸宿深更ニ而小金邊ハ廿九日未明ニ通行御座候由本出寺止宿之内よりも段々付添出立ニ付自然者御隱居様共ニ而者無之歟と宿々評判仕候併昨朝日曉七時之御供揃ニ而本郷御立松戸書御休小金御泊ニ而御本列松戸驛ニ而御休中ニ付御人體者不奉拜候得共全御行列者見受罷通申候尤御休泊御關札者無之候

一關宿　笠間　古河　土浦　結城

其外兩三家御固御人數差出被御付ニ相成候由於途中評判承り申候間實否爲承繕堀内喜左衛門ハ小金宿より相別彼方角に罷越居申候私儀者小金迄之近村止宿引拂之模様爲申上同所より昨朝日引返申候

右之通ニ御座候間此段御達申上候以上

九月二日　　石井九郎

九月三日幕府佛國と條約を締結したる旨を達す

〔尊攘錄皇武令、（安政五年筆起萬延元年九月迄）御同席觸寫大日付様御廻狀寫控〕

大日付に

今般佛蘭西國ゟ使節差越條約本書爲御取替相濟候此段爲心得向々に可被達候

八月

安政六年

九月某日營中土圭の間に於て捨訴をなす者あり

〔神庫文書 人印密書輯錄 七百三十印〕

先達而之一條ニ付而全躰一橋殿より御發言被爲在候御事柄ニゝ無之畢竟　前中納言樣御親子之御心より被爲出候筋ニ而右故ニ板倉外ニ兩人致相談先達而之一條之水戸殿御家來之仕業ニ而者無之全主人より申付之事故御仕置筋御手輕ニ相成候樣ニと掃部頭ニ相談ニ相成候處以之外御怒りニ相成鵜飼列茂重キ事柄ニ相成候右故歟此度於土圭之間捨訴之趣意者一橋殿御事御隱居被仰付候而者一統之氣受惡敷殊更御同方樣ニゝ御力量茂被爲在候御方故別而奉惜候心底より右樣之物落し候哉之風聞ニ候由

九月六日本藩曩に蘭船故障の際我警備地村民の救援せしを謝し物品を救助船に投入せし處分の件につき幕府に申告す

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

左之御方樣ニ九月六日朝吉弘加左衛門持參以御取次差上御落手

外國御用御月番

脇坂中務大輔樣ニ

當七月十三日越中守御預所相州三浦郡横須賀村沖合ニ和蘭陀船壹艘致碇泊候節碇岩間ニ掛り引揚難出來樣子ニ而越中守より差出候斥候之者ニ手眞似を以加勢之儀相頼候付浦賀御奉行樣ニ相伺扶助差加可然旨被仰聞候間翌十四日同所村方之者差出加勢爲致碇引揚遣候處謝禮之心得ニ茂候哉村方之者乘組居候船ニ煉物德利六ッ投込內二ッ者海中ニ沈四ッ船中ニ入候段申出候付右德利如何取計可申哉と外國御奉行樣ニ相伺候處右品村方之者ニ受納爲致右之趣御屆書差出候樣御差圖御座候依之此段申上候以上

細川越中守家來　清田新兵衛

九月六日

九月七日幕府は銅、唐銅及ひ眞鍮を以て器物を製作することを嚴禁す

〔尊攘錄皇武令〕（脇坂中務大輔渡）

銅鐵を以新規ニ佛像等鑄造いたし候儀幷佛器之儀も木製又ハ陶器ニても相濟候分銅鐵を以製造之儀可爲無用旨等去ル卯年相觸之趣も有之候處以後都而銅類ハ勿論唐銅眞鍮を以是迄製造致し來候品々外新規之品等製造賣買之儀ハ堅令停止もの也

右之趣御料私領寺社領共不洩樣可被相觸候

右之通可被相觸候

九月七日也

九月八日幕府九條關白廣橋大納言等に特殊の待遇を加ふ

〔嘉永七年風說帳、尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

去ル八日京都ニ被仰遣候趣

九條關白殿

當節御事多之折柄天下國家之御爲深く被存込諸事格別ニ被骨折　禁裏おゐても御安慮被思召候樣被致心配御忠誠之段被聞召候付出格之譯を以千石御加增被成遣且職務中別段五百俵ッゝ年々被遣候旨被仰出候

廣橋大納言

近來品々御事多之御時節出精相勤御感被思召候依之白銀五拾枚被下候旨被仰出之

九條殿家來　島田左近

格別出精相勤候趣奇特之事ニ候此段九條殿より被賞候樣且又御内々九條殿迄白銀三十枚時服三被遣候間右銀子時服左近に被賜候樣ニとの御沙汰ニ候

九月十日幕府鵜殿民部少輔黑川嘉兵衛等に免職隱居差控等を命す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

封廻狀

駿府町奉行
鵜殿民部少輔
名代
平岡與右衛門

思召有之候付御役御免隱居被仰付差控可罷在候

御先手
鵜殿十郎左衛門六男
鵜殿遠之助
名代
榊原一郎右衛門

民部少輔事思召有之候付御役御免隱居差控被仰付先達而假養子ニ茂相成候儀養子被仰付家督無相違其方に被下之小普請入被仰付之

右於本多越中守宅若年寄中出座松平彈正神保伯耆守立會越中守申渡之

精姫君樣御用人並
黑川嘉兵衛
名代
伊佐新次郎

御書物奉行
平山鎌二郎

思召有之候付御役御免小普請入差控被仰付之

小十人
本多一學組
平岡平九郎
名代
島田帶刀

不束之次第有之候付御番御免小普請入差控被仰付

右於本多越中守宅神保伯耆守立會越中守申渡之

九月十日
松平太郎
名代

九月某日幕府令して長崎廻り舶來小銃類の購買を許可す

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

長崎廻り舶來小筒類鉄炮洲船松町貳町目長崎屋源右衛門方おゐて賣捌候間万石以上以下諸家陪臣ニ至迄望有之面々之同人方ニ而買請候儀可爲勝手次第候

右之趣向々に寄々可被達候事

九月

十月七日橋本左内頼三樹三郎春日讃岐守等諸方の志士多く處刑せらる

〔採薇錄附錄〕

御小姓組
仙石右近組
曾我權左衛門家來

醫師
青堂養父
飯泉喜内

此飯泉喜内儀上方筋見物として上京致手寄を以堂上方家來に懇意を結三條家未勤家來ニ相成其比異國船渡來於京地不穩浮說之事實承り度存候迚兼而懇意ニ致候小普請松浦勝太郎家來本瀨志摩又者元小網町名主伊十郎等に事實聞込之儀賴遣有之者共より御書付御沙汰書又者町觸屆書其餘江戸表形勢又者風聞等之儀申越候を夫々堂上方家來等に爲見遣其上天災打續又者異船度々渡來致世上不穩儀を歎息致候迚折々一と言標願いたし種々之儀書綴候内神國之武將たる者是を解不得神威も不恐天のなせる災ハさくへからす抔と合點して居る時者御歎の儀凝て雨と成洪水し家々流堤を壞て田畑損毛するニ可至る抔不恐公義之事共書認森寺因幡守高橋兵部權大夫ニ差出歸京の後も在京中懇意ニ致候堂上方家來又者其節被地町奉行家來筭承三共時勢之儀を評し候文通等度々取替致右之内ニ者身分を不顧義ハ勿論取扱間敷書類又者御政事向ニ拘り候御役柄筋其余不輕未發之儀等志津摩又者土屋謙吉より承り込候迚文通ニおよひ有栖川宮家來飯田左馬より差越候由之　勅書等の寫を彌七召仕源助に貸遣且身分有附聞合之爲下田奉行手附出役大沼又三郎と懇意ニ相成折節魯人參府愛宕下眞福寺逗留中ニ付異人之樣子直ニ見聞致度迚猥ニ同所に罷越又三郎に面會之儀申込名前申不得居合候者控居候樣申聞候迚其場ニ罷在候魯人の樣子見受立歸る始末不屆ニ付死罪

三條殿家來
丹羽豐前守

此丹羽豐前守儀外夷御所習振之儀ニ付水戸前中納言殿思召之趣關東に御達に相成候樣主家に取次候儀又者御養君之儀者一橋刑部卿殿ゟ御名指ニ而御所向より關東に被仰遣候樣致方夫々主家に取持之儀熟飼吉左衛門同人悴幸吉より賴受候迚右者不容易儀と乍心附承請其度々前内府殿へ入内懇御沙汰之趣も有之迚不輕義ゟも幸吉に賜爲聞殊ニ右前中納言殿其外御所向相成候樣取次之儀右幸吉並日下部伊三次より賴受候儀をも其儘主家に申立置其上殿中御沙汰書京地之模樣其外當時之形勢等御政事筋ニ拘り候儀も不憚飯泉喜内と互ニ文通ニ認め取遣致一體神養君之儀者不容易御事柄に候處右吉左衛門父子より賴受候迚其儘主家に取次致聚と面會いたし候覺も無之伊三次茶屋向ニ而出會不輕儀賴受猶彼是取次等致候段者主家に内謀荷擔を取持候道理ニ相當り右始末不屆ニ付中追放

應司殿家來
高橋兵部權大夫

此高橋兵部權大夫儀飯泉喜内と懇意を請珍說を好候迚京地又者御當地之形勢又者風聞等相互ニ取遣致右之内ニ者御政事向ニ拘り候儀とも有之候を如何之儀共不心付取扱候段不埒ニ付五拾日押込

御藏小舍人
安藝守悴
山科出雲守

此山科出雲守儀墨夷之儀深被爲惱　宸襟候旨禁中大乳人より噂有之候間右事情承り度旨壬生家被申聞候迚兼而知る人飯泉喜内に文通を以度々問合江戸表風聞之趣同人より文通を以申越又者於神奈川墨夷に御渡ニ相成候段假條約寫其外喜内筆記之品等追々差越右之内ニ者乍浮說御政事筋或者御役人取計振等之儀認有之候處如何之儀共不心付寫取又者本書之儘壬生家裏辻家に差出又者懇意之者共にも喜内より申越之趣噂ニ及候始末不屆ニ付永押込

有栖川宮家來
飯田左馬

此飯田左馬儀世上之珍事奇說等諱忌嫌疑之無辨別も飯泉喜内と取遣致又ハ主家若宮外夷御所置振之儀ニ付建白書草稿迄添削可致樣申付請候節自己之趣意等差加候儀者無之由ニ候共近來異賊とも勝手儘之取計致候迄者何ニ嘸嚴制不被仰本ノマヽ

出候而者當今之人心居り合不申詰り萬民撫育之良策無之候而者終ニ日本衰微之基ニ有之抔右宮ニ申立候迄自存意を請筋々相當致し殊ニ先般水戸殿　勅諚之趣寫取濟州藩ニ廻達ニ相成候者關東御所置變革可致抔喜内ニ申遣候段假令一時之奇事を爲知候迄之心得ニ候共京家來之身ニ而者別而尊崇可致之處右體不容易御品柄猥ニ流布爲致候段旁不埒ニ付百日押込

小普請組當時明き組本ノマヽ、
下田奉行手附出家
大沼又三郎

右大沼又三郎儀魯人旅宿愛宕下眞福寺ニ喜内罷越旅宿館並夷人之樣子見請候者頼受見物爲致候儀者無之候共一時之懇意且者奉公口等頼聞候程之者ニ假令差障ニ不相成義ニ候共勤場所之噺等致又者夷人より貰請候蘭書蔵等任望差遣候より猥ニ喜内詰合先ニ而面談可致心得ニて右場所ニ立入候次第ニ至り候始末不埒ニ付五拾日押込

御小姓組
仙石右近組
曾我權左衛門家來
醫師
飯泉春堂

此飯泉春堂儀喜内在京中恐多事共書綴り又者江戸表懇意之者共ニ時勢之風聞不輕義書狀ニ取遣致候儀者不存候共神田久左衛門町貳丁目藏地家持鐵之助後見彌七召仕源助共ニ相頼何れも喜内別懇之者共ニ付雖默止候迚元小網町名主ニ而缺落致候伊十郎を數月宅ニ差置候始末不埒ニ付三拾日押込

神田久左衛門町貳丁目
藏地家持鐵之助後見彌七
召仕
源助

此源助儀伊十郎者小網町名主ニ而缺落致候者と乍存右同人任頼口添飯泉喜内悖春堂方ニ差置せ候共上右喜内より借受候書類之内ニ者尤他見等可憚品とも有之候處共心付も無之寫取返却可致と借請殊ニ同人被召捕候之趣承り右品隱居候始末不埒ニ付三拾日手鎖

小網町壹丁目名主に而
缺落致候無宿
伊十郎

此伊十郎儀奇事珍說等筆記致候儀を相好み飯泉喜内共外之者共と取遣致候筆記之内に者猥ニ他見等致候儀尤可憚品等も有之候處共心得も無之共上困窮ニ而取續兼候迚役儀をも相勤候身分町方缺落致候始末不埒ニ付於溜三拾日手鎖

西圓寺殿家來
藤井但馬守

未三月十三日小笠原右近將監家來ニ改預同九月朔日病死

松平越前守家來
橋本左内

此橋本左内儀近來異船度々渡來海防筋厚御世話も有之候折柄根元御手厚ニ無之候而者難相成右ニ付一橋刑部卿を御養君ニ被爲立候樣致度候旨御所向御模樣聞繕方且右爲手入上京可致旨先代越前守より申付有之候共右體の儀京地周旋致候ニ者不容易儀と心附重役よりも申聞候主家不爲之儀無之樣取計可申處共儘承り受上京之上應司殿三條殿ニ立入頻に

致手入殊ニ應司殿ニ而者右廻筋者越前守直書を以可申越事柄ニ候樣同家來小林民部權大夫申聞候をハ尤と聞請候迚是
又不輕儀を自己之勘辨を以主家に申遺候故既ニ先越前守直書之内狀三國大學方迄差越候義民部大夫より應司大閣殿に
入内暨候次第ニも至候段不憚公義致方右始末不屆ニ付死罪

應司殿家來　三國大學

此大學儀先松平越前守家來橋本左内事桃井伊織と變名致罷越候儀を不心付候共一橋刑部卿殿を御養君ニ被爲立候樣致
度共段御所向より公邊に御沙汰ニ相成候樣致方大閣殿に申上呉候樣取持の儀賴請候共右者不容易儀ニ付取扱申聞敷處
只管相賴難默止存候迚右之趣小林民部權大夫に咄聞同人に左内を爲引合候故既民部大夫儀願之趣者越前守直書を以可
申越樣不輕儀を談判及候次第ニ至候段右始末不屆ニ付山城中構江戸拾里四方追放

三條殿家來　森寺因幡守

此森寺因幡守儀堀田備中守外夷御所置振　叡慮爲御伺上京之砌松平越前守家來橋本左内儀も越前守並松平土佐守より
内意請上京致候由ニ而罷越備中守に　勅答之御次第御渡し方之儀並御養君之儀御所向より御名指ニ而被　仰遣候樣致
度との趣主家直ニ申立度候間按露相賴候旨申聞土佐守よりも其段直書ニて申越候共何茂不容易御事柄ニ付如何之儀と
心付取計方も可有之處無其儀又者浪人山本貞一郎尾水越三侯御憚解之儀ニ付志願之次第主家に直ニ申立度由を以同人
に主家面謁之儀取持方宇喜多一憲より賴請候節病氣引込中ニ候者猶更之儀疑と斷決而取合申聞敷處右をも正親町三條
家に可申込旨差圖ニ及或ハ土屋謹良方より京地に浪人者入込候取調江戸表ニ於て有之候間油斷致間敷と申越候迚貞一
郎身分ニも可拘哉ト得其意松庵に心附遣候段右之者共と馴合候筋者無之候共右始末不屆ニ付永押込

右因幡守悴

森寺若狹守

此森寺若狹守儀浪人山本貞一郎主家ニ拜謁之儀兼而懇意ニ致候宇喜多一憲父子を以賴聞候共身元慥不成容易ニ御逢等
者難叶旨可申斷處國家之御爲且者一大事之儀を申上度旨申聞候迚貞一郎任申取次申立候より右體之者に度々御逢等有
之次第ニ至り殊ニ京地浪人入込候由ニ而謂有之趣承り込候迚父因幡守倶ニ貞一郎身分一憲迄心附遣し且貞一郎病死後
召連候者被召捕候期ニ至り同人所持之書物之由松庵致持參候を一旦預り候始末不屆ニ付中追放

青蓮院宮家來　伊丹藏人

此伊丹藏人儀京地儒者梅田源次郎と外夷御處置之儀品々議論ニおよひ詰り
天子御親征之外無之抔不容易見込之趣宮に建議致度旨源次郎申聞候共御法之儀右體之儀ニ預聞敷處外夷者兼而御苦心
有之候迚宮に申立候故既ニ源次郎に御面議猶品々御議論有之其後同人建白書等度々致取次又者砂村六次と變名致候浪
人山本貞一郎表向筆道之儀と申立内實關東此節柄之儀宮に内願致候事ニ付取持呉候樣宇喜多一憲賴候を如何之儀共不
心付其段宮に申立候故山田勘解由より貞一郎内塑之趣被聞取近衛殿に手入之儀宮勘解由を以貞一郎に御差圖有之候次
第ニ至り候始末不屆ニ付中追放

同家來　山田勘解由

此山田勘解由儀砂村六次と變名致候浪人山本貞一郎を宇喜多一憲召連參り貞一郎者筆道之儀ニ付宮に面謁致度取次呉
候樣相賴候節實者水戸前中納言殿等御憚解之儀其外不輕儀を内願ニ致候心得之旨を以相咄右者不容易儀乍心付貞一郎
申聞候始末宮に御聞ニ入候より既成就院隱居忍向を以近衛殿に手入等之儀御沙汰之品有之候を如何之儀共不心付猶貞
一郎に面會之儀申遺候忍向に之文通をも右之者共に相渡候始末不埒ニ付五拾日押込

京都木屋町三條上ル
上大阪町久助借家
儒醫
宇喜多一憲
同人悴
同　松庵

此宇喜多一憲同松庵儀兼々知る人山本貞一郎砂村六次と變名上京致先尾張前中納言殿松平越前守等御咎被仰付候已來世上騷敷候ニ付　勅使御差下夫々御咎御免越前守ニ者御當代御補佐相成候者公武御合體國家之御爲ニも可相成間右之趣三條家其外等ニ懇願致度存候得共高貴向へ猥ニ立入兼候間勘辨之上入説致呉候樣相願候迚下賤之身分をも不顧不容易事共内願致度抔申聞候を如何之儀共不心附一憲者三條家又者正親町三條家松庵は清水成就院隱居忍向相頼近衛殿に口入致遣候故既ニ貞一郎不輕義共夫々被好訴致次第ニ至り候段假令手續致遣候儀ニ而右願意可爲蒙ニ彼是困苦致候心底ニ者無之候得共右始末兩人とも不屆ニ付所拂

松平丹波守領分
信州松本本町貳丁目
大名主　茂左衛門

此茂左衛門儀浪人山本貞一郎一同水戸前中納言殿其外尾越兩侯御寃解等之儀ニ付堂上方ニ入説等致候儀者無之候得共貞一郎儀右御方々御寃解之儀堂上方ニ手入致度候得共其筋手寄も無之候間上京之上正親町三條家ニ手引可致呉旨頼聞候を不容易儀と乍存付貞一郎存込通相成候得ハ自ら餘光も可有之儀と存量同人共ニ上京致候段假令貞一郎存意之次第者字喜多一憲吹聲を夫々ニ入説致候儀ニ而手引致候義者無之候得共右之始末不屆ニ付中追放

三河町三町目
辰次郎店
仁三郎寄子
清　七

此清七儀不埒之筋も無之候ニ付無揣

松平丹波守領分
信州松本本町貳丁目
十兵衛才領
源　右衛門

此源右衛門儀主人十兵衛用向ニ而上京歸京之砌知る人町内茂左衛門より同人留守宅ニ之書狀屆方頼受候共其比道中筋ニ於て旅人休泊其外改方嚴敷趣を以竊ニ持越方之儀申聞如何之儀と心附候程之儀ニ候ハ、取計方も可有之處斷も致兼候迚右書狀股引之内ニ相隱可持越と致候始末不埒ニ付三拾日手鎖

林部善太左衛門御代官所
武州葛飾郡寺島村百姓
仁兵衛借家
浪人　山本貞一郎娘
　　む　め
　　さ　ひ
同人　妻　と　よ

此じめさひとよ儀水戸前中納言殿御寅刻之儀ニ付御所向手入之爲貞一郎上京致候旨申聞候を右者輕輩之身ニ而携間敷不容易筋と乍心付其儘ニ打過殊ニ御同人御身分等ニ付内説も有之候者可申越旨貞一郎出立前申聞候儀も有之迚不取留儀も隱語に認め同人方ニ文通致候段親主人之申附ニ候共一同不埒ニ付急度叱り置

林部善太左衛門御代官所
武州葛飾郡八左衛門
新田當山修驗
利益院　行　阿

右利益院行阿儀不埒之筋も無之候間無搦

一條殿家來
入江雅樂頭
若松杢權頭

此入江雅樂頭若松杢權頭儀武田丸十丸者和田吉と申無宿者ニ候處得と身元も不相糺主人家立入之儀吹擧致候ゆへ既ニ右體の者ニ近江と申呼名を被免候次第ニ至り其上主家より右近江に關東重き御役人等墓目の術を以退散の祈禱申付候樣差圖有之候者不容易筋と心得取計方も可有之處如何之儀共不心附雅樂頭者内大臣殿より被相渡祈禱之趣意書等祈禱料一同近江に相渡候段同人儀不輕義相唱奇怪之祈禱致候段主命を請取計候義ニ候共雅樂頭者別而之儀右始末兩人共不屆ニ付雅樂頭は中追放杢權頭ハ洛中洛外を搦江戸拂

京都鳥丸御池上ル町
町中借家
梅田源次郎

未三月十三日小笠原右近將監家來ニ改預同八月十四日病死

此頼三樹三郎儀外夷海防之儀ニ付猥ニ浪人儒者梁川星巖又者梅田源次郎と御政事ニ拘り候國家之重事を議論ニ及不容易儀を申唱堂上方ニ入説之儀星巖と種々申合候より人心惑亂致し天下之擾亂を釀候委に至り不恐公儀致方右始末不屆ニ付死罪

河原町三條上ル
夷町てる借屋
儒者
頼三樹三郎

久我殿家來
春日讃岐守

此春日讃岐守儀京地浪人梁川星巖と外夷取扱振之儀品々及議論同人見込之趣入説之意味ニ申聞候迚時々主家に申立其上星巖より　朝廷之御論如何ニ候哉扨文通有之右者外夷御取扱振之朝議相伺之儀ニ相察主家噂之趣並其頃之風聞等合考必一定の御論ニ可相成扨同人へ申遣又者下總守殿上京之上暴政可被行との風説ニ付大津驛迄出張御所置之可否を御同人に可申上旨星巖申聞候を如何共不心付却而可然旨及答其節同人大津驛迄出張候儀等者無之候共右體不預事ニ携候始末不屆ニ付永押込

京都六角油小路西に入ル町
龜屋源次郎方借家罷在候大
覺寺門跡家來
六物空萬

此療病院六物空萬儀同院ニ傳り候占療法を以病氣療治又者宿耀祈禱之義ニ携候身分之趣乍申立所々町家女子共ニ密通又者呉服師龜屋源次郎地面借受對談故障之儀有之迚年來無賃ニ而住居罷在右樣不埒之行跡之身分を以占療之趣ニ候迚不憚御命運等之儀書綴殊ニ御治療御祈禱之儀内命有之候共至而恐多儀ニ有之候處御祈禱之上御藥又者供物等差上假令御上りニ者不相成候共手段を以調達致す始末身分を不知所行不屆ニ付遠島

鷹司殿家來　兼田伊織

水戸殿家來　太宰清左衛門妻　せゐ

此兼田伊織儀不埒之筋も無之ニ付無搆

松平伊豆守領分　奥州伊達郡金原田村　百姓　八郎

此せゐ儀不埒筋無之候間無搆

此八郎儀兼而水戸殿ニ召抱ニ可相成と知る人御同家々來太宰清左衛門ニ身分吹擧之儀相頼右心願書相認同人ニ差出候處其後何等之沙汰も無之迚御政事向之儀ニ付存意之次第認め清左衛門ニ認遣置候儀不恐公儀仕方不屆ニ付遠島

芝田町七町目　重五郎店浪人

此浦市正儀先年水戸中納言殿御在城中御暇被仰出候節御赦方之儀日下部伊三次并尾藤高藏より頼請候迚身分ニ携間敷義を元主家ニ申立又者蝦夷地開發見込之次第も有之候ハヽ其筋ニ可申立候處書面に書綴り家遠之向ニ貸遣し重き御方ニ入内覽其上元一條殿家來ニ而市正と相名乗候共暇ニ相成り浪人致す上者改名可致處其儘市正と名乗罷在候始末不屆ニ付所拂

浦市正

三條殿家來　富田伊織

此富田伊織儀日下部伊三次者主家先年傳奏御役中下向之砌館入候儀も有之見知之者ニ候迚同人江戸拜謁儀取次申立引續度々御逢之節其場ニ者不罷在候共伊三次願之趣同人より承り候儀も有之候ハヽ心附申立方も可有之處既同人願之趣意相立難有旨及挨拶申聞候をも其儘ニ取次罷在候始末不埒ニ付五十日押込

松平修理大夫家來　日下部伊三次

午十一月八日揚屋入同十二月十三日内藤播摩守家來ニ改預同月十七日病死

右於評定所松平伯耆守久貝因幡守石谷因幡守池田播磨守松平久之丞立合伯耆守因幡守播磨守申渡之

十月七日（安政五年江戸自筆默に此日附あり）

十月十一日山内容堂謹愼を命せらる

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、街談紀聞〕（藤宰愼此著）

山内遠江守

松平鹿次郎父容堂に被仰渡之儀有之平賀駿河守被差遣候其方ニ茂差添可罷越候

右於御黒書院溜掃部頭老中列座紀伊守申渡之

松平容堂

御達之趣

其方儀家督中堂上方に不容易事共申通候趣相聞候京家に通路之儀ハ猥ニ致間敷筈之處右體之次第不憚公義致方ニ付急度茂可被仰付處當時隱居之身分ニ付御宥恕を以慎可罷在旨被仰出之

十月十七日江戸城火あり

〔安政五年筆記或元年九月迄〕

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（内藤紀伊守渡　大目付より）

大目付に

御本丸炎上ニ付

公方樣西丸に御立退被遊候ニ付明十八日爲伺御機嫌惣出仕有之間西丸に四時可有登城候

但病氣幼少之面々之掃部頭月番之老中に以使者御機嫌可被相伺候在國在邑之面々之飛札可差越候

右之通可被相觸候

十月十七日

大番頭

十月十九日幕府大番頭土岐頼旨に隱居を命す

〔安政五年自筆狀〕

一未十月十九日左之通

申渡之覺

思召有之候ニ付御役御免隱居被仰付差控可被在候

右於安藤數馬守宅若年寄中出座同人申渡之

大目付遠山甲斐人正御目付松平次郎兵衛相越

土岐丹波守

名代　土岐治右衛門

中奥御小姓

土岐大隅守

名代　土岐右近

父丹波守思召有之候付御役御免隱居被仰付候付家督無相違其方に被下之

右同人宅ニ而若年寄中出座同人申渡之御目附松平次郎兵衛有馬帶刀相越

十月廿日水戸藩無願出府の藩士等を罰せし旨を幕府に申告す

〔安政五年江戸自筆狀〕

一同月（十月）廿日左之通

水戸殿家來水戸表ニ罷在候輩之内無願出府いたし候もの共追て多人數ニ相成私共取鎮方不行屆國法茂有之儀被對公邊被致心配候畢竟役柄取締方不行屆之故ゝ不調法之至ニ付嚴重之沙汰ニ茂可被及之處於公邊茂此後國政居合候儀被思召御寛宥之御沙汰ニ茂相成候付逼塞被申付候此段御屆申上候以上

十月廿日

山野邊主水正

十月廿七日幕吏本郷丹後守石川土佐守等隱居謹慎を命せらる

〔安政五年江戸自筆狀〕

一未十月廿七日左之通

（本朱書）安政四年御側衆ヨリ御取立駿河川成一万石ニ被封置候ナリ

勤役中勤方不宜段達御聽急度茂可被仰出之處出格之思召を以御加增之内五千石被召上隱居被仰付急度相慎可被罷在候

本鄕石見守

名代本多丹下

（本朱書）初若年寄

本鄕丹後守

名代内藤十郎兵衛

父丹後守勤役中勤方不宜段達御聽急度茂可被仰付處出格之思召を以御加增之内五千石被召上隱居急度慎被仰付爲家督

共方ニ五千石被下置寄合被仰付之

右今晩於中務少輔宅老中列座同人申渡之大目付伊澤美作守御目附松平次郎兵衛相越

石川土佐守

（本朱書）初御側衆也

名代小倉金右衛門

父土佐守――爲家督其方ニ貳千石被

勤役中勤方不宜段達御聽急度茂可被仰付處出格之思召を以知行之内七百石餘被召上隱居墳被仰付之

中奥御小姓

石川豐前守

名代水野采女

下中奥御小姓御免寄被仰付之

思召有之小普請入被仰付之

右於安藤對馬守宅若年寄出座同人申渡之御目附大學主膳溝口八十郎相越

佐々木信濃守

名代今井左右橘

十月廿七日幕府吉田寅次郎藤森恭助等を處刑す

〔安政五年江戸自筆狀〕

一未十月廿七日左之通

水戸殿家來伊豫助忰

茅根熊太郎

吉右衛門二男

鵜飼喜三郎

同人三男

同貞五郎

伊太夫忰

鮎澤力之助

同人二男

同大藏

中追放

遠島

右評定所ニ而五手懸立會申渡有之候事

〔仝書〕

一未十月廿七日左之通

松平太膳太夫家來杉百合之助ニ

引渡螢居申付置候浪人

吉田虎次郎　三十歳

死罪

御鉄炮方井上左太夫組

藤田忠藏　三十九

藤村權左衛門組

御掃除之者

岩本常助　四十四

押込

水戸殿家來
大竹儀兵衛
水戸殿領分常州茨木郡鈴
高野村當山修驗寶壽院厄介
中追放
松平讃岐守家來ニ而致出奔候　五十九
長谷川宗右衛門　五十七
同人悴　同　速水　二十二
永押込申付
主人方ニ引渡
松平修理太夫家來伊三次悴　日下部裕之進　二十五
阿部十次郎家來豐作悴　勝野森之助　二十
遠島
同家來　勝野保三郎
右豐作妻　か
同人娘　ゆう

四〇四
御鑓奉行岡部土佐守家來
押込　筧承三郎　二十
伊達遠江守家來
重追放　吉見長左衛門　四十五
二丸御留守居
古閑謹一郎家來
中追放　藤森恭助
紀伊殿領分勢州飯高郡柏坂村用達町人
江戸拂紀州殿領分構　格太郎　三十五歳
奥州盤城郡住吉村兼照院役僧
長谷院
知順　二十六
水戸殿領分常州茨城郡
中大野村百姓
無構
甚右衛門　五十三
行方郡矢畑村百姓
岸十　五十二
右評定所ニ而松平伯耆守久貝因幡守石谷因幡守池田播磨守黑川左仲立會伯耆守因幡守播磨守申渡之

〔竹下勇次郎編錄〕
〔採　導　錄〕
吉田松陰先生先月廿七日死罪被仰付候處誠ニ行規正敷立派之最期ゝて綏々ゝ辭世之歌を唱へ被爲終爲人々感涙を流し候由即日萩家中吉田同志小寺新之丞飯田松伯死骸を乞受兩人自ら羽織ゝ包み擔ひ候て芝ゝ泉岳寺に葬り收め候由感心之事ニ御座候

十一月五日薩藩主島津茂久直書を以て藩士を諭し自重せしむ

〔加屋霽堅集翻錄〕
〔撿反雜記〕（木庭保久氏藏）
一書曰　太守樣御書取謹寫
方今世上一統動搖不容易節ニ候萬一之節
順聖院樣御深意を貫き以國家奉守護
天朝可抽忠勤心得ニ而各有志之面々深相心得因家之柱石ニ相成我等之不肖を輔不汚國名誠忠を靈果候樣偏ニ賴存候仍如件
安政六年巳未十一月五日
源茂久花押
誠忠之面々に

右は有村次左衛門懐中ニ有之候由
右越前福井生所持仕居候を寫候事

十一月十一日本藩更に藩人の私に高輪邊に至り外人に不法を加ふることを禁す

〔安政五年ゟ文久二年迄觸狀扣〕

覺

外國人ニ行逢候節臨分相慎速ニ通り拔彼ニ取合不申樣且高輪品川邊別而異人徘徊いたし候付御用之外彼方角ニ者不罷越樣との儀茂及達置候處不相守却而此方ゟ異人ニ對し不作法之仕方ニおよひ候族茂有之哉ニ相聞不都合之至ニ候以來右樣之儀相聞候ハヽ吟味之上屹ト御咎被　仰付筈候條左樣相心得慎方等之儀家來末々迄茂嚴敷可被申聞置候此段觸支配方ニ茂可被達候以上

十一月十一日

井上加左衛門ニ

十一月十五日幕府は水戸藩鮎澤伊太夫を豐後佐伯藩に應司家諸大夫小林民部大輔を肥後人吉藩に生涯禁錮すべき旨を達す

〔安政五年江戸自筆狀〕

一未十一月十五日左之通

右和泉守殿御宅ニ毛利安房守豐後佐伯家來御呼出在所ニ差遣生涯捕籠置候樣御達有之　八月廿七日遠島被仰付置候　水戸殿家來　鮎澤伊太夫

右同斷相良越前守肥後人吉家來御呼出在所ニ差遣生涯捕籠置候樣との御達有之候事　應司殿家來　小林民部大輔

十一月某日幕府は洋銀同位の銀を以て壹歩銀を增鑄して取引を容易ならしめ且つ洋銀を以年貢其他の諸上納をなすも差支なき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目付ニ

外國金銀其儘通用被仰出金ゝ金銀ゝ銀ゝ量目を以取遣致し候筈ニ付新小判壹歩判貳朱銀目方之割合ニ應し可致通用旨最前相觸置候處今般洋銀同位之銀を以壹歩銀吹增被仰出候間外國銀ゝ壹歩銀ゝ量目掛合之上取引可致候一洋銀之儀御年貢金其外諸向上納金之內へ取交候ゝ勿論皆洋銀ニ而も勝手次第上納可致候尤世上通用之儀彌以國々迄無差滯可致通用候

右之趣御料私領寺社領共不洩樣可觸知者也

十一月

十二月五日横井平四郎越前を發し歸國の途につく

〔安政六年江戸機密間日記〕

御口上

越中守樣益御安泰被成御座珍重思召候兼而御願之上御貸被進候横井平四郎門弟ゟ中越候由ニ付存命中對面被致度旨尤ニ相聞へ候付指懸り不得止事任其意當月五日福井表差急出立有之旨飛脚を以申越越前守樣被成御承知候就而者兼而御願之上御貸被進福井在留中之儀ニ候得ゝ追而病躰落着次第必ゝ早々被相越候樣平四郎殿ニ御國許ニ而示談候處承知ニ而肥後表ニ而御差圖御座候ハヽ可罷出との御事御座候由是又申遣候間此段御承知之上宜敷御沙汰ニ相成候樣被成度候且又此程別段ニ御願被仰進置候通來御在國中其儘御貸被進候樣被成度との儀ゝ御返答無御座內右樣無據儀ニ而一段被罷歸候得共何卒御承知被成進候上於熊本表平四郎殿ニ改而仰付ニ相成候樣被成下度右之趣厚相心得及御賴談候樣越前

一守様被仰付候以上

十二月　　秋田彈正

十二月七日青蓮院宮尊融法親王隱居し是より獅子王院宮と稱せらる

〔安政二年異國船一件〕

十一月七日

粟田口

青蓮院宮様

御隱居永蟄居相國寺塔頭桂芳軒へ御引移被遊獅子王院宮と被稱候

十二月十五日藩主齊護江戸城修築の爲め銅五萬斤を提供せんことを幕府に申請す

〔安政六年江戸機密間日記〕

御本丸御普請ニ付上納金仕度旨御内意奉願候處相模國御備場御用被仰付候付容易ニ難被仰出候得共御時節柄を恐歎致し相願神妙之至ニ付内願之通上納金可被仰付員數之儀者存寄次第差上候様尤御用ニ可相成國産之品等ニ而献納候共何ゟニ而茂不苦段御沙汰之趣難有仕合奉存候此節之御儀ニ付成丈致出精相應之金高相納度奉存候得共近年臨時非常之手當筋且震災水害損毛等ニ而國力疲弊之折柄如何體ニ茂存念通相調兼心痛罷在候處此度格別御沙汰之趣誠以難有奉敬守候依之御用ニ相成候ハヽ所持之唐銅五萬斤程差上乍聊差寄之御用途ニ被差加被下候様仕度奉存候此段相伺申候且又近年於領内銅山之見立有之候付問掘致し出銅果敢取次弟猶献納仕度存念ニ御座候尤右銅山開發之儀者別途ニ相伺候様可仕候以上

十二月十五日　　細川越中守

同月廿一日指令

伺之通可被相心得候納方之儀ゟ御普請掛御勘定奉行同吟味役可被談候事

十二月十八日大老井伊直弼水戸家に對して去年八月の所謂密勅を返上せんことを迫る尋て水戸騒擾し過激の徒百餘人長岡驛に屯集す

〔夷事輯錄、撥反雜記〕

水戸家に勅諚返納被仰下付御國中騒動之事

昨年八月八日前中納言殿に被下置候　勅諚之書附并添書共返上有之候様被仰出候段傳奏衆ゟ別紙之通被申越候間早々御返上可被成候事

十二月十八日　　井伊掃部頭　松平大和守　脇坂中務大輔

〔仝書〕

勅諚返納名義論

或曰此度　勅諚御返納被遊候様　水戸家に御達可被成旨　公邊に　勅命有之候趣安藤對馬守を以被仰出候付是迄種々議論有之候得とも約る處御返納と御返納無之との二ツに過不申候乍去御返納之儀者至而安く御返納無之儀者至而難き事故御返納に相決可申と申候付御返納ハ易ク御返納無之儀ゟ至而難きとの御論如何之御見込に可有之哉と相尋候處御

家ニ御下ニ相成候　勅諚御返納と申儀者如何ニも殘念之事ニ候得共御返納被遊候樣京師ゟ被仰付候儀を御違背被遊候ハヽ此上兩君樣ニ御違　勅之御譴責を被爲蒙候樣相成候儀も難計左候節ハ社稷之存亡ニも拘り候樣之儀ニも至り可申と存候得之御返納無之儀者至て難き事と奉存候又御返納之儀　京師ゟも被仰出候ヘハ　公邊ニ而も元ゟ好ミ候處故右様自愛致し大老閣老衆に能ふゝふし候得之御恢解と　勅諚御返納と御引替之樣ニも可相成又其上ニも御家之御爲筋之儀ニも可有之且安藤殿も是迄御厚恩蒙り候御家之儀故御不爲之儀者決而不仕候樣申候ゝニも承及候尤　勅諚御返納と立カ申儀古來ゟ其例無之事ニ而名義相立不申樣之論も有之候ヘとも公邊に御返納ニ相成其上ニも　京師に御使被爲在是迄之事情を御申立ニ相成候得者御申譯も相立可申又閣老連印之書付を被爲取候而納候ハヽ後難も有之間敷と申說も有之尤之樣被存候故御返納之儀と至而易き事と申候扨御論如何と被申候ニ付挨拶ニ及其論とハ大きニ相違致し候愚見ニ而之御返納之儀至而難御返納無之儀と却而易き事と被存候其儀と申ハ申迄も無之御承知之事ニも可有之候ヘとも第一勅諚御下ケニ相成候儀之西洋諸蠻我國ニ望を懸候義ハ年久敷事ニ承候得共其日本之武勇ハ恐怖致居候故容易ニ手出不相成候處太平久敷打續候ニ付自然と武道を忘ゝ奢侈之風俗ニのミ成行候而已ならす水野越前守御老中之節打拂之御良法ヲ御止メニ相成候より我國ニ而武邊ニ忘りたる事を察し去ル癸丑墨夷始て下田港ニ渡來致候ニ而官吏被及應接候節此方ゟ是ハ日本國法故相濟候儀不相成候樣斷候處不取用遂ニ夷賊之申聞通り御指免ニ相成候付以來愈以日本ヲ輕蔑致し近海測量等之儀ハ不及申交易之儀を始とし江戸表遊歩恐多も大城に登り將軍家に拜禮等迄も御指許ニ相成候淺ミゟ深ミニ至り彼ゟ術中ニ陷り申候且交易之儀をも不取用のミゝらす英吉利清國ニ打勝其勢ニ乘シ押掛る勢之旨夷賊之虛言を信用ゝゟし叡慮を奉伺候詮も無之神奈川ニ於而假條約取結ひ　天朝を輕蔑致夷狄を恐怖致候ニ相當り候達書等差出勿体ふくも征夷將軍の御武威ヲ汚候始末言語同斷之儀共剩御三藩奉始御家門并ニ御譜代大名外樣之内ニも　公邊之御爲筋を深く被思召時々御建白も有之候御忠誠之御方樣ヲ嚴重御咎被仰付抔　公邊ニ而内外之御所置を取失ひ居候樣ニ而者天下之安危にも拘り候儀故更ニ深く被腦　叡慮第一國内治平公武御合体益御長久之樣德川之御家ヲ御扶助有之内ゟ無外夷之侮を不受候樣被遊度被思召候處　公邊ニ而已勅諚御下ケ被遊候而者御傳達如在之儀も御不安心ニ被思召且　將軍家ニ被爲次候御家殊ニ　尊王攘夷之儀ハ威義公以來之御趣意故御代々樣御續被遊厚く御心懸被遊候御忠節之段者兼而御承知ニ被爲入候儀故御依賴被遊　勅諚御下ニ相成候儀ニも可有之　中納言樣ニおひてハ　公邊に御對し被遊威義公以來御代々樣へ被爲對天下萬民ニ御對し被遊候而御面目無此上御事故　勅諚之御受も被遊候通不肖之身右之鳳詔を奉受候儀誠以一家之面目感激之至筆紙難盡奉存候乍不及幾重ニも盡力仕成否之兎も角も追而言上可仕云々被遊候儀と奉伺候實ニ以難有御事ニ而於臣下ハ感涙ニ咽ひ候事ニ御座候左候ヘハ不日ニ御傳達可被爲在候　公邊を御扶助被遊外夷を退ケ威武を海外迄鄰し　神州之御國辱を御洗雪　老公御始御親藩御家門之御冤罪御晴しニ可相成上ミハ　天朝ゟ公邊を初下ハ天下萬民愁眉を開候儀之此時節ニ可有之御忠孝無此上御儀と奉謁望居候處御廻達之御沙汰も相止ミ候儀ハ如何之御懷合ニ候歟不奉承知候得共　御家ゟ而已御傳達御座候而者　公邊之御威光難相立御指支之儀も有之旨（公邊御爲筋無此上勅諚之儀を御傳達ニ相成候而者御指支と申儀少も呑込不申即大老等有司之心得如何可有之哉不審之事ニ候）暫御猶豫被下置候樣太田備後守間部下總守等ゟ只々奉願候儀も有之趣尚又下總守上京奉言上之上ニ而否早速可申上抔種々御傳達之儀御妨申上候事故既ゝ尾紀御兩家并御三卿其外御親戚之御方ヘハ御傳達被遊候得共列藩外樣之儀と　公邊ニ於て御指支と申稜等御敬上之御慮念ニ而御扣被遊候歟仰不容易御大業ニ付麁忽ニ御傳達被遊候而ハ万一如何之御障礙も出來可申も難計候間縱令稽緩ニ被爲入候共機會を御傳被遊始終　叡慮之御貫達被遊候儀を專一と御持重被爲入候歟彼是奉恐察候處此度右　勅諚御返納之樣ニ被　仰出候段御家之御至難無此上不堪悲歎奉存候依而勘辨いたし御返納者至て難く御返納無之者至而易くと申愚論任其尋左ニ申述候一前ゝも申通　德川之御家御扶助被遊と有之　勅諚御返納被遊候而當分は御無難之姿ニも僞見ニ而者見可申候ヘ共年ニ增日ニ增外夷益切迫　公邊ニ而も應接難相立稜々數多有之歟ニ承り候得之約り可及戰爭左樣之儀無之候而も内地益困窮ニ及候故（交易以來諸品殊之外高直也）内亂を生し候樣相成候儀ハ指見候事ニ有之畢竟ヶ樣成行時勢　兩君樣ニと御英明之御先見被在兼而　公邊ニも時々御建白被遊候儀ニ奉伺候處大老閣老等實意　公邊之御爲を存候而御忠誠之程益感激仕御幼主

之御窗と申御親藩之御儀と申幾重ニも可奉依賴筈之處一身之爲を計り自己之權威を振候存念より公義を忌憚り正邪顚倒不測之御寃罪を奉爲負其外諸大名を始メ御爲筋深く存候人ノ〳〵を夫々道付致候以來ハ尙又驕慢相募候哉ニ承り及居候處此程諸蠻夷之勢彌增不容易時節ニ至り却而　勅諚御返納之儀被　仰出候儀決而　叡慮ゟも被爲出候事とハ難奉存候有司取計如何之心得ニ可有之哉彌以不審ニて假令　叡慮ゟ被仰出候而もまらゝと御返納被遊候而之御名義御立被遊間敷況や万一有司之取繕之奸謀等ニ御泥ミ容易ニ御返進被遊候而之德川之御家御扶助も不被遊　神州夷狄之地と相成候程之儀をも御搆無之兼々御建議等被遊候御趣意ニも御表裏被遊候ハ、今更奸臣之權勢ニ御靡聖明之　勅意ニ御背き被遊候樣ニ被爲成乍恐天下後世に之御面目如何可有之哉第一現在ニ不一方　叡慮を奉惱候儀勿論　大樹公御心被爲付右等之儀ニ而之御羽翼御藩屏之御職掌一々難相立御不興ニ被爲思召嚴重御咎被爲蒙候節如何トも御申譯も被爲在間敷公邊御代々樣ニも御家御代々樣ニも何程御殘念ニ可被思召奉存候恐多も無此上御不忠御不孝ニ御當り被遊候ニ而臣下たるもの右之道理を承知仕居默々致居候而者臣子の職も不相濟儀ニ候得之是則御返納之難き第一義と奉存候

一天朝ニ而者德川の御家御扶助被遊度厚キ思召ニ而　公邊幷御家迄　勅諚御下ケ被遊候儀を此儘御返納被遊候上之德川家之御安危ニ御拘り被遊候而も御搆無之又　神州夷狄之巢穴と相成候とも御搆無之　叡慮を被惱候儀ニも御搆不被遊候と申御證據を御示被遊候ニ相當り候事ニ候得之　天朝ニ而者最早德川御家へ之御義理合は御立被遊候故列藩之內へ外夷を攘ヒ　日本之御國体を不汚天下萬民を救ひ　叡慮を可奉安との　勅諚万一御下ケニ相成候節者如何樣違　勅之罪被爲蒙候とも御大義御名分御立難被遊　德川御家の天下は是切夫と申も元ハ　勅諚御返納ゟ事起ルト申儀ニも相成候ハ、是又御申譯被爲在間敷是則御返納之儀至て難き第二義と奉存候

一公邊ニ　勅書御返納ニ相成候ハ、大老ゟ九條關白樣に指出右　勅之御筋違故水戶中納言殿より御返納ニ相成候儀と候へハ全く老公之思召ゟ事起り　叡慮をも惑し　公武之御確執をを釀しゟし候樣ニ奸計を以申ふし安島芳野鵜飼等之辭令老公之御後間云々等之儀表立勿躰無も　禁廷をハ御讓位抔と申處ニも奉成共上ニ而　老公へ如何成御災難を取工ミ候も難計其節ニ至り候ハ、　勅諚も御奉行不被在事故全く御自分樣の御事計りニ候得者御受拂等も無之御事ニ奉存候左樣之仕義ニ相成候も御返納より事起り候樣ニ成行候ハ、其節中納言樣ニ而如何被爲在御忠孝ニ被爲叶候哉實ニ以恐多御事と奉存候是則御返納之至而難と申第三義ニ御座候

一前中納言樣御著述之內被仰置候ニも御國ニ生候而之其國を守り外夷ニ不奪樣をる事君へ忠祖家へ孝也と云々又仰ニ公邊を奉始三親藩者勿論諸大名共生るゟ死る迄我　皇國之道を本として佛法之異端邪道を退ケ常ニ夷國船來りゑる時之手筈不違樣申合せ置兼々覺悟第一たるへし近クル事ふゝれ總而苟安姑息と云事ハ見通しの無と不決斷よゝ出る事ニ而黑白之見拔ふき故也云々又弘道館御碑文奉拜見候而も尊王攘夷全篇御主意と奉存候所に此節之如キ　神州之至難ニ臨ミ公邊御扶助夷狄を御退ケ奉安　叡慮候樣之御盡力も不被爲在候而之御言行乍恐表裏被遊候樣相成候ハ、是迄公邊御爲筋之儀を御建白被爲在候儀も皆虛言之樣ニ相成候付而之是迄被遊候儀も御忠節之樣ニ而却而御一身之御爲ニ被遊候樣ニ是又奸人共之御讒言申立候處へ陷り御寃罪御洗雪之儀御六ケ敷而已ふらす御至精を被爲懸候御忠節水の泡と相成乍恐後世ニ而何と歟御批評申間敷ニも無之愚慮仕候得之臣下ニ而之實ニ以殘念至極ニ奉存候前ニも申上候通老公ニ而之御爲筋之儀御述被爲在候御儀ニ有之處中納言樣ニ而御返納被遊候樣ニ而之御三藩之御職掌に不被爲叶又御忠孝之道ニ茂不被爲叶候樣奉存候是則御返納之至而難き第四義ニ御座候

一扨御返納無之儀至而易き事と申儀之勅諚御廻達被遊御志業御成就之上之外夷を退ケ御國威を輝し人民之疾苦を御救被遊候事ゆへ天地ゟらん限り天下後世より御明君と奉仰　天朝之御藩屏　公邊之御羽翼御三藩之御職掌ニも被爲叶候へと神君を奉始御代々樣御家御代々樣　老公與御殿樣ニも何程ニ御滿足被思召可申候是御忠孝之第一立身行道揚名後世と申聖語ニも可有之と奉存候萬一思召之程ニ御成就ニ不相成候而も勅意を御建被遊候得之御名分名義も御立被遊候事故是又御忠孝ニ被爲叶可申候是則御返納無之之至而易きと申第一義ニ御座候

一御返納を大老閣老等ゟ切迫ニ申上候樣承り候得共是ハ　勅諚ニも被遊候通有司御不審ニ被思召扱故左も可有之候へ共

一躰之御意味合之前ニも申通り　公邊之御爲を被思召御下ケニ相成候儀を無理無休に御返納被遊候樣可申上筈之決而無之儀元より　公邊之御爲を不思候奸臣共ニ候得之自分之後難を恐之候より右樣御返納之儀を申上ニ相違有之間敷左候得ハ道理を盡し右之譯柄御申立ニて慥重ニも御察訴有之御返納無之樣日延とゟ何とゟ被遊御持張之儀此節之御場合御專一奉存候御理合を盡し御申立相成候得之於理合　兩君樣ニ御難之懸り候儀之決而無之筈と奉存候右樣被遊候而も萬一御災難來り候樣成暴政ニ候得之御返納之上尙更御災難來り申儀指見御座候而何之之道ニも御名義御立被成候樣被遊御返納無之儀至而御心易キ事ニ御座候是御返納無之儀ハ易ト申第二義ニ御座候

一御返納無キ時萬一有司之暴政を以　公邊御爲と申義支度外ニ致し我身の爲を計り反逆同報之振舞を以御難相懸り候節ハ上下一統擧而相拒キ身命を拋て君公を御扶助申立御名義御名分御立被遊御三藩之御任ニ叶被遊候樣仕候儀臣子之忠節ニ可有之君ハ君臣ハ臣父ハ父子は子之道ニ相叶候樣仕候ヘハ　公邊ニも御家ニも御孝道御立被遊是則御返納無之事ハ易きと申第三義ニ御座候

右之通了簡仕候故御返納無之儀之却而易く御返納有之儀ハ至而難き事と愚論相立申候也扨此度之樣ナル　神州之大危難國家ニ之御危難ニ被逢候節之御奉公之致時ニ可有之候ヘハ必死之覺悟ニ而御奉公申上度御座候　神州ニ之御奉公之君公之御職掌君公ニ之御奉公之臣下之職ニ候得之君臣共大義を相守り　勅命を奉し夷狄を退ケ天下後世ゟも御家之御風烈を可奉欣慕候樣仕度至願此事ニ御座候是迄二百年來御厚恩を蒙居祖先ゟ我々共に至迄安穩ニ暮し居候をケ樣成御時節ニ御奉公申候樣ニとの思召ニも可被爲在と奉存候ヘハ難有儀身ニ余り如何樣成儀仕候而も是迄之御恩を奉報候程之儀之出來申間敷候得共不義不忠ニ陷らさる樣覺悟第一ニ奉存候生地を求臆病之働仕候得之必ス死地ニ陷り可申死地を求候内ニ之却而生地も可有之奉存候何ニ致候而も必死之覺悟專一ニ奉存候故右愚論相立候儀ニ候間宜敷御勘考之上何分ニも御討論臣子之大義至當ニ慮し竭力殉難仕度至願此事ニ御座候

或曰御國中士民再度之富發其内二十人余も切腹ニ及候處何故ニ死ニ就候哉　創業以來國体之尊嚴なる事も奉承知尙又夷狄之跋扈近來御三家樣御同樣之御尊敬少しも勇氣有之者　神州二千年の大恩を辨候者ハ生候甲斐なき世之有樣ニ忠憤無之者と斎類同然有之故明　天子之　叡慮を奉恐察御廻達被遊候樣士民ニ至迄出府歎願仕候處途中ニ而指留らるゝ候節腹を切々道を明ケ國家之爲と愚意を奉呈候事ニ御座候扨又右死候者共之儀尤と兩公尊慮も被爲在候故右子孫跡式格別御引立被下置一同面目ニ奉存候右二十人余之忠死之魂魄と御對し被遊候而もむさと御返納之人君之御休ニおゐて乍恐如何と後世迄御批判奉申上只二十余人之忠魂必九天に迷ひ江水之御殿中をも必離ゝ不申儀と感察落涙仕候事　東照宮樣御遺訓不及申威義二公之御遺志近く老公年來之御建白尊　王攘夷等之尊著も日本國中ニ傳播仕兒童も奉景慕候事ニ御座候第一　義公樣湊川楠氏之御建碑近くハ學校之御碑文眼目如何ニ御座哉返ス〳〵も人君たる者忠死之魂魄ニ被對むさと御返納ハ無御情樣奉存候萬々一幕府御役方之權威ニ媚我君公を御不忠御不孝ニ奉陷候も不相辨夷狄之跋扈日本累卵之勢ひニ及候も乍心付一身之榮花ニ被乘君意を奉惑心術人臣之罪是ゟ大成事有之間敷同盟忠義之士國体と名義ト云事能々辨勘考有たし日本之大至難御家之御危急ニ臨候故人臣殉難竭力之日到來ト覺悟仕候儀武士之今日と奉存候聊一身之私怨を去天下國家之爲能々勘考天朝公邊ニ之報恩萬分之一をも盡度事也

或評曰開闢以來未曾有之御大難ニ臨御主君之尊命故始終之御見込御決斷を以一旦御決被遊候分ハ御本家御扶助公武御合体夷狄を退ケ國体ヲ不辱奉安　叡慮候樣慥重ニも御察し被遊候儀人臣誰とても希候處ニ御座候尤御廻達も御三家御三卿御聞柄ニハ御觸被遊候事ニ而御止メ被遊候處一体夷狄一條之儀近來如何とも可被爲致樣も無之大患尙三百年之治世游惰武家武を忘候時勢迚も　勅命を御遵奉難被遊との御見込ニ被爲在候ハヽ以前御頂戴被遊候節早速御返納被遊臣か力不及事故暫く時節を御待被遊候樣御受被遊候ハヽ御返納ニ而も又々二タ樣奉存候既ニ尾張樣ニても午七月廿一日勅書到來之處外由ニ御住居御恒故成瀧竹腰御側御用人等兩三輩而已ニ而尊封を不切御名當被爲在候段奉申上御火中被取計候上可然御受申上候歟とも承知仕候又薩藩同月廿日比　勅書到來是中將殿宰相殿兩名ニ而御下ケニ相成候處中將殿之此節死去故暨居宰相殿御受是月廿六日江戸出立　京師ニ自分罷出御受被申上國元ニ引取被申候趣無相違事と相聞申候

勅書御下之義ゝ重大之御事故御受被遊候上ゝ御身之難儀如何樣被爲成候共御主君之命ニ御座候得ゝ成否ゝ兎も角も御効忠御報被遊候儀武家之今日不得已之儀ゝ奉存候御碑文ニも御座候通り酬恩報本と申儀も　天朝公邊ニ御忠孝御大切之御眼目ニ無御座候哉楠正成ハ　勅命を受候節如何相心得御受申上候哉百戰功成官祿を得可申とゝ存間敷天下之御危難　天朝之命と申力之及丈ケ勤　王忠節を盡し死して後ニ已と申覺悟ニて御受申上候儀ニ可有之正成此時僅ニ河內國之一武士微々たる無官之士ニ有之候處武家ニ生ゝ候而ゝ天下之御危難ニ臨ミ死生無窮之恩ニ可奉報との忠實故遺文ニも義之重キ處更ニ難遁と申一語武士の好き手本と奉存候　神州之大難　天子之　勅命ニ在ても傍觀すると申征夷將軍之征夷之二字ニ相當不被遊尙大小名ハ武家之武ノ字を返納致候ゝ外無之ゝ奉存候一体去々八月中　勅諚御開封　君上並執政衆ニ大義之御英斷ゝ閣老衆迄度々被爲召御詰り被遊候御廻達も御確決ニ相成候段畢竟未始終之御見込をも御附被遊候故御國中へも御觸込士民も右之爲兩度之南發此內二十余之忠死仕候者有之此忠魂ニ被爲對候而も人君ハ勿論執事大官何を以御返納も可申上哉此節在職決斷を以取計候執事衆も可有之如何之定論ニ有之候哉政府之制斷要領を得兼申候万一表裏有之於てハ豈臣子之道もおく恥敷事ニあらすや返ノ〳〵も大業半ハゝして御返納と申ハ決て無御座候道理明ニ分り候也

此書は水戸當中納言樣へ上書なりしを同藩の人ゟ他藩之同志へ贈りし時名義論と表題して前後之文或問之体ニ引直したる由

〔街談記聞〕

未十二月中旬井伊候より御沙汰之趣ゝ去年八月御到來之勅書早々公義に御差出可被成旨ニ付水戸樣江戸御家中大評定有之御家老白井織部申正月二日江戸出立水戸表に罷下御領分長岡驛と申所まて着之所御家中多人數出張此度御大老より何程嚴重之御沙汰有之候共元來水戸之御家者京都に直獻上直拜領總而直奏之御家格也尤右御家格且多年之御忠誠を以先般御直ニ勅書御頂戴之事ニ候然ゝ再勅命有之京都に此方より御直ニ御返上との御事ニ候ハヽ兎角も大老に被差出候儀ゝ且以不相當之儀ニ候處致御受水戸表まて罷下候ゝ畢竟腰拔武士といふ者也以後之見せしめ也とて白井并供人まて散々ニ打擲半死半生相成漸々白井申譯ニゝ全抽者勅書を取ニ罷下候所ニは無之右等之儀得と相談之上取計も可有之候間猶豫致し呉候樣申候ニ付漸ゝ差許種々評議之處勅書差出候儀ゝ何分一同不承知ニて右之勅書を被納置候御靈屋に多人數相詰守護致し御領分口々へも同斷相改出張萬一勅書持出し候もの有之哉も難計候付出入之人數一々改候由右ニ付委曲老公に申上候處老公并中納言樣より也も御諭有之然ルゝ江戸表ゝてハ右之模樣相聞候付御大老より安藤對馬守樣を以右勅書御差出之儀ゝ京師より被仰下候事ニ有之候間早々可被成旨ニ付老公より正月晦日委曲御直書を以御教諭有之候付御家中多分ゝ鎭候得共其內百人計不致承伏京師より之御沙汰と申茂實ゝ御大老より之好計ニ可有之一度被下候勅命之筋御引戻しニ可相成道理ゟし是皆中途之取計成るへし然ゝ主命ニ背候事ゝ恐入候得共此度被差出候而ゝ副將軍之御家格不相立且者武家之面目を失殊ニは京都に御直ニ御返上無之逸勅之逆賊に御差出之儀者何分御請難仕此上者勅書被納置候御靈屋ニて骸を曝候より外無之と申深御役人を憎ミ二月十八日御側御用人久木直次郎御城より退出之所ゟ爲手負致騷動其外國友某ゟ殺しゟと致候內十九人ほと致出奔行方不相知依之水府より公義に御屆有之此度家來之內拾九人致欠落相尋候へとも不相知候間公義御手を以被召捕被下度旨被仰立候由然處御大老より以安藤侯度々催促有之候付是又鎭撫行屆兼候哉一同承伏不致候付自カニ及兼候間公義之御手ニ而御取鎭被下度旨被仰立候故水戸近領之御大名方に右召捕方被仰付候由

十二月廿七日本日より改鑄新錢の引替を行ふ

〔安政五年ゟ文久二年迄觸狀扣〕

此度吹直被仰付候銀之儀當月廿七日より追々引替可遣候尤有來銀之儀茂追而及沙汰候まてハ新銀取交請取方渡し方兩替共無滯通用可致上納銀茂可爲同前事

一引替銀之儀者丁銀小玉銀之無差別取交引替可遣候勿論折銀燒銀錆銀并極印相分兼候分共勝手次第可差出是又無差支引替可遣候條當月廿七日より銀座を始別紙名前之者共方に差出引替可申事

但丁銀差出小玉銀ニ引替候儀茂勝手次第ニ候事

一武家其外共町人に相對ニ而申付右名前之者共方に差出爲引替候儀茂勝手次第ニ候事

一保字銀壹貫目ニ付持主并引替所に拾兩ッヽ爲御手當被下候間精出し引替可申丁銀小玉銀共員數相知候事ニ候間貯置不申段々引替可申候若貯置引替さるもの相知候ハヽ吟味之上急度可申付候事

右之通可被相觸候

安政六未年也

十二月

蠣殼町銀座

三井組

駿河町　　金吹町

本兩替町　十人組　爲替御用取扱所　神田佐柄木町

室町三丁目　竹原屋文右衛門　爲替御用取扱所　田所町

神田旅籠町

以上

中井新右衛門　村田七右衛門　井筒屋善次郎　石川屋庄次郎

十二月廿九日幕府は外人に對し相當の禮を守るへき事を藩士以下に訓示すへき旨を各藩に廻達す

〔尊攘錄皇武令〕

大目付に

外國銀錢目方七匁以上之分壹分銀三分通用之積り於銀座極印打相渡候間無滯可致通用候尤銀錢所持いたし居候ものハ銀座に差出極印を請可申旨

右之通可被相觸候

十二月廿九日

十二月晦日幕府は外人に對し相當の禮を守るへき事を藩士以下に訓示すへき旨を各藩に廻達す

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆記萬延元年九月迄）

（十月晦日大目付廻狀）

大目付に

往來之輩行逢候節相互ニ讓り合不作法無之樣可致者勿論之事ニ候得供近來條約濟國々之者御府內其外に居留致し右之內ニ者長官又ハ士分以上之者有之候間右ゝ行逢候節同樣相心得輕き者共ニ至迄我拶之儀無之樣可致もの也

十二月

萬延元庚申年正月初旬水戸長岡宿に鄉士屯集して不穩の擧あり

〔撥反雜記〕

一書ゝ付ゝ長岡宿聞取書

一水戸長岡宿へ當正月始より鄉士之族四十人餘集り居相增候時分七十人又ゝ百人餘も相增往來之旅人甚た難濃仕候由且近隣近鄉富家抑押而金錢等借用仕候儀も有之偏ニ亂妨相働居申候由江戸住居御老中役白井織衛右御用ニ付而正月末江戸より水戸表へ被罷越候節長岡宿ニ止宿之者共行列之前後を取卷江戸より何之御用筋ニて御通行有之候哉御用之筋承り度との申分ニ而駕を引留申候得共前申納言樣へ直と言上の筋ゝ付難申聞段斷ニ相成候中亂妨ニおよひ若黨。兩三人

も疵を負候もの有之候由あるし白井殿へハ其場を無異儀被罷通跡之儀ハ御老中付御右筆より取計先無事ニ罷通候由左候而水戸滞留中郷士之名前等調方ニ相成二月初江戸へ被罷登候後郷士之者四十餘人御暇被差出候由

正月九日英國公使の通詞傳吉其公使館前に於て刺殺せらる

〔江戸來狀〕

紀州漂流人傳吉儀ハ中々惡る者之由當時英吉利人ニ雇れ外人之風体ニ而江戸ニ來り居候由　ニ而種々惡行有之壹人として惡ミ不申ものハ無之高輪邊婦人ニ至迄不怪惡ミ居候由然處申正月九日旅宿海上禪林之門前ニて子供ゑごをつき候ニ加り居候處何ものとも不知跡ニ而承り候ヘハ後ゟさし候處直ニ倒る事切レ候由刺殺候者ハ急ニも退不申ぼと丶ノ丶いたし參候樣子ニ候へ共一統ゟ薩州足輕之由

前條之通惡ミを受居候間一人も見咎候者無之いつ方之ものとも一向相分り不申候一統も殊ノ外悅申候由ニ御座候外國人も亞墨利加佛良西抔ハ大ニ惡ミ居候との樣子ニ御座候彼是商ひ之妨ニ相成候由併英人ハ隨分辨利ニ相成居候樣子ニ御座候

此傳吉を刺殺候者ハ水戸人ゟるへしと諸人噂致居候處左ニはらを薩州足輕之由也子細ハ薩人江戸内ニて傳吉に行逢彼方ゟ無禮か致候ニ付ハさかひ候處傳吉袖筒を差付候ニ付薩人ゟ手を下ケ斷候樣子薩州御屋敷に聞へ國法ニ因而組頭ゟ成敗ニ及笞之處五人組を以申出迎も死る命ニ候ハ丶傳吉を殺し候而死申度因て十日之暇を願出候ニ付差許遂ニ四五日目ニ本望を遂候由右ハ薩州士何某津田山三郎に直話之由此ニ付錄ス

正月十三日軍艦奉行木村圖書艦長勝麟太郎遣米使節の隨行として別に軍艦咸臨丸に乘じ品海を發す

〔夷事輯錄、風說書等(イ)、風說帳(ハニ)〕

亞國に別船ニ而罷越候イ

御軍艦奉行

木村攝津守

大御番

勝麟太郎

浦賀奉行組與力

佐々倉桐太郎(相ニ)

同組同心

濱口興右衛門(冲ニ)

牧野越中守家來

小野吉直(イ)五郎

江川太郎左衛門手代

肥田濱五郎

浦賀奉行組同心

山本金次五郎(イ)

御賄方

小松雅之進

浦賀奉行組同心

岩田平作

江川太郎左衛門組同心

鈴森取藤勇次郎(イニ)

操練所番勤

古岡勇平

同下役

小永井五八郎

御普請役格

中濱萬次郎

醫師

牧田俙郷

(以下イニナシ)

右ハ十二日品川沖に有之咸臨丸(本ノマヽ)御船に乘組翌十三日出帆小豆島加子貳拾八人計り乘組候由上下都合百拾人餘外國人案内茂無之日本人計之由第一恐レ申候ハ賊船之由都合次第ニハ亞墨利加之船印立テ可申哉と鉄太(木村)咄し服合ハ烏帽子直垂之由ニ御座候咸臨丸ハ阿蘭御買上之由亞墨利加船ニハ亞人三百計乘組居候樣子ニ御座候

〔續海舟先生氷川清話〕

萬延年間におれが咸臨丸に乘つて外國人の手は少しも借らないで亞米利加へ行つたのは日本の軍艦か外國へ航海した初めだ咸臨丸は和蘭で製造した船だ(中略)

さておれが咸臨丸に乘つていよ〳〵江戸を出帆せうといふ場合になると幕府ではなか〳〵やかましい議論があつて容易に承知しないそこでおれも勝鱗太郎が自から教育した門生を卒ゐて亞米利加へ行くのは日本海軍の名譽であると主張してとう〳〵萬延元年の正月に江戸を出帆することになつたのだ

丁度その頃おれは熱病を煩つて居たけれども疊の上で犬死をするよりは全じくなら軍艦の中で死ぬるがましだと思つたから頭痛でうん〳〵云つて居るにも搆はず豫ねて通知して置いた出帆期日も迫つたから妻には一寸品川まで船を見に行くといひ殘して向ふ鉢卷で直ぐ咸臨丸へ乘りこんだヨそれから横濱へ行て石炭を積みいよ〳〵東へ向つて日本の地を離れたのだこの咸臨丸といふのは長さが三十間はかりの極めて小さい船だつたヨ噸數は今一寸忘れたが乘組員は上下合せて百餘名もあつたゝらうヨ凡そこの頃遠洋航海をするには石炭は焚かないで帆ばかりてやるのだから咸臨丸も幾たびか風波の爲に難船しかゝつたけれども乘組員何れもかねて覺悟の上の事ではあり且つは血氣盛りのものばかりだつたから左程心配もしなかつたおれの病氣もまた熱の爲に吐血したことも度々あつたけれど一寸も氣に掛けないで置いたら桑港へ着く頃には自然に全快して仕まつた

桑港へ着くと日本人が獨りで軍艦に乘つてこゝへ來たのは之が初めだといつて亞米利加の貴紳等も大層賞めて船底の掃除やペンキの塗りかへなとも悉皆世話してくれたよ

正月十七日閣老安藤信睦外國事務取扱を命せらる

〔尊攘錄皇武合〕

對馬守事外國御用可相勤旨被仰出候間其段向々に可被達候

正月廿二日幕府松平容保等に命じ水戸長岡驛屯集の徒に備へしむ

〔神庫文書御密書六十三印、天十三印散櫻錄〕

一安政七申年正月廿二日安藤對馬守殿御宅へ家來御呼出し御書付を以被仰渡

此節水戸領內長岡驛へ尙又多人數出張致し居不穩趣ニ相聞中納言殿深く心配被致嚴重ニ手配被致候得共萬一御府內幷他領迄も罷出法外之所業ニ及候儀も難計右樣之仕儀ニも至候ハゝ猶公邊召捕引渡ニ相成候樣致度旨水戸殿ゟ被仰立候ニ付萬一他領へ罷出候節之早く召捕候筈ニ候間夫々手筈致置早速人數差出召捕候樣可被致候尤多人數無之一兩人又之姿を替へ間道ゟ忍出候者可有之も難計候間右樣之者之見掛次第召捕候樣手配致置候樣可被取計候事

別紙之通松平肥後守久世大和守土屋采女正土井大炊頭牧野越中守戶田綏之助へ相通候間可被得貴意候

正月廿二日外國奉行新見正興村垣範正目付小栗忠順等條約批准交換の爲め米艦ポーハタンに同乘し横濱を發して米國に赴く

〔夷事輯錄、風說書等〕

亞國に相越候姓名ィ

御書院番頭次席外國奉行神奈川奉行兼帶　新見豐前守

箱館奉行外國奉行神奈川奉行兼帶　村垣淡路守

御目附　小栗豐後守

御勘定組頭　森田甚太郎

外國奉行支配組頭　成瀨善四郎

同調役

塚原重五郎

御勘定格御徒目付

日高杢三郎

刑部鉄三郎（太イ）

外國奉行支配書役

吉田佐五右衛門

松木三之進（亟イ）

御普請役

金頭俊次郎

辻芳五郎

御小人目付

栗鳥彦八郎

鹽澤（イ）津彦次郎

通詞（支イ）手配勘定役

名村五八郎

立石得太郎（十イ）

寄合醫師

宮崎立元

御番外科

村山伯元

松平肥前守家來

川崎道民（廿日イ）

右ハ來ル十八日品川沖ヘ有之ホヲハタンヘ乘組十九日出帆上下七拾壹人小者ハ壹人も連レ不申候由

〔安津免久佐〕

（萬延元年遣米使節に隨行せし木村鉄太より同十一月聞書の一節）（全文は十一月某日の條に出つ）

萬延元庚申正月十八日横濱港ニヲイテ米國ヨリ迎ニ來レル蒸氣船名ハホヽハタン我何丸ト云カ如し長サ五十間大炮八挺ホートウヰツスル二挺替備エアリニ日本使節新見豐前守村垣淡路守御目附小栗豐後守等上下七十一人米三百人乘組同廿二日同港出帆シ直チニ四十度ヲ乘リ同廿八日洋中ニヲイテ雜風ニ逢ヒ船垣等壞損ニ及フ然シテ石炭盡ントス

〔懷往事談〕（福澤諭吉著）

米國條約を議定せるに當り本條約（批准）は實施後一年の中に米國華盛頓府に於て交換すべしと定めたるは深意の在りし事にして當時岩瀨（肥後守）水野（筑後守）は此批准交換を期として自から公使となり幕府の中にて有爲の人才を卒て米國に赴き親しく外國の狀況を視察し大に我國開明の歩を進むるの機會を得んと望み米國公使ハルリスも亦大に其意を贊成したるに付き斯は議定したる事にして堀田閣老も亦實に同意せられたりと云へり（森山氏の說に據れば堀田閣老は頗る此議を是ふりとし或は己れ自から水戸の老公を說き一橋刑部卿殿をも勸め相與に米國一覽として赴くべしと云はれたる事ありしと岩瀨が物話せしと云へり）然るに岩瀨永井（玄蕃頭）は已に退けられしかば水野は其志を保續し此公使の任に當らんと望み幕府も之を肯したり依て余は水野に隨從して米國に赴くの內約を得て頗る悅び其日の來るを俟たりしに水野は前章の變（横濱にて露國海軍士官の暗殺）よりして外國奉行を解きたれば余が望も其時に絕たりけり扨この批准の使命は誰に任せられしかと見れば外國奉行新見豐前守村垣淡路守御目付小栗豐後守（後上野介）にてありき新見は奧の衆とて將軍家の左右に侍したる御小姓の出身その人物は溫厚の長者ふれとも決して良吏の才に非す村垣は純乎たる俗吏にて聊か經驗を積たる人物ふれば素より其器に非す獨り小栗は活潑にして機敏の才に富たりしかば三人中にて纔に此人ありしのみ後年に至り小栗が幕末の難局に當りて善く之に堪たるも米國に赴きて其見聞を廣めたりしもの冥々裏に其効果たりしもの歟勝鱗太郎氏（伯爵勝安芳）も此時幕府の軍艦戚臨に船將とふり御軍艦奉行木村攝津守を乘せ公使護送として桑港まで赴き福澤諭吉氏も亦此行に從へり勝伯福澤氏の夙に外事に活眼を開きたるも蓋し此行の慶ふりと云ふへき歟此使節一行は萬延元年の春初に横濱を發し其秋に歸國ふし彼地に於て非常の待遇を被り見聞を廣くしたれとも公使その器に非さりしが上に其歸朝せし時には時勢また頓に一變したるを以て彼等は皆口を鉗して米國にて見聞せし事を說かす其地位を保つに岌々たりければ到底岩瀨水野諸人の苦心もこの爲に水泡に屬したりき（本文の括弧は原書の儘也）

正月廿三日幕府一定の標準を立て來ル二月朔日より外國金銀の兩替を開始する旨を達す

〔安政五年筆起萬延元年九月迄
御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕

一大目付様御廻狀幷御書付寫
内藤紀伊守殿御渡候御書付寫壹通相達候間被得其意無
遲滯順達從留伊澤美作守方に可被相返候以上

正月廿三日　　大目付
細川越中守殿
（外八名）右留守居
大目付に

外國交易ニ付貨幣之釣合不宜候間追而改鑄被仰付候
迄左之通通用可致候尤引替之儀ゑ追而可及沙汰候

一保字小判壹兩、金三兩壹分貳朱
一同壹分判、金三分壹朱
一正字小判壹兩、金貳兩貳分三朱
一同壹分判、金貳分三朱
右之通相心得來ル二月朔日より外金銀取交兩替無滯通
用可致候
右之通可被相觸候
正月

正月晦日水戸齊昭は曩に下付せられたる勅書返納に關し藩士等憤激の餘暴擧の虞あるを以て親書を下して之を慰諭する所あり

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、街談紀聞、夷事輯錄〕

水府前中納言様御自筆安政七年申正月晦日於弘道館御家中ゟ被仰渡候寫
但御家中凡七百人程麻上下着用五十人位。出役いたし大番助教石川幹次郎讀上之一同相聽之
我等事一昨年深相慎以來國政向ニ携り不申候得者勿論世上耳ニも不入之處此度　勅書致返納候様傳奏より所司代迄被
仰出右之段大老より申聞有之尚又速ニ返納可致旨直談有之由安藤對馬守小石川ニ而申納言ゟ面會いたし候節傳奏より
所司代迄被仰出候御書附中納言並家老共迄拜見爲仕此御書附之趣被仰出候上ハ速ニ御返納不被遊候而者御詰　勅ニ罷
成候間迅速ニ御返納被遊候様申聞候哉之由ニ而早速返上可致儀ニ。候へ共中納言並家老。役人共ハ勿論家中一同名義
之立候様致度との事ニ而夫々厚く手數を盡し候へ共出來不申候へハ不得止し而　勅命ニ依而公邊へ相納候と云證書取
置速ニ返納いたすべきとの議尤ニ存候然處國中士民共。中ニも　勅書返納致し候而ハ一切不相成候とて長岡等へ多人
數出居候者之中ニハ虛實ハ如何と歟我等ニハ。返納不相成なと下知致候様申又は出居候者へ品々遣し我等申付候而出
し置候様申觸し候者も有之哉ニ而人心疑惑いたし候様ニも相聞候石ハ取りとめたる事ニも無之候へ共多勢長岡へ出居
候儀ハ無相違相聞第一往來之妨ニも相成候而已ならず鎭撫之役人に對し否上或は上り下之役人を妨彼是不作法にも
有之哉の由ニも相聞候處長岡ニ出張致居候へは名義立と云譯も有之間敷詰り家政向不行屆に相當り中納言事不相濟我
等も愼之折柄對公邊宗家之敬上之素意士民之爲に失し候ニ相當り候へは旁以早速引戻可申と役人共精々申諭候由之處
不致承伏者も有之歟ニ相聞如何之事に候外々の儀とも違ひ　天朝より返納致候様被仰出候旨大老等より申聞候上ハ速
に返上不致候而ハ不相成若於相拒ハ公邊ニ對し不相濟家之安危にも拘り候様も難計候へハ詰り多人數嚴重の處置ニも
至り可申候左候へハ義理名節も立不申候所謂血氣之勇共可申大なる過と存候此度能々勘辨致し篤實謹厚ニ心懸主君家
老初役人共申聞速ニ致承伏候様「爲と精々談判いたし候品無滯迅速爲差登候様」取扱可申候彌不致承伏者有之節ハ無止
嚴重申付候外有之間敷候國中士民一人たり共嚴重申付候様敷歟候へハ士民とても主君之舊恩を存我等教諭之處承伏爲
致候様ニと存候社稷之爲士民之爲心配之餘申聞候也

家老共に

二月五日浦賀奉行は外船出入に關する處分中報等を省略すべき旨を我藩に通牒す

〔相模國御備場御用一件〕

（浦賀奉行用人より通牒）

以手紙致啓上候然者御番所前外國船乗通り候節是迄其時々見屆船差出國名等相糺候段御屆被差出來候處神奈川御開港にも相成候付向後異船渡來無別條通船而已之儀ニ候ハヽ見屆船差出ニ不及御屆之儀ゑ御用便次第被差出候樣被仰渡候依之以來相替儀も無之候ハヽ見屆船等不被差出候ニ付何國之船共見屆兼候間右御案内ハ難及候且右之通諸事手輕之扱ニも相成候ニ付其御方より當御役所に御屆之儀も右ニ准し相替儀無之入出通船迄之儀ニ候ハヽ兩三度ツヽ御認御持參ニ不及御文通ニ而御差出可被成候此段可得御意旨右近將監被申付如斯御座候以上

二月五日

二月十七、八日水戸藩内勅返納のことに關し大に騒擾す

〔魚住文書夷事輯錄〕

水戸の人江戸學者中江仙之助方に此内來候而噂聞取書

前中納言樣御辭令ニ重キ（之趣イ）　御綸旨を輕輩の手ニゟゑト有之（上イ）　御綸旨ノ未タ水戸ニ有之由公義ゟ御差出之儀申參候處前中納言樣一旦ハ甚御立腹此方に被下候ニ付京都に返候ハヽ公義に不出共此方ゟ直ニ差返スト被仰候を御家老鳥井瀬兵衛文武ニ達し候人之由此人ゟ前中納言樣に種々申上候而江戸に御差出之筈ニ候處天狗連ト申貳百人計之面々御差出ニ不及前中納言樣「へも」（ナシイ）天下之爲（ゑイ）被思召候を掃部頭ゟ私之趣意を以非義之及沙汰。此所ハ色々申たる由にて右鳥井下城を待受館にて脇腹ゟ突通し候處强勢之人ニて館之柄を切折馬ゟ頓（飛イ）下り其人に切懸候得共深手ニて被討候由夫ゟ御城下ゟ拾里盛岡に妻子を捨天狗連稲葉（裏イ）候を追討被仰付御人數五百人餘被差出候を承り二月十七日之夜城下ゑづゑ紺屋町迄天狗連□押ニ參双方鐵炮打懸夜明テ見ゑハ双方打死手負聊計明方ゟ太刀打之合戰ニ相成天狗連敗軍ニおよひ散り〳〵ニ相成此天狗連之内江戸に參今度之騒動歟ト申事ニ而外ニ柳連ト申シ一ト組御座候都合五百人計此連ハ城下ゟ三拾里計天神山ト歟申所に稲葉居候十八日之事迄見聞いゟし江戸に罷出候ト申たる由ニ御座候

三月十二日小川彦作ヨリ借リ寫

魚住良之

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、撥反雜記〕

二月廿三日在所表ゟ急飛脚を以申來候趣同廿五日着黒古町鹽屋伊兵衛悴元兵衛と申者水戸表に賣物仕入として罷越

昨廿一日夜罷歸候處同許騒動之趣聞書

當十六日夜水戸下町七軒町伊勢屋清兵衛方に止宿之處同十八日晝八時頃於長岡宿亂妨人有之趣ニて取手として町奉行と人數召連下町之内紺屋町迄出浮跡勢待合有之處長岡宿之方より拔身鑓等携多人數相見候付町奉行之者無勢之儀ニ付同所旅籠屋内へ逃込候處外ゟ障子越ニ鑓四本差通し引取罷出候由其後御目附之由差向其頃ハ餘程夜ニ入尤右長岡ゟ參る人數ハ七軒丁迄押寄御目付取手と取合此人數凡五十人位と見受候旨暫取合有之候へ共何方へ紛候哉不相分候其後又五十人程是ハ紺屋町呉服屋へ金貳歩差出白木綿買求銘々鉢巻夜中之儀ニ付相印と相見へ御目付同勢と取合猶又一組後ゟ罷出御目付勢へ前後より取合候處其後ニ至御目附方ゟ鐵炮打出し夫ニ驚左右へ逃散候樣子ニて前ニ（マヽ）御目附方同勢引取相成申候右ニ付翌十九日朝紺屋町ニ罷越塲所之有樣見請候處所々に血しを等餘程有之候七軒町と紺屋町兩町ニて取合尤即死兩人手負數不知趣ニ取沙汰有之何分右騒動ニ付仕入物等整兼十九日晝前七軒町出立尤下町之内通路難出來所も可有之哉と御城下上町佐久間町に罷出候處小手鑓當等ニ而手鑓持士中登城被致御家中町方共大亂雜ニ付止宿も難出來直樣太田に引取掛ケ枝川同所へ凡三百人程御先手組之由御固有之候菅谷宿ニ而ハ山邊主水正同勢五拾人程切火繩ニ而出浮有之行合候由十九日夕太田へ着同所に二十日迄滯留之處廿日之夜深更ニ及ひ農夫共水戸御城下表より急廻狀ニ而鐵炮持參早々出浮候樣御觸有之趣承り候趣申出候

此内ゟ長岡宛多人數出張居候處當十八日水戸御家老雜賀孫市出府之處於同所出張之者ゟ引留候付朝より八時過迄差下ケ札ニ而

鏈候由ニ候得共其儘出府有之趣同十八日夜ニハ御側御用人久木直次郎ゟ申仁下城之節右六人ニ而待受鑓を以突留候由其外御役人方門前へ張札等數々ゟゟ候趣承り候由申出候

同下ケ札
本文太田宿ニ而滯留候急廻狀を以農兵共へ罷出候樣御沙汰上より歟惡連より歟其當りハ不相知猶共節之儀も亂雜中ニ而見聞ハ為し候故ニ而問違之綾も有之哉其當りハ御含ニ御聞許可被下候樣斷申出候此度水戸殿領内長岡驛へ猶又多人數出張居不穩候趣相聞中納言殿深く被致心配嚴重被致候へ共萬一御府内並他領迄も罷出法外之所行ニ及候儀も難計右樣之仕義ニ而候ハヽ於　公邊召捕引渡ニ相成候樣被致旨水戸殿より被仰立候付万一他領へ罷出候節ハ早々召捕候筈ニ候間夫々手筈致し置右樣之儀ニも至候ハヽ早速人數罷出召捕候樣可被致候尤多人數ニ無之一兩人又ハ姿を替間道より忍候而罷出候者有之も難計右樣之者御見懸次第御召捕候樣手配いたし置候樣可被取計候事

伊太夫倅
水戸殿家來　伊與助倅
遠島　茅根新太郎　十五歳迄親類預
同　鮎澤力之助
同　六藏
水戸表永押込
杉山伊左衛門
木村三穂助門
唐崎清左衛門
櫻任藏

三千石以上九人入牢被仰付尤扶持として壹度むすび三ッ宛手當被下候打首千石以上十八人　斷絶六百石以上廿三人獄門鄉士三十六人天狗組六十八人

一水戸前中納言殿本丸より西之方山里久正寺へ永蟄居

一御廉中城内紅葉山御殿出來之上隱居

右之通水戸樣ニ而被仰付候由

一昨日の御相談之一件上屋敷へ罷越候付役人共申聞其上ニて手筈御相談可仕候夫迄ハ昨日御相談之通可仕候

一昨日比着之者ハ愚按ニ之道中迄出居候交代之者と奉存候いつゑ明日比より追々參着と奉存候御注進被成下樣子伺ニ上候間乍御面倒被仰下度奉願候

一昨日長州人ゟ水府人ニ承候迚承込候次第御側御用人高橋太一郎久木直次郎兩人ニ而農兵之大將いたし居候處老公も勅書御返上被成候樣被仰出候付久木ハ御返上可宜旨申述農兵之ものへハ　勅書不差出打出候方可宜旨申成候而二舌を遣候高橋ハ老公之前ニても農兵之前ニても打て出候方可宜旨申居候付農兵共久木を惡ミ別帋之通突殺し候處高橋も入牢被仰付候付農兵凡五百人程蜂起し高橋を助出し候付國友好之助と申家老を以老公御直書ニ而取鎭方ニ被出候處右家老ゟ農兵共打殺し夫より水戸を立去彦根領之佐野に罷越五百人亂妨いたし宿借候旨申候付佐野宿之者共逃去り江戸御屋敷へ斷付候由故ニから明キと相成佐野宿迦レへ天狗組と申關札を高く建宿陣いたし居候由實說之由風評御坐候然者彌彦根勢ハ憤怒難忍儀と推察仕候用心肝要之事ニ御座候御内々申上候

二月十九日幕府は深川越中島調練場に於て陪臣の練習を許可す

安政五年筆記萬延元年九月迄
〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕

二月十九日松平和泉守殿御渡

大目付に

深川越中島調練場ニ御据付有之候筒是迄陪臣に者御貸渡不相成候處茵來者其主人より相願候得共御直參同樣稽古之節拜借被仰付候尤日限等之儀外國懸御目付可被承合候

右之通万石以上以下之面々に可被相觸候

二月

二月廿二日幕府は土浦其他の諸藩に令して水戸脫藩の徒に備ふる所あらしむ

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、御預人一件風聞聞書等〕

對馬守殿宅に家來呼出し書付を以被仰渡

此節水戸領内長岡驛に尙又多人數出張致居不穩趣相聞中納言殿深ク心配被致嚴重ニ手配被致候得共萬一御府内他領迄

土屋采女正

萬延元年

も罷出法外之所業ニ及候程茂難計右樣仕儀ニ至候ハヽ、於　公邊御召捕引渡相成候樣致度と水戸殿より被仰立候間萬一ニ茂他領へ罷出候ハヽ、早々召捕管ニ候間夫々手筈致置右樣之仕儀ニ至候ハヽ、早速人數差出召捕候樣可被致候尤多人數ニ而無之一兩人委を替間道ニ忍居候者可有之茂難計右樣之者共見懸次第召捕候積り手配置候樣可被致候事

（右一通）

水戸殿家來

高橋多一郎
關鐵之助
吉成恒次郎
林忠左衛門
廣岡子之次郎
森五六郎
濱田平助

右之者共水戸表出奔致候趣ニ付他領に罷出候ハヽ、別而速召捕候樣可被致候事

右土屋家之外水戸近領之御城主等間關宿宇津宮（マヽ）ふとへも同樣御沙汰有之候趣ニ候事

右ニ付土屋家より伺之趣

水戸中納言樣御家來多人數長岡驛に致出張不穩趣ゝ付人數差出召捕方等御達趣時宜ニ寄飛道具相用ひ候而茂苦間敷御坐候哉兼而心得方等御在所表に被仰遣度此段各樣迄御内意相伺候樣被仰付候以上

二月廿三日　　土屋采女正内　尾木汀

御書取

可成丈穩ニ取計萬一手餘候ハヽ、飛道具相用候而茂不苦候事

（右一通）

右去年通固め被仰付候

二月廿六日本藩預所相州長澤村百姓藤吉横濱に於て露人に殺さる

〔相模國御備場御用付而諸御願御伺等〕

小倉　中津　關宿
笠間　福山　宇都宮

一御預所百姓藤吉於横濱魯西亞人ニ被過變死之末從類に御手當向伺之事

二月廿六日於横濱魯西亞人之爲ニ變死いたし候御預所相州三浦郡長澤村百姓藤吉儀死骸引取之節妻子にゝ追而ハ相應之御手當可被下置趣其筋ゟ内沙汰有之候由之處其後何之御樣子茂無之候間外國御奉行酒井隱岐守樣に五月廿七日里内官右衛門（御城使也御預所役人も片書いたも）名元ニ而伺書差出置候處外國御懸御老中樣に相伺候方と被存旨七月（本ノマヽ）日御付紙を以御差圖有之候伺書其外始末御預御老中樣に之伺書御書方ニおゐて出來之儀御留守居ゟ江戸詰御奉行藤本津志馬に達込有之其書類役所に留記あり（外國御奉行樣に差出候書面を本ニしてあへて斧鑿を不用也）差上候處同廿二日如伺被仰出候付清書御用人披を同廿日津志馬より差廻來候付左之通出來見之上翌廿三日外國御懸御月番御老中安藤對馬守樣に吉弘加左衛門持參御取次を以差上御落手

右京大夫御預所三浦郡長澤村百姓藤吉儀當去於横濱夷人之爲ニ變死仕候一件死骸之儀ゝ其砌村役人共より引取奉願同所寺院に埋葬仕候儀ニ御座候右藤吉儀兼々至貧之上右一條付而茂過分之物入仕子供厄介多旁當節ニ至暮方必至度難澁仕候趣ニ相聞申候然處前條死骸御渡之節追而者御模樣茂可有之段御内沙汰茂御座候間其邊從類共に茂内々申聞日々御模樣御座候を相樂居候處今以何等之御沙汰茂無御座候依之奉願候ゝ恐多奉存候得共右之御模樣奉伺奥候樣との儀右村役人共より其筋役場に申出候間外國御奉行樣に相伺候處御懸月番樣に申上候樣御差圖御座候付此段奉伺候

以上

七月廿三日

（同年十二月廿八日更に安藤對馬守に伺書を提出す）

文久元年十一月五日安藤對馬守様より御留守居御呼出左之御書取御渡

書面之趣ゑ神奈川奉行より相達ニ而可有之候事

右之末御備場詰熊谷市郎左衛門藤掛新七郎より左之通言上有之

神奈川御奉行支配御組頭若菜三男三郎様星野金五様脇屋卯三郎様より於横濱表魯西亞人より鉄炮ニ而被打殺候御預所三浦郡長澤村百姓藤吉事伊助幹娘等ニ御申渡之儀有之候間右伊助身寄之者并ニ村役人共召連神奈川御役所に罷出可申旨去ル十日御剪紙を以被仰越候付御城使兼勤役之者召連參上仕候處同十八日同所御奉行竹本圖書頭様御目付大久保嘉平治様御組頭脇屋卯三郎様御白洲ニ御出席圖書頭様ゟ別紙之通被仰渡候間則寫差上申候以上

申渡

細川越中守御預所

相州三浦郡長澤村

百姓

伊助親類

權左衛門

同村年寄

與兵衛

細川右京大夫家來

清田新兵衛

共方共村内百姓伊助儀去々未年中横濱表ニおゐて魯西亞人心得違より過而逢炮殺跡取續方無之趣入御聽御手當として金三拾兩被下男子三人に者拾五歳迄女子貳人に片付迄御扶持米壹人扶持ッゝ被下之

右申渡趣一同證文申付ル

右申渡趣罷歸り共筋役人に申聞イ

酉十一月十八日

（モト朱書）右之通被仰出候付共身々々ゑ不及申御預所中一統難有ゟり偏　此方様御威光ニ而右之通被仰出候儀と奉存候段相唱候段御備場詰物書ゟ申越段御留守居方物書噂いたし候

同村五人組

太右衛門

細川越中守家來

大宮貞次郎

二月廿七日咸臨丸米國桑港に着す

（風説帳）（五月十七日堀芳次郎より來る書付の一節）

咸臨丸（マヽ）御船

一當正月十九日浦賀港より北蝦夷地之方ゟ向出帆後ハ洋中荒波ニ而乘組之内亞人之外ハ悉醉ひ前後亡却之次第ニ而（中略）右逢難風候節應接之役々被乘組候亞國之蒸氣船ホーハタンハ損所出來途中より唐國へ乘入於同所ニ作事いたし夫故亞國之湊サンフランシスコに入津ハ御船より凡十五日程後ゟ候由（中略）

第二月廿七日亞國之港サンフランシスコより凡三里程沖迄參り候と彼國より迎船差出案内致し無滯着船いたし右迎船之入用ドルラル百五十枚掛り候由扨着船いたし候祝として御船ニ而廿四發放炮候處彼國の豪場ニ而も同様受禮其後英

※ヒルドレー本古今三月記日ニハ十四日薩我とあり二月廿四日當ル

國魯國之ミニストル着船祝として罷越候付爲挨拶同様發炮いたし候趣（中略）
滯船中被國之人民見物として罷出候もの誠ニ夥敷事ニ有之土地奉行所様之處ゟ一同被招候節も見物人多人數ニ而通行
相成兼候付銀ヒギヤマンニ而作り候車に乘せ連參り候趣（中略）
御船ニ損所有之候付サンフランシスコより北之方凡七里隔り候メイアイランドヒ申湊に爲修復相廻り（中略）右修復相濟
候ヒ直ニ彼國之船方五人雇入出帆洋中凡四十七日程ニ而當地着ニ相成候趣

二月廿八日水戸齊昭有司をして藩内の激徒を鎮撫せしむ

〔夷事辯錄〕

松平大學頭様御家臣河合清八學者巡覽ニ而水戸表並所々遍歷いたし候者と申者の話二月末頃承る覺

御論旨御大老衆ゟ當中納言殿方ニ有之ニ付其段家老を以被仰進候尤御發居ニ付御附之家老を以御承知之御返答ニ相成
候然るを側向キ若者共說ニ以後京都より御取戻茂申來候ハヽ、手筈之違ニ相成可申右様之非政江戸家老共公邊にゐひゐ
つらひより出來候者也と耳嘶けるを前中納言殿當時發居と申江戸中納言迷惑ニ相成候義ニ付今更無用之論旨早々返上
可申候様御論混雜ニなり廿人計りニ而彼江戸ゟ之使家老共差添役之者共打果し直ニ立退候を前中納言殿直書を以早
々歸參可致決而咎等申付間敷との趣然るを者共御直書手ニ觸レ請取候而ハ御仁惠ニ背キ候ニ至早々持歸り候様一圓聞
入不申罷越其段言上ニ付物頭並用人二頭組添五百人程捕手被差遣候者共日增ニ人數多相成千人と申捕手二頭を追拂城
下橋外堀の前の櫓也迄追來る此處ニ而食留用人始討るゝ物頭之漸城に走り込夫迄ニ而者共不殘引取何方に敗散亂致との趣なり

三月三日早天水戸脫藩士大關和七郎等愛宕山に會して大老井伊直弼襲擊の部署を定む

〔揆反雜記〕

一今般徒黨之者共三日早天愛宕山へ寄合之旨申立候ニ付圓福寺へ御尋有之則左之書付差出候

日上覺

當月三日朝五時前頃侍五人町人躰之者一人下駄傘ゝ而愛宕山へ參詣いゐし町人守札請候節雪見致度候間額堂之下暫時
借度由申候挨拶ニ役僧承知之旨申答右額堂下茶屋床机積重候脇二三脚計かたよせ有之候處へ何ゟも腰を懸山番人八藏
と申者を相招き煙草之火茶を乞ひ且現箱借度旨申候間いつゟも同人所持之物を貸遣申候暫時過而雪見ニ茶計ニてハ不
而白と申又番人を呼金貳朱差出是ニ而酒壹升求め殘錢丈ニテ何品ゝても肴求め呉候様相頼候間右八藏女坂半分迄下り
候を呼返し耻ゐしき事ニ候へ共今朝入湯之節下帶相忘候間二筋序ニ求呉候様申又壹朱出候間同人夫々求め立戻り見候
處壹人も不居合其内ゝハ何ゟ參申事と存居候得共夕景ニ相成候而も壹人も參不申跡片付ニ參候處半紙躰之物土地ニ落
有之拾ひ見候處別紙名前書付ニ付若哉使ニ而買求め候品々取ニ越候ハヽ、此書付ニ而實否を尋可相渡と心付下帶木綿と
一緒ニ仕舞置候へ共于今何方よりも取ニ參不申候拾物之儀先般御屆申上候通ニ御座候右町人躰之者刀屋ニても御座候
哉大小ニ候ハヽ、五腰程も風呂敷ニ包有之候様ニ推察仕候右之外ゟ八藏儀存知不申由ニ御坐候其後役僧食事ニ下り候節
者凡拾人計も休居候様ニ存候へ共而躰ハ不及申人數之儀も聚と壹無御座候此外右場所見聞候者壹人も無御座候前書有
之儘ニ奉申上候已上

中三月九日　　愛宕山圓福寺

別紙名前書

有村治左衛門　森五六郎　杉山彌一郎　森山繁之助　增子金八　稻田重藏　黑澤忠三郎　山口辰之助
齊藤監物　蓮田市五郎　鯉淵要人　佐野竹之助　大關和七郎　廣岡子之助　海後崎之助　廣木松之助

三月三日大老井伊直弼櫻田門外に於て刺客の難に遭ふ

〔登攘錄櫻田並東禪寺一件、夷事辯錄〕

此元定附近藤良藏今日藝州様に御使御坐候而罷越申候處外櫻田御門外ニ而丁度彦根様御行列御向に見懸松平市正様御長屋之下の處ニ而帯刀之仁左右より拾人程ッヽ及抜刀傘を投捨右御駕ニ切り懸暫御駕脇ニ而打合候體ニ御坐候處往來之人々所々に散亂混雜仕候間右定附も上杉様御門内に駈入透見仕居候處程無く抜刀之仁壹人跡ニ少々手疵負候姿ニて三人程猶半丁程隔壹人切先ニ首を貫き肩ニ懸其跡より抜刀ニ而四五人附添參居外ニ抜刀ニ而無之面々薄手と相見赤ニ染居打連れ日比谷御門の方へ駈參其邊穩ニ相成候付猶立戻り最前の場所ニ罷越見申候處八人之死骸有之其内壹人者野服跡七人ハ御供姿ニ而内二三人ハ未た息絶へ不申様子ニ見受候其節壹人之死骸を四五人ニ而彦根様表御門に抱込候を遠方より見請候由尤初發騒動之節諸人逃廻り石良藏も同斷取込候故聚とハ見留兼申候由ニ御坐候事

三月三日

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

覺

一朝五ッ時比井伊様御登城の節外櫻田松平大隅守様御屋敷前水戸之藩中十七人計ニ而御駕を目懸一同切入候へ共陸尺之者共は逃散御供之同勢直ニ抜合候得共御駕を二タ刀も刺候様ニ相見申候戰申候内御駕ハ御屋敷へ引返申候段々手負死人等相見へ候處無程所々に打散申候場所ニ即死六人有之候處井伊様に引取ニ相成申候尤首無し之死骸等ハ相見不申候

一八代洲川岸増山河内守様辻番横貳人深手負之死骸有之候得共莚を掛人體等如何共相分兼申候

一龍口水落口上ニ年齢二十七八歳共相見絹服ニ馬乘袴着白木綿襷を掛肩を抜倒死居申候疵肩先七八寸咽一ヶ所疵尤切腹仕候様子ニ而腹ニ一ヶ所疵相見へ申候

一同所一人年齢廿歳程ニ相見小手を當て居申候頭ニ五寸程之疵ニ而外ニハ相見不申候へ共重き様體ニ而無音聲追々手招き等仕居申候側ニ者稽古革具足の内ニ首を入引寄居申候右兩人共抜刀ニ而居申候八代洲河岸龍口之四人孰も水戸様之落中と相見申候

一井伊様御屋敷開門平日の通御坐候へ共御門内ニハ大勢之人數ニ而堅固の模様に御坐候

右之通見聞仕候以上

三月三日

覺

龍口ニ居申候手負之一人書比小笠原右近將監様遠藤但馬守様御持合之辻番に上り首も同所に持越居申候由御坐候以上

三月三日

（本朱書）
歩御小姓也

山田巳右衛門
藤木源右衛門

藤木源右衛門

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、夷事輯錄、撥反雜記、佐々文書〕

怪我人姓名（伊井家士）

騎馬從士　越石源次郎

眉間より頬ニ懸深疵二ヶ所頭中三ヶ所三十五針

騎馬從士　草刈鍬五郎。

首筋左の方より右の耳の邊迄切込死す

御側御中小姓　河川西忠左衛門

眉先頭中面體三ヶ所凡二十一針

騎馬從士　松井居直之進。

面體天窓肩先三ヶ所深手五十一針

同　柏梅原德之進。

天窓百會切割腦出て死す

脇の下より乳の下方迄深疵壹ヶ所

萬延元年

同　　山下鯖太之助。
天窓面部肩先手切れ落態て十ヶ所九十四針
同　　河原秀透之丞。
左の眉の上横ニ三寸頭中三ヶ所深疵五十六針
同　　日下部三郎右衛門。
深手ニて場所ニて死す
同　　加田九郎太
深手ニて場所ニて即死
同　　澤村軍太
深手ニて屋敷ニ歸り死
永田太郎兵衛
左の耳へ懸け五寸鼻より頬ニ懸け七寸二十三針
岩崎德之丞。
薄手右の手の甲少し
片桐權之丞。
日下部三郎右衛門倅親へ助太刀いたし死
日下部内記
左の肩先八寸眉先五寸深手三十八針
松井櫻居猪三郎。
薄手少々
萩原吉八郎市之允
天窓百會より神庭迄切割夕六時死
廣瀨數馬
薄手三ヶ所六針
高田弓太郎。
襟首半分程切込即死
御陸尺　彌右衛門
働き拔群の樣子肩より脊中ニ懸五寸程の淺疵一ヶ所
御陸尺　勝五郎
肩先脊中へ懸け淺疵一ヶ所有之候へともいかゝ不審
御供頭　鷺坂助之進
敵方何れも町人體ニ仕立駕訴の樣子ニ而俄ニ御駕ニ近寄直樣加田に切懸け一人ハ澤村に切懸候加田に切懸候節鷺坂直ニ一人切殺し澤村へ切懸候一人日比谷迄逃去候を追懸右ニ而仕留候由ニ御坐候鷺坂手疵少しも受不申候趣ニ而療治等願出不申候

一敵方一人場所ニ而即死兩人手疵負召連れ一人淺手少々此者早速吟味致候處少々白狀ニ及ひ水戸薩州の士ニ御坐候趣ニ候向方ニも餘程怪我人も有之由所々ニ行倒れニ相成居候者も有之由御坐候姓名の下ニ丸の印御座候ハ宗哲預り之病人ニて容體相認差上申候昨夕又々診察致し容體書差出申候

南蠻流外科　田村宗哲印

右之通金瘡手當療治仕候以上

※私家云ニ御家目録ニ御坂脇引込候一人も無之候事
※且ハ櫻ヨリ御共ニ同ニ當ハ無之候事
※よりの有之ニ込ハ
※一人ハ
※櫻ヨリ
※御坂脇引込候一人も無之候事
※私家云ニ御家目録ニ御坂脇引込候一人も無之候事

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、街談紀聞〕

外櫻田松平大隅守屋敷窓ニ而最初より見届候ものゝ書取

三月三日曉天より雪降り五時比ハ彌大雪ニ相成候處井伊掃部頭樣御登城被成候向より武鑑之樣成物を見ふから御先箱之邊へ立寄而邪魔口論ニ及候を御駕脇の衆御先供之衆も口論詠居候處又一人侍手傘差ふから御駕之邊へ立寄持候傘へ御供頭手を懸け候を拔打ニ右の手首を打落し共儘御駕へ二タ刀差込候時向側ニても相手有之樣子ニ候得共疑と見へ不申此内御先供も一同ニ切掛り候銘々山岡頭巾冠又は拔取候者も有之此者ハ鉢巻致居候銘々襷を用着込等も有之樣子ニ御坐候其内稽古ニ用候皮胴相用申候者も有之及傷之砌ハ足袋素足ニ相成井伊家之輩者雨具相用候儘打捨候間も無之樣子ニ而共儘相働候間進退不自由の樣子ニ見受申候前又御駕を取込候と御駕脇初御先供迄戰爭ニ相成申候此内御駕ハ共儘居有之初差込之節陸尺共逃散候内陸尺兩人被切倒御草履取ハ共場ニ立歸り相働申候御箱御道具持抔逃去申候共内御供頭日下部三郎左衛門と申仁肩の邊深く被切込共上股も切落計ニ打れ進退極候體ニ候間此仁之働別而目立申候井伊家の士打込候太刀十分に切留と見へ候へ共思ひの外切れ不申是は全相手の※着込有之故深手ニ及不申歟相手より切込候太刀ハ桐油の上より打込候故ハサリ太刀に普候へハ血走り是ハ着込無き故と被存候石血戰中一人取て返し御駕の戸を蹴逃し候砌見候へハ掃部頭樣後ろへ御寄り掛り被爲入候樣子ニ見受候處無程引出し見最早御絶命の樣子ニて仰向ニ御倒し御恨中上候共種々相唱三太刀程打込共儘御首級取奉り候へ共切れ兼候哉御胸先へ片足蹈掛け引ちぎり申候而本望相

達候由太刀先ニ御首級を貰き立退候砌又五六人立掛り御別體へ向ひ御悞の刀差通し立戻申候尤御首級打候節ハ御駕脇御先供等も死人手負多分ニ而未た相働居候衆も有之候へ共手廻兼候様子ニ御座候尤前條手負候日下部氏ハ乍深手太刀を杖ニ片足立候て立上り其首級取られ間敷と聲を發しながら打倒れ又起上り残念也其首引返せよと立なから又打倒れ起上り四五度もいたし候右御首級を打奉り候相手一同勝鯨波様の聲を發し立退候得共討留候者も無之井伊家ニて即死六七人手負拾五六人も相見へ申以下ハ陸尺一人外ニハ合羽着候中間一人兩人ニ而死す井伊家より人數出し取返し申候外ニ死人一人有之合羽草鞋着用刀抜き掛け切倒れ居申候年頃五十計の男全前條之同類共見へ不申自然通り懸の者ニても有之由井伊家死人手負等片付候節右即死骸共儘有之候而暫く過き御同家より人數參り取込申候外之者ニても候哉之事

〔安津免久佐〕（三月六日晩聞取書寫の一書）

一御駕越ニ差通候節之咄序ニ帰部頭とのハ不怪御肥滿ニ而御座候由咄申候事

〔街談紀聞〕

一今朝外櫻田に會合及闘爭候水戸様御家來總人數左之通（本朱書）玄蕃様御家來秋田助太郎物語

○柳原御家來三人先年水戸に羅越他之席中ニて歳比十六七之士ヲ見ル大ものいきすじつヤ致居候有様只人ハらゐ體ニ付潛ニ名前承候處佐野竹之助　山口辰之助
野竹之助と申山何様非常之人物ニて老公之落胤と茂申由ふ丁

○佐野竹之助　大關和七郎　黒澤忠三郎　森五六郎
○廣岡子之次郎　關新之助　杉山彌一郎　増子清三郎　廣木松之助　森山繁之助
同前

○此海保先之助と申ハ海保半平之事ニて可有之是ハあまり大男ニてハ無之候得共

衛師範千葉之甲弟ニ而先年水戸に御抱抜群之藝術夫ニ槍術組打茂有之關八州ニて當時無双之者ニ而候由

○海保先之助　岡部三十郎

△昨年九段阪亞墨利加旅館に忍入使節ヲ刺可申と打立志ヲ不遂囚と成候水戸之浪人之此蓮田市五郎兄之由ナり

△蓮田市五郎　豐藤監物　鯉淵要人　稲田重藏

右十七人外ニ

薩州様御家來　有村次左衛門

此有村之首ヲ持能ノ口遠藤様辻番受場之所ニて死

但右名前之内○此印有之分之當二月以來御尋ニ相成居候者ニて候事

〔街談紀聞〕

一龍口但馬守頭取辻番所廻内に今朝五半時頃侍體之男誰を切害致し候哉首を持罷在候旨辻番人屆出候付早速役人共爲見分相越候處相違無之主人名前承候處松平修理大夫家來之由申候得共言舌聚と不相分依之留置申候此段御屆申上候以上

三月三日　遠藤但馬守内　木下長左衛門

右首井伊家々來多人數受取ニ參候得共御差圖伺まて引渡不申候

○ノ上方ニ朱ノ書込

此首級三日之夕從井伊家受取ニ罷越

右人數百五十人程其中ニ裏着用之侍首級ヲ捧八代洲河岸通歸候由也

御家老也　岡本半助

脇五右衛門

但彼首は掃部頭様御家來之由ニて受取候故誰某之首ニて有之候哉之段遠藤様より承候處即答不出來唯家來之者之首歟斗申答候よし也

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

今五半時頃當御門御橋之方ゟ疵受候侍躰之者四五人西番所ニ罷越内藤紀伊守様ニ案内致し呉候様申聞候然ル處御役人様方御登　城下座中ニ付下之方ニ相下置様子可承心得ニ而少々相扣候様申聞候處其儘當御門外ニ參り候哉相分り不申候得共此段御屆申上候以上

馬場先御門

當番

戸田七之助家來

出（土カ）沼藏人

三月三日

年比三十歳位ニ相見へ頭上後之方ニ長四寸程深七分程切疵壹ヶ所顔ニ長八分程深五分程切疵壹ヶ所左之手首無之白木綿たすきをけ黒塗筋鉄鎖繋き小手ハゑー巾着内ニ上ハ書安政七申年三月朔日日記薩州有村次左衛門兼清と認有之帳面一冊前印朱塗箔ニ而㊀如此印兩面ニ附有之紙包ニ而壹分銀六ッ貳歩金壹ッ貳朱金八ッ壹朱銀四ッ百文錢壹枚所持革具是胴黒塗何茂血付鞘無之刀身長貳尺六寸程脇差九寸八分程

松平修理大夫家來脇田仁兵衛呼出相尋候處有村次郎左衛門（マヽ）儀去月廿六日他出いたし不罷歸帳外之者之由相答候趣

〔夷事輯錄〕

掃部頭様上巳ニ付御出仕懸櫻田御門外上杉彈正大弼様松平市正様御屋敷相角ニ而掃部頭様御行列參り懸候處十四五人無二無三ニ切り懸り候ニ付御駕脇ニ十人計り拔合切詰候處其餘御供之者ハ大方逃申たる趣御駕之者へ切付候ニ付御駕之打捨申候ニ付井伊家御人數四五人被切倒直ニ掃部頭様御駕外ゟ四人ニ而刺通掃部頭様を引出首を取除候よし即死八人とも九人とも申候右之水戸家來都合十七人中合内四人龍口へ馳込外兩人ハ脇坂様御屋敷脇和田倉御門外ニ而深手ニ而打倒右之内首壹ッ抱居候由是之掃部頭様御印ト相見へ申候去ふゝら殘る七人未行衛承及不申候若之右之首ハ偽物ニ而井伊家御家來を欺候手談ニ而眞之御首ハ持退候歟も相分り不申候定而井伊家御屋敷ゟ縦見通之場所ニ付惣御家來出張いたし追打も可致と工夫いたしたる事も可有之處井伊家ゟ人數百計罷出候得とも一向追打等之様子も無之引取申たる由國初以來類も無之大變ニ御座候

菊池櫻亭麹町ゟ白金ニ御用有之出勤懸右之騒動ニ行逢たる趣ニ而荏原文亀ゟ話之次第ニ而之御行列右ゟ十二三人切懸候ニ付御駕脇之者共不殘御右ニ付立隔切詰候處不意ニ左より五人計御駕ニ附寄御六尺之足を切候よしその儘御駕を捨申たる處を直ニ五人ニて刺通候との趣ニ御座候仕懸り候節合圖と覺炮聲貳發相響候よし申候實見之趣ニハ候得共虚實之存不申其外種々風説區々ニ而御座候

三月四日

三月三日櫻田刺客佐野竹之助黒澤忠三郎等脇坂邸に投じ素懷書を提出す　遠山三右衛門

〔撥反雜記〕

一佐野竹之助墨澤等四人脇坂侯表門より拔身之儘飛入候處下坐見相咎候へ之全心付不申恐入候乍併鞘無之無餘儀白刃持參仕候御局之儀有之候間御取次可被下旨申候處取次式臺迄下り相尋候處揃者共ハ水戸殿御内何某等ニ而御座候今日掃部頭殿御首尾蔵いたし本望相遂候ニ付此段御局申上候御局書之懐中致居候得共此通重躰故差上兼候間御取出可被下旨申脇を突出候ニ付右取次懐中より書付取出中務大輔登城中之付早速可申遣扣被居候樣ニ申下坐見案内之而腰懸之連行其内案内者來り外へ連行外科療治ニ懸候へ者如此御手厚之御手當被下誠之難有但是ハ公儀方の御手當ニ候哉又御屋敷之御取扱ニ當と尋候付中務大輔より手疵之者手當いたし候樣申付越候ニ付如此と相答候得共いつもと此重手之ては存命難仕兼而覺悟も致居候間此儘被差置被下候樣斷申聞候得共主人申付ニ付療養受可然と申候へは此上之如何樣ニも思召次第療治可被下旨申候由」稲臣曰如此立派ニはあれども實は取次之者皆逃去案内乞候得共可出者も無之無據下坐見やう〳〵之這出るよし也

一脇坂樣へ欠込之人（柳列云姓名已具在第一卷故今略）佐野竹之助儀者二の腕切落され候へども大丈夫之而願書持參一々口上を述

〔仝　書〕

三月三日朝脇坂中務大輔樣へ願書持參之者左之通

佐野竹之助　墨澤忠三郎
蓮田市五郎　齋藤監物

願書（願書の體野ヶ）

謹而脇坂侯執事ニ奉言上候執事御儀御賢明ニ被爲在天下之御政道無邪御取計被遊候儀と奉存候而草莽之我々共申上候者恐入候得共存詰候儀無腹臓別紙ニ相認奉入尊覽追々御大老井伊掃部頭殿所業を相察候處權威を恣之致し我意ニ不叶忠精厚人々をは御親藩を始公卿衆大名御旗本ニ不限致讒訴候而退隱幽閉等被仰付候樣取計就中外虜之儀ニ付而者虛喝之猛勢ニ恐怖いたし神州之大害を醸し不容易事共を業詐御國體を穢乍恐　勅意ニも奉違背候而已ならす御讓位之儀を企候體奸曲之至天下之大罪と可奉申候大罪狀之儀委細別紙ニ認候故御熟覽御賢慮之程奉願候扨右等之奸賊ニ御座候而者將軍家之御政道を亂り夷狄之奴ニ被制禍害を致し候儀眼前ニ有之實ニ天下之安危ニ拘り候儀と奉存候故此度天誅ニ替り候心得ニ而斬殺仕候事ニ御座候毛頭公邊へ御敵對申上候儀ニて無之且全我々共忠憤之餘り天下之爲を存詰候而之事ニ御座候嚴刑之御處置被遊候共御恨不申上依而元主人家蒙譴責候樣之儀者無之樣奉願上候將又此上天下之御政事正道ニ御復し忠邪御辨別被遊殊更夷狄之御取扱ニ至候而者祖宗之御明訓御斟酌被爲在華夷内外之御辨得と御勘辨被遊御國威を損し不申候樣御判斷之程奉願候而已此段不顧萬死奉申上候恐々謹言

惶頓首

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、街談記聞〕

素懷書（題號は原書に脫す）

墨夷浦賀ニ入港以來征夷府之御處置假令時勢之變革も有之隨而御制度之變革もなくて叶ハぬ事情も有之候とは乍申當路之有司專ら右を口實として一時偸安畏戰之情より彼か虛喝の勢焰ニ恐怖いたし貿易和親登城拜禮をも差ゆるし條約を取替し蹈繪を旨し邪教寺を建ミニストルを永住爲致候事等實ニ神州古來の武威を穢し國體を辱しめ祖宗の明訓深謀ニ戻り候而已ならす第一處ヶ　勅許も無之儀を被差許候段　天朝をも奉蔑如之儀ニ有之重々不相濟事ニ候追々大老井伊掃部頭殿所業を洞察致候ニ將軍家御幼少之御砌ニ乘し自己の權威を振んため公論正義を忌憚り候而　天朝公邊の御爲筋を深く被存入候御方々御親藩を初公卿衆大名御旗本ニ不限讒訴致し或ハ退隱或ハ禁錮等被仰付候樣取計候儀夷狄跋扈不容易砌と申内憂外患逐日差迫候時勢ニ付恐れ多くも不一方被惱　宸襟御國内治平公武御合體彌長久の基を被爲建外夷の侮を不受樣被遊度との　叡慮ニ被爲在公邊の御爲　勅書御下し被遊候樣ニ奉伺候處違背仕尙更諸太夫を始め有志之人々を召捕無實を羅織し嚴重處置被致候其敷に至候てハ三公御落飾御愼み粟田口親王をも奉幽閉無勿體も　天子御讓位之事迄奉醸候程之奸曲無所不至矣豈天下之巨賊ニあらすや右罪狀之儀は委細別紙ニ認候通に候斯る暴横の姦賊共

儀差置候而ハ益公邊の御政體を亂り夷狄之大害を來し候事眼前ニ而實に天下の安危存亡ニ拘り候事共殊慣默止かたく京師へも及奏聞今般天誅ニ代り候心得ニて令斬戮候勿論公邊へ御敵對申上候儀ハてハ毛頭無之何卒此上　聖明の　勅意ニ御基き公邊の御政事正道ニ御復し尊王攘夷正誼明道天下万民をして富嶽の安きに處せしめ玉ハんことを希ふ而已

別紙

皇國千万世　天日嗣連綿照し給ひて　伊勢の神宮上古ニ替らせ給ハす神道を尊ひ武力を尚ひ給ふ事自然の遺風餘烈なれハ古より遠略を展へ給ひ且夷狄の禍有之候得は精々退攘し給ひしこと青史ニ著しく今更稱揚し奉るニ不及武將の世となりても弘安の蒙古を廢ニし文祿の朝鮮を征する事とも神州の武威を海外ニ輝し候儀人口ニ膾炙する所なれハ是又贅言をまたす東照宮ニ至り給ひて尊王攘夷の御志深く被爲在候ハ不及申上勃興の御盛勢なれハ其初ハ諸蠻來航通商等も許し置給ひしなれ共諸蠻も畏服して觀覦の念を逞せることもあらす然處東照宮終ニ其巨害有ことを洞見し給ひて洋教の禁を嚴ニし給ふ大猷公ニ至りますます邪教の徒を驅斥斬戮し給ひ三代の明を四海ニ布き給ふこと誠ニ千古の英見卓識ニて後嗣遵奉し給ふ所なり扨近時ニ至りては夷狄ニ狡謀黠略の者多く出て萬國と通信貿易し遂ニ小を併せ弱を制し次第ニ境界廣大ニ相成候勢ニ乘し屢神州をも覬覦するニ至る乍去打拂の令有之時ハ各別の。仕出事も不成得して打過ぬ天保十三年打拂令を停止して仁慮せられしより頻ニ來航し跋扈の態を顯すニ至る就中嘉永癸丑墨夷浦賀へ入港暴威を示し種題申懸候以來征夷府の御處置古今時勢の變革も有之一概ニ御國威御主張難被遊儀ハ治世之風習左も可有之事ニ候へ共申迄も無之夷狄の貪惏元より饗事なく殊更狡謀譎計を挾み覬覦の念を逞致候故詰り邪蘇之術中ニ陷り神州の泰否ニも拘り候着眼之大基本御刪議御一定之上詰り御制度御變革無之候てハ於時勢不叶筈ニ候へ共近來諸蠻夷の御扱振推察仕候而者乍憚一定之御刪算如何可有之哉去る卯の年迄ハ追々內備嚴整之御達も有之邊海の御守衛被仰付候大名ニ至候而ハ多年防禦のため國力を費し被爲忠勤候處不測も去ル辰年和親貿易御取結之上恐多くも征夷將軍之御居城ニ夷賊共ひ迫被仰付剩御輝廬脅敬を被盡候有樣春秋ニ城下之盟を耻候比較ニあらす神州古來未曾有之御失體ニ而實ニ冠屈倒置の御處置と可申驚嘆之至ニ候假令御國政之儀ハ關東ニ御任せニ相成居候迚斯る重大之事件第一　勅許も不被爲在候儀を全く懸り之有司數輩之了簡を以五ヶ國へ本條約差許將軍家御印章之書翰迄被差遣候始末何程倫安の末假戰爭ニ及候儀を致恐怖候とて天下後世へ對し大義名分と申も有之征夷の御任如何可有之哉忝くも武門の列に連り二百年の恩澤ニ浴し候而ハ不堪悲泣之至候況や德川家譜代恩顧之士東照宮の神靈ニ奉對沈默傍觀いたし居候儀廉耻無之と可申決而不相濟事也さて前件夷狄交易之儀如何樣ニも　勅許申請度所存ニて去ル巳年春堀田備中守上京致し賂賂金錢を以關白殿下を誑惑いたし無勿體も　龍顏を可奉瞞と陰謀秘計不一方候處　今上皇帝聰明絕倫千載不世出之　聖主ニ被爲渡　皇國開闢以來尊嚴之國體淳厚之風俗　今上の御代ニ及び夷狄の爲ニ消却汚穢被致候而者第一　伊勢神宮を御始御代々の御神靈ニ被爲對　王位之御任不被爲濟尤戰を被爲好ニハ無之國體を不失萬民安堵ニ被致度との　叡慮ニより提くも一七日の間石清水等へ御祈誓被爲蒙關東より如何樣被申立候とも一切御許容難被遊萬一非常之節ハ假令萬里之波濤を越へ孤島ニ移る共御懲不被爲在候へ共泉涌寺を御離れ被遊候事者難被爲忍竊ニ　宸襟を御惱し被遊候御事傳承仕四海の人民誰か感激悲泣せさらんや當此時神州の命脈實ニ累卵よりも危きことなりしか百官群臣忠憤切齒の餘り八十八人の堂上方禁中に馳集り萬死の力を以諫奏を奉り其外有志の大小名勤王の微忠を獻せし故三公御始彌增感憤被遊御下知被爲在猶又內地人心の居り合如何ニ付大小名之赤心も被聞食度尤衆議奏聞之上　叡慮難被決候ハ、伊勢大神宮神慮可奉伺との御議三月廿八日議奏傳奏衆より堀田備中守に御返書被差下候ニ下向被仰下候由之處夷狄に內約條之儀既ニ被差免候事故諸大名之赤心有體遠　叡慮候樣にも不相成依之表向天下に意見建白之遠ハ有之候へ共陰より某等を以專西洋の事態を强大ニ主張し交易を指許ハ一時之權宜無御據萬一關東之御主意ニ違候てハ國家の爲に不成と吉凶禍福を以遊說いたし猶又御三家方ニも御建議之文。を認直候樣御內諭も有之由ニ候得共水戸前中納言殿。關東輔弼之名

將に有之尊王攘夷之御論始終一致之御方故御刷算伺書と云書一冊當今之急務より將來之大害迄丁寧誠實ニ建白いたされ尾張中納言殿へも御内意ニ不泥京師之御旨意に本つき御處置無之而ハ不相濟と被申立候由實に難有事といふへし其後彌　勅許之有無ニ不拘關東而已之御決斷ニ而假條約御差許ニ相成候趣ニ付御三家ニてハ尾張殿水戸殿御三卿ニてハ田安殿一橋殿御家門ニて者越前殿忠誠無二之御方一同登城ニ相成將軍家に御對顔を被爲願候處御所勞ニ而御逢無之依之元老井伊掃部頭初御呼出し　天子之　勅命御遵奉無之假條約御差許ニ相成候而ハ將軍家御迚　勅之罪御逃レ被遊間敷東照宮以來御代々樣に御對し被遊候而も如何可有哉各方の了簡も承度と御一同ニ御演述に相成候處御前ニ而ハ掃部頭始致畏服候由ニ候得共執政之權威を以不日ニ條約差許恐多くも將軍家を不忠不孝ニ陷ゑ奉り德川家の御稱號を千百歳の後迄奉穢候のみならす將軍家御大病人事をも御辨へ無之砌に乘し無實の罪を羅織し御親戚の御方々を奉禁錮其他正義の大名松平土佐守始兩三人御威光を以隱居致せ候所業惡むニも餘り有と可申候且又御幼君之御時節を幸とし御三家方之權勢を擅ん爲御連枝又ハ家老ニ而主家本家をも押領掌握せんと奸曲の巧ミ有之松平讃岐守水野土佐守竹腰兵部少輔等徒黨ニ引入種々の奸計を廻し且我か意ニ隨ひ不申正義の士をハ貶斥致し東照宮以來の美意良法を追々ニ破壞ニ及ひし事長大息之至ニ候其後八月ニ至り　叡慮之餘り三家大老之中上京いたし候樣重き　勅書御下ニ相成候處御請ニも指支尾水兩家之儀不束之儀有之惣中付掃部頭は御用多ニ而上京難相成且先輩堀田備中守等取扱候儀今更致方も無之依前職重ニ申付候旨議奏衆迄申立先己か逆罪を遁れ可申相工み間部下總守上京爲致專ら恩威を以て押付候所存ニ而賄賂を用ひ九條殿を徒黨ニ引入内藤豐後守ニ命し御所向取締彌以嚴重ニ致恐多く茂　天子御讓位をも被遊候樣奉要候得共三公御始御賢明の御方々被奉輔佐　叡慮候ニ付　朝威確乎として御撓不被遊依之無實之罪申觸し鷹司殿近衛殿三條殿御落飾御慎被遊候樣取計其他諸大夫始何一つ罪科無之者を召捕關東へ差下し夫々非道之處置致し專ら虎威を以て天下を屏息せしめ畿内の開港並邪教寺取建等之本條約指許且青蓮院樣御英邁を奉忌御失德有之樣申觸し御寺務を取放奉幽閉候所業乍恐　王體ニも奉迫候樣顯然ニ而北條足利之暴横ニ均しく不共戴天の國賊といふへし嗚呼此儘ニ打過なハ

神々たる神州一洲年々不出内地之奸民罪數ニ麾き彼か勢焰を助け皇國の奸賊平身低頭して彼か正朔を奉ること蒙の上ニ見るかごとし苟も人心有之もの實ニ痛哭長大息ニ不堪事ならすや雖然東照宮の德澤未た地ニ墜ちす御三家御一門ニハ尾州殿水戸殿一橋殿越前殿阿波家因州家の如き德川御家輔佐の良將も有之外諸侯にも薩州仙臺福岡佐賀長州土佐宇和島柳川等天下の爲め忠憤の念日夜不怠有名の諸侯も不少候得者内ハ則御家門方將軍家を奉佐專ら内政を修め外ハ則有名之諸侯一意忠力を盡し武備を整へなハ神州の耻辱を一洗して　叡慮を奉安事天地神明に誓て疑ひ有まし依之當今事態の概略を記して天下の公論折衷を待左袒して天下を興起せんと欲する所也周の衰る婦人すら不恤錦して周家の衰るを憂ひしニ況や二千餘年　天恩を戴き貳百年來東照宮の恩澤に浴する者誰か報效の念なからんや草莽の小臣等痛憤切齒の餘り寢食を不安日夜遺憾を呑んて時世を憂ひしかに彼か罪惡日を逐て增長す豈徒德川御家の罪人而已ならんや實ニ神州の逆賊也然則天地神人同憤の時ニ乘し天下諸藩の同志と合力同心して天下の姦賊を誅伐し神罰を蒙らしむるもの也

安政七年庚申三月イ

三月三日櫻田刺客大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之助來りて我藩龍口の邸に投す

〔撥反雜記〕

（前略）十七人之内四人者此方樣御屋敷表御門より入込案内を乞候間御取次大島五郎八出迎（中略）先御坊主伺公之間へ致案内置御小姓頭御留守居いまた出勤無之候間大急申遣候處御小姓頭出方ニ相成候間長谷川神谷打合表下之御間ニ引直右兩人共應對有之候吉田平之助御城ニ而御老中樣へ御屆相勤候水戸樣へ御知せ御使者中根平八郎直ニ相勤中候三月三日御廣間ニ而應對中根平八郎白木大助渡邊市郎右衛門大島五郎八

〔夷事輯錄〕（江戸來狀の二）

（前略）丁度御小屋ニ而節句之神酒初居候處此時朝五ツ半時分也表御門ゟ血染ニ成候士四人頼々ト高聲ニ而駈込御門番ゟ押ヘ候間合もなく御玄關ニ駈上り候ニ付御廣間御取次より應對之處只今井伊掃部頭を打取候ニ付御願申度儀有之候間太守様ニ其段被仰上被下候様と之事ニ而大騒と相成其儘直ニ御小姓頭詰所之表下之間ニ通しニ相成同所ニ而手疵療治被仰付四人之内貳人之年頃三十六七四十餘も相見殘之三十計り二十三四歳此若士大關和七郎と申余程人品もよく美男ニ御座候名付ハ則別紙之通右名付且合戰之趣之四人者ゟ咄候趣ニ御座候此大關ト申者鴛手ニ懸り掃部頭様首を打落し候由其外之井伊家之死人ハ皆首ハ刎候由（略下）

〔街談紀聞〕

右四人之姓名

大番　大關和七郎　二十五
馬廻三四郎弟　森五六郎　二十一
鐵炮師　杉山彌一郎　三十八
檜役　森山繁之助　二十六

〔全書〕

（前略）御取次役應接致し中ノ口に案内爲致御城坊主參上之間に通し湯茶なとにゐへ猶表下之間に四人一同閉置御次醫寺島宗澤診察振出しゐ湯藥及與へ引繕之度等被下致度願くゝ氣力折合もの話ニも及候事

〔御預人一途、御預人一件風說聞書等〕

聞取書

昨朝五時頃表御玄關に案内を乞候付罷出應對仕候處私共水戸藩中ニ而唯今井伊掃部頭殿を討取申候御役人様に罷出候（イ二字ナシ）管ニ御座候處いつゝも此節國許より始而罷越候者ニ而御當地不案内ニ付此方様に罷出申候公義之御法通。被仰付候様（イりに）有御坐度存念ニ付夫迄之間は乍御難題此方様に御有被下候様ニ宜敷奉願候且又此段上屋敷に急ニ御知せ被下候様との事ニ御坐候尚其場之始末一通承申候處櫻田御門外辻番所と松平大隅守様御門之間ニ而御行列を見懸左右ニ別レ只通り懸り之體ニ而御駕之左右より仕懸り候處向方よりも數人立寄り及爭鬪候内兩方より四人計近寄左右より御駕越ニ刺留直に御駕右之戸を明け引出不殘ニ而一刀宛切御首を取左候而一同ニ聲を揚散々ニ引取申候に付外々之面々者何方に參候哉相知不申候段申出候右者自然聞取違之儀茂御坐候歟覺居候丈之處相認申候

三月四日　　大鳥五郎八

〔佐田文書〕

（前略）此方様表御門ゟ四人入込御玄關ニ案内いたし水戸殿家來井伊殿を打取候付暫之間宜敷御頼申候と申述水を所望ゟし候付駈込相頼申候而之可致様も無之其段水戸殿に御知せ公邊ニ御伺相成候處此方に御預ニ相成尚脇坂様ニ參り居し四人之内一人ハ深手ニ而相果三人御預ニ相成都合七人ニ而御座候右四人之相手ハ向も强敵之處ニ切入候と相見へ不殘深手計ニ而何ゟも刀なとハのこのゝの様ニ相成損し候方强ク烈しキ戰爭ニ而有之たると存候元亀天正眼前ニ相成東西ニ奔走無申計天下之亂逆クハ有之間敷歟大變ニ而御座候此末如何様之處ニ治り申可哉見込付兼勿論御屋敷内之手賦り御門々も締井伊家之家來共主之仇申受度押懸候共一切相渡不申公邊ゟ御差圖無之候而ハ可渡様も無ク是非込入候ハ

、弓矢ニ而相渡候より外無之心配仕候事ニ御座候右之面々存念之井伊公神州之武備を落し異人之侮を受私之我意ニ募り天下之爲を存候面々を押込らゝ候付右之通之趣ニ相聞へ大取紛之間ニ相認メ荒々申上候此節宿元ニ仕出之筈ニ御座候へ共女更色々氣遣仕候間仕出し不申候付尊兄ゟ宜敷御さとし可被下候軍配之指揮者追而之言上勇氣ハ日比ニ十倍仕汚名を後代ニ殘し候儀ハ仕不申候付其處ハ御安心可被下候此上之御先祖様已來之御武名落不申臣下之覺悟專一ニ心得居申候幸相州詰代時分之事ニ付人數も呼取可申大ニカを得申候事ニ御座候以上

三月四日　　長谷川仁左衛門

都築四郎様

三月三日我藩は刺客大關和七郎等來投のことを幕府に申告す

〔御預人一件〕

一右之次第ニ付早速御用番様ニ御屆且取扱方等伺として御留守居參上可仕處御上り刻限過候付吉田平之助御城ニ上り御坊主を以大目付様ニ御逢相願候處於大廣間御縁頰御屏風前ニ而大目付久貝因幡守様御目付駒井山城守様御逢様子御尋ニ付右之始末一通り申上被者共如何程ニ取計可申哉不容易咎人ニ付一刻も早御差圖相成候様仕度段申上候處至極尤ニ被成御承知扨又掃部頭之御しるしハ彌上タ候哉と御尋ニ付平之助儀ハ〻また右之面々ニ出會も不仕候得之實否之所ハ聚承知不仕於櫻田御行列ニ斬入奉討候と計承知仕候段申上候處夫々御承知被成相控居候様御申聞有之左候而亦々八時比ニも相成最前之席ニ御呼出追而御用番様御宅ニ御呼出御差圖可被成候間引取候様被仰聞候

三月三日我藩は刺客大關和七郎等來投のことを水戸藩邸に通す

〔撥反雜記〕（閏三月十五日附大神氏來狀の一節）

一水戸様ハ御知ゟ之御使者ゟは申候平八郎被差越候所ゟ之外混雜ゟて御承知之段応御返答に相成申候ゟ〻しあとたらて水戸様ゟ御使者此方へ來る

〔尊攘錄櫻田並東輝寺一件、御預人一件風說聞書等〕

水戸殿元家來

森五六郎
大關和七郎
杉山彌一郎
森山繁之助

右之者共御屋敷ニ罷出候儀ニ付過刻御使を以被申入候趣致承知被入御念候儀存候然處右四人之外ニも同意之者有之不束之所業有之ニ付捕方之者指出候處其場より立去當時尋中之ものニ有之尚更右之次第者兼而公邊に及御達置候品も有之且つ今般之所業ニ付而者早速被相伺候事ニ有之共御屋敷よりも公邊御達御坐候事と被存候得者御指圖次第御取扱御坐候様致度此段御挨拶旁使を以被申入候

三月三日水戸藩は櫻田刺客大關和七郎等四人本藩邸に投したる始末を幕府に申告す

〔御預人一件風說聞書等〕

一水戸様ゟ御城附を以御屆

水戸殿元家來

大關和七郎
森五六郎
杉山彌一郎

森山繁之助

右之者共共外同家來之由拾五六人同道今朝外櫻田御門外ニ而井伊掃部頭殿供方之者と及刄傷同道人之内卽死怪我人も出來候由右前書四人之者共細川越中守屋敷ニ罷越其節之始末申述御法之通取扱相成候樣申立候由ニ而右屋敷ゟ使を以申入有之共餘同道之者何ゟも離散致し候哉行衛不相分候趣相聞候處右之者共は變而不相濟次第茂有之被爲對公邊ニ恐入候と申納言殿殊之外被致心配追々取締方下知被致候得共一圓承伏不致去月十八日之始末ニおよひ候樣之儀共儀國許立退候者ニ有之候處御場所柄を茂不辨不容易所業不心得至極之者共ニ付於公邊御大法之通御取扱御座候樣被致度共餘流賊共御府内ニ立入候茂難計早速手配方嚴重ニ相達幾重ニ茂探索爲致召捕候上ニ而者早速御屆取計可申尙又於公邊茂御手當御座候樣被致度此段旁及御達候樣被申付候以上

三月三日

三月三日彦根藩は藩主以下遭難のことを幕府に申告す

〔御預人一件、尊攘錄櫻田並東禪寺一件、街談紀聞〕

今朝登城懸外櫻田松平大隅守門前より上杉彈正大弼辻番所近之間ニて狼藉者鐵炮打懸凡二拾人餘拔連れ駕を目懸切込候付供方之者共防戰致し狼藉者一人打留其餘手疵深手等爲負候付悉逃去申候捕者儀捕押方指揮致候處怪我いたし候付一と先致歸宅候尤供方始卽死手負之者別紙之通御坐候此段御屆申達候以上

三月三日

別紙

深手　日下部三郎右衛門　　井伊掃部頭

手疵　片桐權之進　　同　澤村軍太

卽死　河西忠右衛門　　手疵　松井猪三郎

同　小河原秀之丞

同　柏原徑之丞秀之

卽死　加田九郎太

同　永田太郎兵衛

手疵　草刈鍬五郎

同　松居貞之丞

手疵　萩原吉八郎

同　越石源次郎

薄手　取狩英之允

右之通御坐候以上

同　渡邊泰太

同　藤田忠藏

手疵同イ　水谷求馬

手疵イニナシ　岩崎徳之丞

薄手　草履取吉田太助

手疵　陸尺彌右衛門

同　同　勝五郎

右之通御坐候以上

〔撥反雜記〕（同三月十五日附大御氏來狀の一節）

一井伊家三月三日御屆ニ別紙とある別紙は御供人之卽死深手手疵薄手を認ゟる書付也二十人餘之人々ゟ卽死四人あり近藤良藏の見たゟる野服一人供衆七人と有ゟ不合不審也又水戸浪士の稻田重藏深手ゟをバ其場ゟ死ゟるゟるゟしと云ハ此野服の一人ゟるゟをけをハ水戸出奔の戰死も一人ゟり此屆書五六日比世ニ出二十三四人の名あり十日過に世ゟ出るには二十七八人の名あり三四人の增名ありて供頭之何之某無疵と有水戸生ハ供頭の首ハ打ゟるが如くにいひたをハ彌以不審也

三月三日刺客大關和七郎等八人我藩に預けらる

〔御預人一件風說聞書等〕

一三月三日八半時比御用番内藤紀伊守樣ゟ御呼出ニ付清田新兵衛釜上之處左之三通以御用人被成御渡候袖ニ細川越中守ニ

右之者共町奉行に引渡候樣可被致候

三月三日

右一通

水戸殿家來大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之助儀町奉行に引渡候樣最前相達候處直に御預被仰付候間別段引渡候に不及候事

右一通

水戸殿家來
大關和七郎
森五六郎
杉山彌一郎
森山繁之助

細川越中守に
水戸殿家來
大關和七郎
森五六郎
杉山彌一郎
森山繁之助
佐野竹之助
黑澤忠三郎

右吟味中其方に御預被仰付候手當向等委細之儀者池田播磨守に可被承合候

三月

池田市五郎
齋藤監物

三月三日本藩は刺客大關等に對する幕旨の傳達及び其處分に關する疑似の點を列記して幕府の指示を請ふ

〔御預人一途〕

御留守居清田新兵衛口演として持參

一當方に驅込候四人直に御預と申譯右四人に申渡候廉公邊より御役人衆御越被仰渡候哉亦者此方に而申渡候儀に御座候哉

一右四人之外別に四人御預之旨被仰渡候右者いつゝ之御向より御渡に相成候哉

一八人之面々一間に入置可然哉又者一人宛別々に不致候而者難叶哉若又一間又者二ツ間に而相濟候哉

一銘々所持之大小並懷中者請取置可申哉

付札
第一項

此儀直に申渡有之候樣

第二項

此儀脇坂樣より御渡に相成る

第三項

此儀一間々々に入置候樣

第四項

此儀伺之通

（右指示に因り留守居役二人大膳等之居宅に臨み亀命を傳ふ四人則謹て旨を領し其佩刀及所持之諸品を擧て之を藩吏に交付ぜり）

三月三日櫻田刺客の内脇坂家に投じたる黒澤忠三郎等三名我藩に引渡さる

〔御預人一途〕

三月三日

一夕七半時分　南町御寄行　池田播磨守様御組同心大關庄三郎　北町御奉行　石谷因幡守様御組同心三井伴次郎右兩人御留守居方に罷越申出候者今日御預人之内佐野竹之助以下四人を脇坂中務大輔様御屋敷ニ而右播磨守様より御引渡之筈ニ付御受取之御人數相揃候ハヽ脇坂様に被差越候様左候得ハ南町懸り御徒目付等出役可申旨申出引取候事

同日

一右申出且御用番様御差圖之通ニ付御受取御人數并挑灯等被差出候様左之通之書付吉弘加左衛門より御奉行に相渡委細及演達候事

一御物頭	騎馬　四人	
一副　士	右同　四人	
一歩御小姓	平服　拾七人	
一足輕小頭	四　人	
一足　輕	駕引尻カラケ　八十人	
一御醫師	羽織なし　本道　外科　貳　人	
一駕　籠付	四　挺	

一御物頭　騎馬上下　一副士　騎馬上下

一各御人數夕七半時過相揃候付吉田平之助、助勤　吉加左弘衛門兩人騎馬上下　御人數を引連西御門潛より操出御老中脇坂中務大輔様御宅に罷出公用人に應對御渡并請取之手續且手負之面々容體等承合候處實之一旦町御奉行池田播磨守様に御渡之上御同人様方に御渡ニ相成筈之處左候而ハ必多物延引手數茂懸候付播磨守様手付御役々脇坂様に出張一旦御同所ニ而請取渡相濟候上於其場直ニ右御役人より此方に引渡之筈ニ付表向之播磨守様方御受取之振ニ相心得候様將亦御引渡四人之内佐野竹之助重手ニ而相果候付御引渡御斷申上殘り三人を一ト先播磨守様御手付御役人より受取其儘平之助加左衛門に引渡相成候付出役之御醫師より診察いたし候處三人之内齋藤監物と申者別而重キ容體ニ相見候付途中ニ而自然之儀茂難計其段之御聞置被下度相答順々ニ駕ニ移シ銘々之大小請取其餘所持之品々之明日御渡被成候様申談夜五半時分脇坂様御屋敷内通り　通用御門より操出シ途中無異儀當御屋敷西御門大戸を開順々操入中ノ口より上ケ表上ノ御間に問取等補理被閣候事

但御閣出來之内此處ニ被閣書夜御物頭並御小姓組歩御小姓交ルヽ〳〵致警衛居御閣出來之上同所に被入置候事

一御閣ハ御馬場脇御稽古場ニ出來警衛ハ右同斷其外足輕等多人數被仰附置候事

一高張挑灯　八張
一箱挑灯　十貳張
以上

御引渡名前

黒澤忠三郎
蓮田市五郎
齋藤監物

〔街談紀聞〕

一(前略)脇坂様ニ請取人被差出候人數等左之通

御留守居騎馬

一上下拾壹人　吉田平之助

麻上下着助役右同

一同　吉弘加左衛門

御物頭右同麻上下

一上下九人宛　魚住源次兵衛

寺本八郎右衛門

瀬戸熊助

金森兵左衛門

御小姓組騎馬各麻上下

一同八人宛　門川太兵衛

八木七郎助

永田武左衛門

柳瀬尉助

御醫師本道

十徳着權門駕

一上下三人宛　寺島宗澤

右同外科

同斷　金子民朴

一歩御小姓拾貳人

一物書御側足輕一人

一外様足輕五拾五人　小頭之五人也

小頭ともニ

一御長柄之者廿五人

一駕　四挺　舁人共

一長持一棹　持人共

右之通被差越脇坂様御屋敷ニ熊口町御奉行池田播摩守御役人出張左之面々御引渡有之

大番

黒澤忠三郎　三十二

寺社方

蓮田市五郎　二十八

齋藤監物　三十九

右之通夜五半時頃御屋敷ニ連越中ノ口ヒヨリ入三人共深手之處忠三郎之御間内歩行いたし候故歩御小姓兩人左右ヒヨリ手を添申候市五郎監物之歩行いたし兼候付蒲團ニ載歩御小姓三四人ニてかゝへ表御使者之間ニ孰も一所ニ被差置支度等被下候事

但本圍之御稽古場貳間半梁ニ八間之中カニ格子作出來一人ツヽ仕切翌々五日之夕被移入間取如圖

一警衛所兩所　御小姓組二人宛書夜詰切

一上番所兩所　右同斷

一番所四ヶ所　外様足輕二人宛書夜詰切

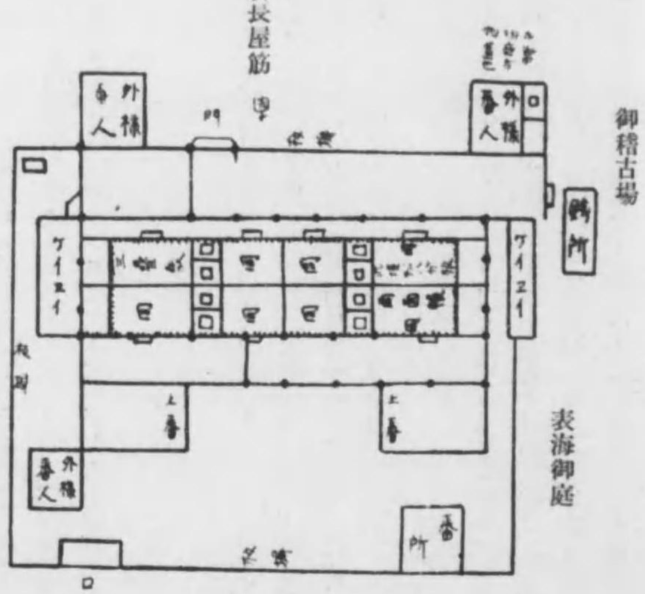
但不寢番

一支度見繕其外御圍内萬事之世話役

歩御使番五人歩御小姓八人

但兩役ともニ書夜相詰御長柄之者八人

右之外御圍付御長柄之者拾人



〔安津免久佐〕（江戸来御之　寫の一節）

一此方様御門々々同前（一切戸立ニて　とあるを受く）ニ而御小姓組歩御使番等詰置ゝてもくゝり戸も締置姓名聞屆候上通候事尤御門中ニ別段假番所出來ゝて足輕詰其外大筒小筒備置玉薬込置候事右ニ付御四隣御屋敷々々ニハ預り人ニ付右之通用意備置候間万一狼藉者等押寄等致候へハ右備筒も打放シ防方致可申旨御答付候ニ付四隣共ニあたゝゝ窓ニ鉄戸ゑめ方等致候由之事

〔夷事輯錄〕（江戸来　狀の一）

（前略）脇坂様駈込候四人……暮六ツ時過請取ニ參り候内壹人ハ深手ニ而相果候間三人連歸り申候三人共ニ大分之手を負歩行も出來兼候程ニ御座候夫ゟ直ニ假屋御拵へ終夜之作事ニ而今日（四日）迄も出來候程難計此御屋敷詰之仁不殘駈參り晝夜不眠ニ而護り居申候今ニも井伊家ゟ落人を疑押取ニ懸り候も相知レ不申右防禦之御用意中々混雜之事ニて御小姓頭初百本鎗鞘を拔取吟味いたしトメヲトキ置御飾り矢ノ根をかへゝら覺悟之様子勇々敷事ニ見申候

〔仝　書〕（江戸来　狀の三）

（前略）都合十七人之内四人即死四人脇坂様へ駈込四人ゑ此方様跡ハ行衛分不申脇坂家之四人昨暮ニ受取人被差立矢張昔之義士受取之振合之由御留守居吉田平、吉弘加左衛門二人御物頭魚住源次兵衛列四人組引連御小姓組永田武左衛門列二人以上馬上惣勢百五十人計足輕ハ長槍長棒股引馬上之面々ハ上下着夜五ツ時分駕ニ乗連越ニ成尤高張等賑々敷勇々敷相見申候裏御玄關之次之口ゟ上り候ニ付見物ニ參り壹人ハ脇坂ニて相果候由三人參り壹人ハ白木錦ニ而包漸駕ゟ歩出候得共脇ゟ手を添候故歩出來殘二人ハ駕ゟ出も出來兼候ニ付ゟとんニのせ候儘四人懸りニ而御門内ニ抱込余程之深手ニ相見今朝も飯抔ハ喰不申打臥居申候昨夜中懸り御稽古場を仕切り御閣出來今日直り候由御門々御物頭ゟ固ニ相成居申候（下略）

三月四日

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

小山　佐野藤右衛門悴ニ而一刀流劍術達人之由

佐野竹之助　右之者二ノ腕を被切候得共大丈夫之者故同類共召連脇坂様へ訴出私發頭人之趣申上願書差出候由

但此者　此方様へ御預ケ之前手疵ニ而相果申候

〔仝　書〕

佐野竹之助脇坂様ニ駈込此方様ニ御預前深手ニ而死ル今度十七人之引廻し之由横濱ニおゐて昨年夷人切害致候者之由肌着脊之横ニ誠忠之二大字を書し下ニ

ゑきしまの錦ゑ御旗捧持て皇御軍の魁をせん

櫻田ゐ花のかゑねハ晒ともなゝたゆむゑき日本魂

表ニ佐野竹之助ト書せりとそ

〔仝　書〕

御預人ニ御差合之衣類等左之通り

一黑羽二重紋附小袖　貳拾壹

一黑羽二重袷羽織　七枚

一裏付袴　貳具

右之袴なしの者兩人と相見申候最初ゟ袴着用致候者も御座候此ハ屹ト致し候處ゟ承り候事ならら少し不審私見候處ニ

而ハ四人ハ同様之袴着用靜坐致居候事ニて四人之者ニハ同様に御渡し共ニ而ハ無之哉と相考申候

一麻上下　六　具

右者評定所ゟ御呼出之者六人御座候ニ付御差合ニ相成申候殘一人ハ深手ニて御呼出無之無程死候

一木綿縮半　五枚　六枚か不審

右何ゟも最初御呼出之節ハ五人故ト相見申候後之六人故定而同様歟と相考申候

〔安津免久佐〕（江戸來狀之寫）

一御預人ハ御稽古場ニ罷出來被入置候ニ付表御庭外御馬場ニ假小屋御馬場長一ゞゝニ出來木挽丁八丁堀相州詰之御家人等御呼寄之人數不殘相詰居牢屋番評定所出候節之警衛行列立等いたし候事（中略）

一右牢内ニ而三度二汁三菜御膳被下候事衣類始絹夜具出來ニ而被下候事

一若殿様ゟ御酒御肴一度被下候節白金ノ方ニ向奉遙拜候事

〔撥反雜記〕（閏三月十五日附大神氏來狀の一節）

一大關列五六人ゝハ追々人ニ話共聞候事有之聞取書種々有之候併し此節の事一切大關列へ尋申間敷と達有之候間人々も少しハ遠慮いたし尋不申候へ共一つ二つ見申候内扨大關云一箇の私を以て上を犯候ハ如何の儀ニ候へども　天朝公邊のため誠忠を以て建議有之候主家へ幾度も耻をあたへられ候事姦佞不忠之至ゝ付同志をかゝらひ此節の仕方に及候と申候由

一同人の言ゟ別人（歩小姓なるべし）の聞取候書付の内扨大關云一昨年間部下總守様上　京之砌井伊掃部頭様兼而間部様と御談合にて今度將軍　宣下之儀際取候はゝ水戸家より將軍　宣下願上若其儀不被爲叶候節之　京都へ切込可申との前中納言殿御存意ニ有之趣右兩人とり内々　御上聽に達し申されたる由ゝて此儀前中納言殿ゝおひてハ一向不被存事ゝて　京へ切入抔と申事ハ巷々可有之事ニ無之全兩人之好計邪術ゝて一ハ紀州への將軍　宣下を急き一ハ前中納言殿を讒し被申たるにて候前中納言殿御憤ゝ達し黄御立腹御無念ゝ被存候を臣下の身として何分たゞゝをりがたく此節之始末に御座候

一森五六郎話異國人無禮申募り近年別而　神州ゟ侮候へゝ彌以　神州之耻ゝて誰不切齒也　神州之武威ゟ立可申正議を一人ゝてさゝへられ遂に夷狄の耻を受に至り候事口惜存候ゝ付此節思立候事ニ御座候

一同人話一昨年八月水戸　勅諚被下其後返上之事掃部頭殿より追々被申已ニ去十二月十八日ゝ返上の事公邊より御達ニ相成急ニ返上可被致議ニ有之候此春ゝ相成遂ゝ返上之事公邊へ差出ニ相成申ゟき治定ニ付口惜存此節の思立仕候右勅諚返上の事聞人より尋懸たれば森より答申候事ニ候又秦檜王倫が話ニなり又ヘルリ初て浦賀ゝ來りし事とり夷狄登城いたし加奈川假條約ハ夷人を懼れ　勅許なきゝ取結ひついてハ前中納言様越前様尾張様御咎遂ゝ又去年五ヶ國へ本條約又尊王攘夷之人々を死に處し遠島押込堂上方御落飾御實　青蓮院宮様同法不和之眞宗寺ニうつし奉りかけまくもかしこき　天皇命玉體御一人如何とも難被遊迫り奉りし事とその話ニ相ふり森涙ぐみ聲を呑み頭を低て默す附の殺人共來ゟば話を止て引取候事○此對話大秘物の由承り申候○後ゝ聞三月四日ゝ佐野竹之助脇坂様ゝ差出候一冊之書物と云もの爲見しゝ趣大抵此話共ゝかゝる事なし追てうつし差上可申（附列曰斯書所謂素懷の書也予も既く寫得て此記錄の外ゝし置り）○水戸生が持參の書ゟ見るに大抵同しきハ奇ふる哉奇ふるゝな嗚呼（アヽ）かしこ〻〻○是或人乃對話委敷事又は手扣ニありと云

〔街談紀聞〕

一御當家に御預之者未御閑出來さる間表之御間内に罷在候節被附置候人々之中に物語之趣左ニ錄

一大關和七郎いふ一己々々之私を抱上を犯候ゝ如何敷事ニ候得共云々（撥反雜記と略同しきを以て之を略す）

右之咄ヲ打消候模様ゝて森五六郎云

神州之恥ニ相成候事を掃部殿一人ニて遮留ラレ候様子ニ付諸人之本懷空敷相成候を悼ミ打立申候○仕合ナルハ雪降ニ

て鶴脇之人々合羽柄袋を用危急之間取兼候間勝利を得候事も有之候○此方様に斬込候譯之爭鬪に疲纏に茂かゝ候而者此上茂なき恥と思御難題を奉願候

一綸旨を御取揚に相成候哉之風說に候實否如何と尋候人有之候得之度々之催促に候得共未御返し申間敷由答候

一此節國許出入大に六ヶ敷候間町人之躰に出立二月十八日廿日頃まて忍ノ〳〵に踏出し落ノ〳〵ゝ同月廿五日迄當所に着矢張町人に身をやつし居候間中々ゆゝしき事にて候と申候今朝愛宕山にて出合夫と申御登城之道に出懸候由尤當朝致參着候もの有之由話候

一世上之風說に御領分長岡と申所に騷動有之哉に承候此節御途中にて何と歟御聞共ハ無之哉と尋候處長岡にも當國之者四十人計出張罷在候上下共にハ百貳拾人計も可有之哉と申候右之人數者不殘各同志之人に而在之候哉と尋候處私共も一兩人竊に申談候ヶ樣之事者容易に不致口外秘し居候得共一味之內と申話候者有之候故ゟ當所にても十七人に相成申候長岡に出張之人數之別に申合樣子者存不申由話候

一後レ而御預之內と申藤紀伊守樣に馳込候ものも承不申哉と尋候間未承不申段及答候處夫も如何之事に候哉內藤樣に も參ル筈にて候ものをと申候由

私に云此時內藤樣も御用番之後御預之內佐野竹之助と相見馬場向御門御番所に罷越內藤樣に案內致呉候樣申出其次第口に錄置候戸田七之助樣ゟ御屆之通にて後道脇坂樣に走込素懷書等差出申ゟると相見候事

一雪降にて寄付ヶ候にも都合宜戰に成候而も相手方も合羽着用不怪邪魔に成候樣子にて大勝利を得申候今朝之雪も天之與へに而本望達ゟる由申候

一掃部殿を仕留候迄手負候ものは無之候打取候後猶嚴ク挑戰に及其節何ゟも手負申ゟる由

一黑澤忠三郎に付添居候步御小姓藤木源右衛門に咄之內に源右衛門儀者卽朝外聞として罷越鬪爭之跡ゟと見聞致候段及噂候處黑澤より申候ハ茶具見に首級入持居候ものハ見受不申哉と尋候付成程見請申候能口にて石に腰を懸餘程爭手と見受申候處此節掃部殿御首者如何ゟゝし候哉と尋申候處左之手を打落サレ居候もの太刀ゟ貫立去候由姓名相尋候處私共より一町計先に走行候を見懸候事に付何某と申事相分不申候薩州之有村次左衛門也目附之前ゟとは如何いたし候哉羽織にても包候哉又之塀に捨候哉相分不申候と答申候

一本懷之主意者同志之內一人所持致居候へとも何方に立去候哉相分不申由

一御駕越しに差通し候節之咄序に掃部殿ハ不怪肥滿にて大體に有之由申候

一掃部頭樣御駕之左右に四人仕懸ゟる由大關和七郎咄之其中一方自分差貫キ駕之戸ヲ取捨引出候處最早閉眼絕命にて候首を討んと致し候所へ後より切懸候間其者に立向候故首之外之者より討候由此一條ハ御次小姓谷建藏振藥なと持行與候節承之

一大關和七郎ゟ咄しに者平日劍術致稽古候節相手を刺候樣に之師匠より數々教らゝ候處此節物場に臨中々刺候事難成唯々頭上を防候計之心に成自身敵方を切ル時橫腹邊と思拂候刀天窓或之耳之邊を切申候其上間遠く成中々近寄難く何レに長き刀利方に覺申候又刀之輕重長短利方之事兼而之致論判候得共其場にてハ更に覺不申由

〔御預人一途〕

（內藤閑老に申告）

水戸樣御家來黑澤忠三郎蓮田市五郎齊藤監物今日池田播磨守樣より被成御渡途中無異儀居屋敷に引取申候此段申上候樣越中守申付候以上

三月三日　　細川越中守家來
萬延元年　　吉田平之助

先刻御渡ニ相成候名前之内佐野竹之助儀者相果候由ニ而御引渡無御座候事

三月三日本藩は大關和七郎等預人の給養及び傷痍治療等に關し町奉行池田播磨守に稟申す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕（江戸町奉行池田播磨守へ）

水戸様御家來大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之助黑澤忠三郎蓮田市五郎齋藤監物御吟味中越中守ニ御預被仰付候旨御用番内藤紀伊守様より今日御書付を以被仰渡候依之左之稜々如何可仕哉

一朝夕料理如何程ニ可仕哉若酒望候ハヽ出可申哉之事（各項一字を下し附記したるものは指示なり）

御付札　書面輕き一汁一菜酒者相禁候事

一多葉粉望候ハヽ出し可申哉之事

書面望候共不相成事

一手負之者手醫師療治可申付哉之事

書面之通可爲事

一病氣等之節手醫師藥相用可申哉之事

書面手醫師ニても他之醫師ニ而茂勝手次第之事

一鍼治望候ハヽ如何可仕哉之事

書面病體ニ可任事

一火事地震等之節者別屋敷ニ遣可申哉之事

書面勝手宜場所ニ爲立退其段相屆可申候事

一髮結度由申出候ハヽ家來之者出爲結可申哉

右ニ付鋏相用可申哉之事

書面髮結並月代髮擕候儀餘人ニ爲取計候者格別都而刄物相渡候儀者無用之事

一毛抜望候ハヽ相渡可申哉之事

一料紙硯望候ハヽ相渡可申哉之事

一楊枝抔出し候而苦ル間敷哉之事

書面三ヶ條不相成事

一行水好候節者爲致可申哉之事

書面望候ハヽ勝手次第之事

一爪取度旨申出候ハヽ如何可仕哉之事

書面不相成候事

一夜具枕等出可申哉之事

書面之通爲取計不苦候

右之段奉伺候以上

三月三日

細川越中守内

吉田平之助

三月三日幕府江戸市中の警戒を嚴にす

〔安津免久佐〕

江戸來翰之寫

一三月三日朝飯後大變之砌一旦ハ吳服目附初御門々々一切戸立ニ而往來留り候事其後ハ明候へ共今以大番所御門外番所橋先番所平常ゟ番人も稠敷相詰居其上御門中大戸際ニ茂持出し家板屋根番小屋夜中同前別段詰居候事尤夜ニ入候へハ

大戸ハ平常通詰りくゞり迄通行夫も無提灯等ハ通不申姓名聞屆明シ持參ニ而通シ候事

三月三日幕府は井伊家に命して其藩邸の諸門を警戒せしむ

〔御預人一件風説聞書等〕

三月三日

一内藤紀伊守宅ニ井伊掃部頭家來呼出相達候趣左之通

掃部頭今朝登城之節水戸殿家來之者於途中及亂妨怪我人等茂有之候付而者此上萬一末々心得違之者有之候而者以の外之事ニ付居屋敷下屋敷等門々出入之者嚴重相改候樣可致旨申渡候事

三月三日幕府は彦根藩士報復の擧あるを慮り豫め鎭撫に努むる所あり

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

下タ廻ニ來ル

御留守居より差出之書付五通（他の四通は今之を省く）

此度掃部頭不慮之儀有之候付而之重臣共始末末迄も致心配候由相聞尤之筋ニ之候得共万一家動搖いたし候樣之儀有之候而之以之外之儀ニ付諸事　公邊御所置ニ任置右樣之儀無之樣可被致候彌々之儀者厚　思召茂被爲在候儀ニ付末々至迄一同安心いたし罷在候樣家來呼出。可達。事（内々イ　候イ）

右於紀伊守宅家來呼出し書取相渡之

三月三日

三月三日幕府は三家々老に對し井伊遭難事件につきなほ不慮の變なきを保し難きを以て出入を改め警戒を嚴にすべきを達す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

水戸殿家老衆ニ

今三日水戸殿家來之者多人數掃部頭登　城途中短筒等相用及亂妨怪我人等茂有之候付而者此上末々心得違之者可有之茂難計候間追而相達候迄之書夜共居屋敷下屋敷門々出入之者嚴重ニ相改重役之内相詰候樣可被心得候事

尾張殿　紀伊殿　同文言

右御城附ニ渡之

三月三日幕府閣老參政等浪士の亂妨に對し自衛防禦の策を講す

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

一御老若方被仰合

今朝於外櫻田水戸殿家來之者短筒を以亂妨ニおよひ候付萬一銘々屋敷等へ如何之儀可致も難計若飛道具ニ而亂妨ニもおよひ候ハ、此方ニ而茂鉄炮相用候而茂不苦候事

三月三日

三月三日幕府櫻田の事變を京都所司代に報じ警戒せしむ

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

一飛脚を以京都へ被申遣候

今三日掃部頭登（朝イ）　城懸ケ於外櫻田水戸殿家來共凡三十人程短筒相用及亂妨掃部頭家來共多人數死傷等有之掃部頭ニも怪我致し候右ニ付而之水戸殿ヶ御所向共外堂上方等ニ手入被致且同類之内致上京候者可有之哉も難計候間無油斷心附夫々嚴重ニ手當可致旨爲心得不取敢申遣候事（貳イ）

三月〔ナシイニ三日〕

酒井若狭守殿　　御連名（安藤對馬守　脇坂中務大輔　内藤紀伊守　松平和泉守）

三月三日幕府松平容保等に命し豫め水戸藩士の變に備へしむ

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

一三月三日内藤紀伊守殿御宅ニ而御達

松平肥後守
酒井左衛門尉
大久保準之助
松平越中守

今朝掃部頭登城水戸殿家來共及亂妨候ニ付而者此上水戸表ゟ若多人數出府致候儀も有之候ハヽ、時宜ニ寄可及沙汰候間早々人數差出候樣兼而手筈可被申付置候

〔街談紀聞〕

此五家水戸出奔人捕方御警備之事當二月被仰付置候事

奥州會津（朱の書込也以下皆同之）　松平肥後守
下總關宿　久世大和守
同國古河（常カマヽ野州笠間）　土井大炊守
牧野越中守

同宇津宮　戸田綏之助

三月三日水戸脫藩士高橋多一郎父子大坂天王寺境内にて自盡す

〔夷事輯錄〕

大坂生玉社地ニ座敷借用罷在候中山家家司之由島男也方ニ浪人立入町奉行組ニ手配中去ル三日曉同人宅ニ兩人拔身を持立退天王寺境内ニ逃込候ニ付同寺門を締取圍候よし同寺役人北川順次兵衛宅ニ逃込玄關ニて兩人共自殺致ス右ハ（欣カ）

水戸殿家來
高橋多一郎
右同断　同　庄左衛門
同　篠澤源太郎
同　山崎獵藏
常州安倉郷士　内藤幸助
同　大貫多助

短筒銘々名前を記
差物も持候よし

同時生玉社地男也居宅近邊ニ而壹人自殺仕損召捕翌日入牢

前文壹人ト有之氏名前
不審

〔撥反雑記〕

四天王寺役人小川欣次兵衛北カ玄關障子ニ書置候由
書置之事　血ニテ書付有リタルヨシ
國賊井伊掃部頭を討留天下治世乃爲徽忠　此處血不分　夜大老井伊掃部頭日本之大禁を侵國威賣夷狄天下斯今
果卵危　此所血不知　採
宸庭柱主耻櫻花色心事難伸空死別

右水戸家來　高橋多一郎
右悴　同苗　庄左衛門　四十七歳
十八歳

君記イ
鳥ゝ鳴ゐつまの春は」是マテ血ヲシホリ書此後ハ墨筆
はかしまのかみイ奏イ　こ賊　るイ
眞心ゐふし田の里ゐにるしとそしを

右父子ハ追手かゝ遁かゝく急ニ自害之由大坂より申來る

三月三日夜本藩留守居清田新兵衛吉田平之助本日事變の顚末を老職に申報す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、御預人一件風說聞書等〕

上巳之御祝儀御老中様方ニ之御使者平之助相心得今朝五時過より八丁堀御屋敷蹈出罷越候途中龍ノ口御屋敷より早打五半前水戸様御家來別紙名前の者四人龍ノ口御屋敷表御門より罷出候様押立使を以申來候付其儀差急き罷出候處今朝五半前水戸様御家來別紙名前の者四人龍ノ口御屋敷表御門より駈込手疵破血の儘御玄關ニ而案内を乞候付御取次應對いたし候處右之面々相名乘狼藉致候者共ニ者無之唯今井伊掃部頭殿を打取申候御役人様に罷出候筈之處何ゟも此節國許より始而罷出候者共ニ而御當地不案内ニ付此方様に罷出申候
勿論公義之御左法通御裁許奉請候覺悟ニ付午御雛題此方様に御育被下候様宜敷相賴候との儀申聞候付主意其場の始末

導一通承合申候處私之宿意ニ而者無之公邊の御爲筋を存込櫻田御門外ニ而右之通之及所業候尤掃部頭様討取之儀者同盟十七人之内外手より御印を揭候様心得候付其儘立除候とのの趣申立候ニ付早速問所等取糾案内いたし嚴重ニ警衛手當いたし置候付早々其段御用番様に御屆諸事取扱振を始心得方等相伺候様御用人より申聞ニ相成候付最早御老中様方御登城ニ相成たる時分ニ付直ニ早打御城へ罷出御目附様に御逢相願御直ニ申上候心得ニ而其段御城坊主を以申入候處折節御禮式相始候付暫相控御禮相濟候上大廣間御縁頼ニおゐて大目付久貝因幡守様御目付駒井山城守様御兩人々拂ニ而御逢ニ付前文之趣申上事實右之面々申立之通自然相違も無之候ハヽ差寄井伊様御家來復讐として聞之傳へ屋敷に向何時馳付候も難計素より御指圖伺申之事ニ付及丈ケハ其趣申諭制討可仕候得共主之讐ニ候ハヽ聞入不申猶如何様之大變ニ相成哉も難計其儀第一之心遣ニ付早々公邊之囚人ニ被成候様有御座度段吳々申上候處兩御目附様共至極尤之儀ニ付早々老中方へ相伺可及挨拶候間夫迄差控居候様被仰聞候付引取別席ニ控候處殊之外御手間取ニ付御懇意御坊主等段々手寄を以御模様探索相賴候内井伊様公用方兩人俄ニ御呼出平之助同様兩御目付様御對談相濟候上探索相賴置候面々之内高橋榮德至密承取之趣ニ而内實ハ右四人之申立通り井伊様奉討候儀ハ相違も無之趣ニ候得共現實御打出ニ相成候而者跡々之成行甚六ヶ敷其上井伊家斷絶ニもおよひ彼是不容易儀ニ付表分ハ御手負之儘御切拔御引取ニ相成先つ御命分ニハ無御別條趣ニ相成候へ者差寄人氣之勤搖も相治穩之場ニも至可申哉と專御内評之趣ニ付左も相成候へハ復讐之一段ハ先懸念薄相成可申哉と内話仕井伊様公用方兩人手許も其段御諭ニ而納得仕候歟之模様ニも相聞候處八つ時比ニ至御徒目付組頭齋藤直藏を以伺置候稜々ハ後刻御用番様より御指圖ニ相成候筈ニ付先平之助儀者引取候様演達ニ付差急き引取居申候處無程内藤紀伊守様より御呼出申參候間早速新兵衛參上仕候處前條四人之者町奉行に引渡候様との御書付御渡ニ相成候間直ニ引取可申と致居候内別人出候而尙御達申候儀有之候間暫相待候様申聞候付控居候處最前御書付相渡候公用人罷出御書付貳通相渡候間致拜見候處最前相達置候四人之者町奉行ニ引渡候ニ不及直ニ其方に御預ニ相成候との御書取ニ而外ニ猶壹通の方致拜見候處人數相增八人御預ニ相成候趣之書付ニ付右四人者何方より御引渡ニ相成

候や尋申候處紀伊守様御城より被仰越候間夫等之處公用人ハ存不申候得共今朝内藤様に參候筈之處如何之譯ニ候哉脇坂様へ四人駈込候哉ニ承り候間自然ハ其面々共ニ而者有之間敷哉との咄ニ付不容易面々御預ニ相成警衛向等嚴重ニ仕候儀ハ申上候迄も無之候處差寄井伊様之御動靜何程ニ可有御座哉御聞込之儀共ハ無之哉相尋候處未た内藤様御退出無之候間一向ニ模様分兼候との返答ニ付御退出之上ニ而何卒御聞込の儀も御座候ハヽ何時ゝも參上可仕極密ニ御聞せ被下候様此節之儀ニ付何分宜相願置候段及頼談候處御尤千萬ニ付委細含置退出之上承り御覺悟ニ相成候様之儀も御座候ハヽ早速知せ可申との約束ニ而罷歸御書付之趣者御達申上候通ニ御座候其後猶七つ半前御書付之趣被遊御承知候段之御答御使者ニ參候間差寄御指圖を受不申而難叶稜々書取ニして持參仕公用人ニ逢候處最前之人ニ而唯今退出之様子ニ付暫相待候様との事ニ付控居候處直ニ御退出ニ相成候得共御取込之御様子ニ而漸く暮前ニ公用人出候而御伺之稜々委細町奉行ニ御含ニ相成居候間彼方ニ茂御伺に成居候ハヽ是より御指圖可有之御渡者脇坂様に居候面々と申噂有之跡ニ而過刻御頼ニ相成候井伊様之方御模様承り候處此儀者深く御心配ニ者及申間敷と被仰聞候旨相應之挨拶仕引取申候處町奉行池田播磨守様に御城使參上相伺候處是者井伊様公用人宇津木六之丞富田權兵衛御城に御呼出ニ而精々御論ニ相成候間孰れも重疊呑込歸候間心遣之儀者決而有之間敷との御内意承り罷歸申出候右之内ニ御城使より御出入同心參候間請取之節往來人留之儀及内談候處早速御奉行様ニ申上辻番々々共外南北之町同心大勢出往來留候由鵜殿十郎左衛門様と申盗賊改役様水野出羽守様辻番ニ御上りニ相成御人數の御預人同道御屋敷ニ入候迄御出役ニ相成居其後ハ終夜丸之内御廻り之筈と御供之内より咄候由然處前文追懸御預增ニ相成候分請取之儀ハ脇坂中務大輔様御宅へ罷出候様御出入同心大關庄三郎父子御屋敷へ罷出申聞候得共御渡之向者筋々御達も無之候付御用番様並御町奉行池田播磨守様へ相伺置候處同夕庄三郎内意之通御差圖ニ相成候付七ツ半過平之助加左衛門御人數を引脇坂様へ罷出平之助儀其段相答公用人に應對御渡之振受取方之手續且手負之面々容體等差寄承合申候處實ハ一旦播磨守様へ御渡之上御同人様より御家様に御渡ニ相成筈之處左候而者必多物手間取無益之御手數も相懸殊更内分承り申候へハ近邊今以烏亂體之者も致徘徊候哉ニ而其心遣も有之旁播磨守様手附御役人脇坂様に無程出張ニ相成一旦御同所ニ而御請取渡相濟候上於其場右御役人より直ニ御引渡ニ相成候筈ニ付表分ハ播磨守様より御請取之振ニ相心得候様將又手負之者共ハ四人共深手ニ而内兩人者猶更手重く内實壹人ハ只今事切申候へ共御双方何茂手數相調候上壹人引放死ニ至候手數いたし候へハ彼是手戻ニ相成御引渡も何時ニ相成候哉も難計夜更ニ而ハ猶更御互ニ前文心遣之廉も有之候間乍迷惑未事切不申振之處ニ而受取呉候様との相談ニ付大切之御預入殊ニ深手之面々自然之儀も有之候而ハ難相成手醫師も内外兩人召連御渡之節診察之上受取候筈ニ御座候處御達之趣ニ違死骸を受取候而ハ主人に申譯も相立不申此儀者幾重ニも御斷ニ及ひ申候其上物騒之御聞込等も有之於手元も心遣不少別而夜ニ入候而ハ警衛向も行屆不申甚無心元候付旁今晩之儀ハ不幾御渡御見合明日ニ至御引渡被下候様有御坐度段申向候處其儀者御役前ニ付而大ニ御差支之儀有之迚も六ケ敷有之候へ共死骸之儀者重疊尤之儀ニ付夫々一應中務大輔様に相伺挨拶可致との儀返答ニ及ひ引取候處殊之外手間取播磨守様附御役人も相揃候得共御引渡之埒に不至申度々催促等もいたし漸五つ過ニ至公用人罷出申聞候ニ者右之趣夫々申達候處御尤之儀ニ被存俄ニ御用番様御伺且播磨守様御取遣等ニ而死骸之儀者直に御同人様に御渡申候様相決跡三人迄御引渡可申と御達等仕直相渡申候將又途中心遣之儀ハ加役之方ニ申達出役人拂等有之筈ニ付此方様よりも別段見廻り之御人數被差出候様との事ニ付直ニ受取渡之手數ニ取懸有之内玄關ニ御渡之面々者被閑候付於同所一先播磨守様附御役人より受取其儘平之助加左衛門に引渡ニ相成候付内外御醫師致診察別紙三人之内齋藤監物と申者別而重き容體ニ付途中ニ而自盡之儀も難計其段ハ御聞置被下度相答五半比順々ニ被差越候駕ニ移銘々大小迄受取其餘之所持の品々ハ翌日御渡ニ相成候様申談置請書も引取之上向方より御役人相見候而受取可申との事ニ相成候付其儘同御屋敷内通りニ而御通用門より御人數繰出途中無異儀引取申候事

三月三日

三月三日薩藩士有村雄助亡命す

〔街談紀聞〕

一薩州様より之御屆如左

家來　有村雄助

右者昨朝より出門いたし今以罷歸不申候右之昨日遠藤但馬守様御組合辻番所廻り場内に相果居申候元家來有村次左衛門と申者之兄にて御座候早速手厚葬方致し候得共未見當不申候此節柄之儀に付御屆申上候以上

三月四日　松平備理大夫内　西筑右衛門

三月四日幕府閣老松平乘全外六名をして櫻田事變の獄を斷せしむ

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

三月四日

五手掛

和泉守殿
遠藤但馬守殿
松平伯耆守
久貝因幡守
池田播磨守
山口丹波守
駒井山城守

右此度之一條御掛り被仰付候

三月四日幕府吏數名水戸人士創痍檢査の爲め我藩邸に來る

〔御預人一途〕

三月四日

一朝四時頃より左之面々罷越夜九時頃引取候事

池田播磨守様御組與力

同組同心

中村又藏
中田林五郎
諸岡常四郎

石谷因幡守様御組與力

加藤九郎兵衛
櫻井平四郎
加納次右衛門

同組同心

御徒目付

山内鉞三郎
大塚久次郎

御小人目付

石川友次郎
藤森多三郎
小池勇三郎
金井半右衛門

黑鍬之者　四人

〔撥反雜記〕

一書曰去四日御徒目附御小人目附與力同心等役々手負爲見分被參大關列へ如何之譯に而井伊掃部頭行列見當切入候哉と

相尋被申候處返答ニ乍恐　上様いまた御幼君ニ被爲在候處掃部頭殿當時之君達御幼君を侮り御政事向恣之私を働依之此節天下萬民一日も不安様之御大老被爲在候而者天下之爲ニ不宜候間昨年以來打取候所存ニ而御座候處此節掃部頭殿首打取候との返答

〔仝　書〕（閏三月十五日附大槻氏來狀の一節）

一四日夕御預人疵改ゝ公義御役人來る（中略）山内石川列より御預人ゝ問し内稜立候事のミ承候扨尋に井伊侯の首級打ゑるとの由ゑるが是は間違ゝて供頭の首を打たるゝてハゑき歟答ニ杉山とも云また森とも供が駕に乘登城いたします歟と云ゑれば問し人暫く默し居ゑゑが口を開き良ありてゑるほどせのみ云ゑるとぞ○右の御役人手負人の側により疵を見るとてゑゑるう〳〵側ゝよりけるが傍ゝ居ける人々醫者などなるべしゝ御警衛は宜しふと申候とて笑話ゝ相成前のゑるほどゝ云たると合て笑さるものゑし○無刀の御預人の側ゝよるとて警衛を頼ミわゑゝぎゑるハ婦人ゝもおとりゑる事ゝて脇坂様の御玄關詰の面々逃こミたるとをあむせ考るに夷人の無禮を咎むる抔云事ある事かたゑ事也まして征伐せん事思もよらず申すも恐かれど

雲上ゝハゑゑつゑ征夷の兵起らんと待たせ給ふゼ傳承し奉るに追討の期も見へす天地初發とり以來皇國に似合さる御代ともゑまたるハ虎と思て狗を畫出し聖人を學て腐儒とゑりたるべし學むさる者も儒佛の心にゑりさて猶腐儒とゑりゑる事也卑賤ノ一夫世殘憂ふるハ愚ゑるにや

〔街談紀聞〕

一三月四日御預之者手疵改として御徒目付兩町御奉行與力罷越候節與力より申聞候ゑ井伊殿家來を打取ゑること可有之ゑ申候處家來ゑ駕に乘申ものゑて可有之哉之段大關申答與力及閉口申候

〔撥反雜記〕

四日九時過公義御役人爲御檢使御預之者共疵所尋御改ニ相成候人數左之通（下略）

〔御預人一途〕（臨檢の幕吏に提供す）

昨三日朝五半時前水戸様御家來之由大關和七郎外三人儀主人屋敷に駈參於櫻田御門外井伊掃部頭様に御手向ニおよひ候趣申聞候付不取敢様子見受候處一人者無疵ニ候得共其外之者共者何ゑ茂疵人ニ付其段主人に申聞夫々直ニ主人手醫師に相懸手當致し警衛向嚴重ニ申付即刻留守居役之ゑの御城に罷出大目付久貝因幡守様御目付駒井山城守様に右之趣申上候處後刻御用番様より御達ニ可相成旨ゝ付引取候處内藤紀伊守様より右四人並同御家來黒澤忠三郎外三人儀茂御預相成候段被仰渡右之内佐野竹之助儀者相果候付御渡不相成仝夜五時過脇坂中務大輔様於御宅池田播磨守様石谷因幡守様御組與力より御渡ニ相成候儀ニ有之然ル處右之ゑの共疵所爲御見分今日各方御出役之上猶御尋ニ御坐候處委細前文申上候通之次第ニ付主人手醫師共に懸夫々藥用手當仕置候儀ニ御座候

右之通少茂相違無御坐候以上

申三月四日

中村又藏殿　　山内鉞三郎殿
加藤九郎兵衛殿　　大塚久次郎殿

吉田平之助印
魚住源次兵衛印

細川越中守家來
醫師
栗崎道破
寺島宗澤

昨三日朝五半時前主人屋敷ニ水戸殿家來大關和七郎外三人駈込候付私共ニ療治之儀主人より被申付今日各方疵處御見分として被成御越容體御尋ニ御坐候　右兩人口上書

大關和七郎疵所

一咽吭下左ニ寄四寸餘切疵壹ヶ所

一同處右ニ寄五歩程同壹ヶ所

一脊左ニ寄四寸餘同壹ヶ所

一右内腹七分程同壹ヶ所

森五六郎疵所

一右額一寸程切疵壹ヶ所

一同方肘二寸程同壹ヶ所

杉山彌一郎疵所

一左手首八歩程切疵壹ヶ所

右何も茂格別之深疵ニ無之候間膏藥打布ニ而卷安桑湯相用脉體茂宜元氣茂有之候間差當氣遣敷儀相見不申候此段申上候以上

申三月四日

中村又藏殿　山内鉞三郎殿　栗崎道破
加藤九郎兵衛殿　大塚久次郎殿　寺島宗澤

〔仝書〕

水戸殿御家來之由申立候齋藤監物外貳人昨三日夜内藤紀伊守様より御預被仰付候付主人より療治被申付候始末御尋ニ御座候

齋藤監物疵所

一百會後ニ掛六寸餘切疵壹ヶ所

一右貳之腕三寸程同壹ヶ所

一左同斷一寸程同壹ヶ所

一左大指より食指中指ニ掛貳寸八歩餘同壹ヶ所

一臂後右貳之腕貳寸餘同壹ヶ所

但縫膏藥打布ニ而卷有之候

黑澤忠三郎同斷

一右肩九寸餘切疵壹ヶ所

一左耳より眼下ニ懸九分餘同壹ヶ所

一鼻左之眼上ニ掛壹寸餘同壹ヶ所

但同斷

蓮田市五郎同斷

一右肩先貳寸餘切疵壹ヶ所

一同臂後貳寸五歩同壹ヶ所

萬延元年

但右同斷

右之通療治之儘御預ニ相成候付脉繫之上十金大補湯並獨參湯相用罷在候得共監物儀重體ニ而此上氣遺敷忠三郎外壹人儀ハ少々宛食事茂給候間差當氣遣敷儀相見不申候乍併變病之程難計奉存候此段申上候已上

栗崎道破　寺島宗澤

申三月四日

中村又藏殿　山内鉞三郎殿
加藤九郎兵衛殿　大塚久次郎殿

三月四日本藩は水戸人士尋問の爲め召喚の往復警備に關し伺書を幕府に提出す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

今度御預人御吟味御坐候節差出候途中警固等者夫々手當可申付候得共此砌烏亂體之者徘徊いたし候哉も難計依之御呼出之節ニハ御役方御差出被下往來固を茂被仰付候樣被成下度奉存候此段奉伺候以上

細川越中守家來　清田新兵衛

三月四日

御付札
内意之趣ハ手限ニ而如何樣とも嚴重ニ相固差出候樣可仕候事

三月四日在府本藩老臣は物頭魚住源次兵衛等に預人監守を命す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

魚住源次兵衛　寺本八郎右衛門

右者公義御吟味筋有之者七人御預被仰付手堅被仰付候間兼而警衛之上聞被仰付若出火等ニ而立退候節者付添警衛をも被仰付旨

瀧戸熊助　曾我淺之助　金森兵左衛門　副士七人
野田伊兵衛　小堀沿助

右者御物頭手足不申候付當分助勤被仰付公義御吟味筋有之者七人御預被仰付候間右同斷付添警衛を茂被仰付旨

御小姓組　御中小姓

右者公義御吟味筋有之者七人御預被仰付手堅被仰付候間上見締として四ヶ所御番所に二人宛雲夜詰方被仰付旨

寺島宗澤

右者從公義御預人被仰付候付御手當として引除被仰付御役宅御呼出之節出役をも被仰付旨

藩邸内一般に

從公義御預被仰付候間御預中火用心彌以入念候樣末々迄堅申付有之候樣

三月四日寺社奉行松平伯耆守等は大關和七郎を明日評定所に送致すべき旨を我藩に達す

〔御預人一途〕

水戸殿家來

右相尋儀有之候間召連人差添明五日五時不遲樣評定所ニ可被差出候以上

三月四日

細川越中守殿
留守居

大闗和七郎　森五六郎　杉山彌一郎　森山繁之助　黒澤忠三郎　松平伯耆守　久貝因幡守　池田播磨守　山口丹波守　駒井山城守

三月四日井伊家の老臣岡本半助等櫻田の刺客を得て讐を報いんと欲し其引渡を幕府に申請す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、夷事輯錄、撥反雜記〕

掃部頭昨日登城之節於途中狼藉者御坐候處右之者共水戸樣並松平修理大夫樣御家來之趣相聞申候掃部頭ニ茂手負と申程之儀ニ付昨夕分而御逮茂御坐候得共何分家中之者共此儘暫時も難罷在御捕押ニ相成候者共御渡ニ相成家來之者共子細柄相心得申度旨一同懇願仕候間何卒御憐察被成下願之通被仰付候樣仕度此段奉願候以上

三月四日

付紙
書面之趣者難引渡筋ニ候事

井伊掃部頭家老　岡本半介
同道　相馬隼人

三月四日在府本藩士遠山三右衛門露船の英船砲擊外人の邦人殺害等のことを在藩の某に報す

〔安政二年異國船一件〕

（前略）

一去月十七八日八ツ比魯船横濱へ入津尤夜中祝砲を發候節全く過チニ而玉込之筒有之英船之腹を打抜大騒ニ相成幸怪我人等無之コンシール諸方より之扱を入漸事濟ニ相成申候（中略）

一去月十二三日比由先日夷人逢殺害候以後夜中無提燈ニ而步行いたし候者ハ夷人共廻り方いたし候者より直ニ取捕候段申出御聞濟ニ相成居申候處六ツ半比横濱左官壹人酒ニ給酔無提燈ニ而歸り候途中夷人ニ行逢約束之通彼共取捕可申と仕候處酔後之事ニ付何歟あばれニ而もいたし候哉夷人共三人ニ而發炮いたし三發共左官之心下を打抜即死仕候扨々氣之毒成事と奉存候

右之外珍覽も御座候得共大取紛ニ而先此段迄奉錄上候以上

三月四日　遠山三右衛門

三月五五日本藩は大闗等に闗する預人及び警固人員等を幕府に申告す

〔御預人一途〕

一昨三日越中守ゟ御預ニ相成申候水戸様御家來預人名前左之通

大關和七郎
右預人
魚住源次兵衛
森五六郎
右預人
寺本八郎右衛門
黒澤忠三郎
右預人
瀬戸熊助
杉山彌一郎
右預人
曾我淺之助
森山繁之助
右預人
金森兵左衛門
齋藤監物
右預人
野田伊兵衛
蓮田市五郎
右預人
小堀沿助
細川越中守内
吉田平之助

騎馬　物頭五人
右同　馬廻七人
徒士　拾七人
醫師　兩人
足輕小頭　五人
足輕　八十人

細川越中守内
清田新兵衛
吉弘加左衛門

右之通御坐候此段御屆仕候以上

三月五日
覺
御預人途中警衛人數左之通

右之通御坐候以上

三月五日

三月五日本藩物頭魚住源次兵衛等をして大關等五名を警固して評定所に出頭せしむ

〔安津免久佐〕（江戸來輸之寫）

一御預人評定所出ハ當人麻上下着無刀手錠切棒駕籠乘り一人々々別行列ニ而眞先ニ御留守居麻上下行列ゝ而其跡歩御使番歩御小姓等警衛行列御鉄炮頭肩衣袴立鎗組之者飛口手棒等持駕籠脇付添跡ニ御留守居並御鉄炮頭之乘馬貳疋宛引せ當人大小白木箱入ニ〆封印上ニ大文字各姓名記し小者持參候事

右之通ニ而一人々々一行列宛ニ〆引續小御門平常不明御門より出入評定所に往來ゝ為し候事

〔撥反雜記〕（白銀邸吏和氣某手錄）

一三月五日御預人評定所へ御呼出之扣

大關　森　杉山　森山　黒澤

右何も服紗麻上下着

一御預人御門出入之儀者以來共河岸御門出入

一右同乘駕者權門錠前付

一御預人一人ニ付御物頭一人　副士一人　歩御使番一人　歩御小姓一人　外様足輕六人　定詰足輕二人　茶辨當一人

ゝめて十三人宛

〔魚住文書〕

五日　評定所御呼出歸節御園へ移大炮等取立懸り

〔撥反雜記〕

一書曰誠忠十七士反答之覺

一御大老井伊様を奉討對公儀奉恐入候右ニ付而者此末如何被仰付候とも少しも不苦候公儀之御爲筋ニ而如是仕候

一連錦ゝる砌剛是迄外國ニ恥辱を受ゝる事無御座候處此節ニ至候而者少兒之取扱それニ不異乍恐東照宮趣意とハ天地雲泥之違ニ而數數事ニ御座候夫とハ井伊様御一人之御取捌より未曾有之恥辱をゝゝへられ奉對京都且奉對東照宮兩様共申ニ無辭夫のミゝらす異情之深意黙傑伺知りたく候已往を以計ゝ候へハ定而御賢慮も可有之且又紅毛無用之品持渡り有用之財寶ゝ交易いゝし暫之間ニ諸國之人民迷惑ニ及ひ最早塗炭之苦ニ落入從今又兩三年之内ニ者只今通ゝてハ諸國蜂起仕異人ゝ差向イ候ハ、一人殺し大金之御償ヒ相成候儀決而被行不申候蜂起之段者必死之事ニ候へハ御征伐御手强共節御手ニ難及御座候ハ、如何被成候哉方今井伊様を御恨申候仁も有之候へとも所謂社鼠ニ而脇より手立無之天下之亂ニ相成候を以私共所行を空敷成候ハ、一年々々よりも將軍家之弱りゝ相成積所ニ而ハ無手して天下を人ニ奪それ候も氣遣敷候ニ付如此取計申候

一評定所ニ而汝ゝ輩遺憾事あらハ井伊様打洩供頭迄討取たる哉と之儀ニ而有之候處私共御行列ニ仕懸供頭共を討取井伊様を御駕より引出御命取申候何そ供頭之駕ゝて登城仕間敷と返答

一當時御家門不殘御咎被爲蒙依怙贔負之御政不如意之次第　神國中豪傑謀士之幾ク可有之干今有之弊改御政無之而者御役々様方御用心無御座候而者相叶間敷恨むらくハ右の殘黨討平不申候事のミ遺憾の至早御所罪候へと繰返ノ〳〵其外無答右十七士評定所返答之趣（闕ノマヽ）

右義氣芬々辭々無盡可惜々々斯人を罪ニ被行候而者聞人袖をぬらし可申候早飛脚ゝ付荒增申進候以上」　三月廿六日借士岐氏書而寫加星楯列

〔街談紀聞〕

一同人（大關）云天下之評定所ゝ申場に始而出候處自分に被問候ニ者此節之事定而老侯之御差圖ニて可有之ゝ問被申候付曾而左様之儀ニ無之不天之譴ニも候ハ、兎茂角茂夫ニも無之ニ老公之一言ニよゝ此節之打立ゝ出來不申神州之恥をゝら

さゝ候井伊殿を討神州を清メ候ハん事と天下之爲と存候一念計ニて自己と實心記不申候而者人之言葉ニよゝ候位ニて中々打立出來候事ニてゝ無之段申答候由少嘲候躰ニ話候由

一老侯ともゝや者ラレ指揮等之義も出來兼らゝ當時慎中彌衰被申何之事も言出無之旨嘲候由

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件、街談紀聞〕

三月五日於評定所尋問之趣

一尋共方共何之意恨ニ依て掃部頭殿を及亂妨候哉

答意趣之次第ハ重疊有之候掃部頭殿ハ東照宮以來之掟を破り外夷を親み　勅命ニ違ひて御國體を穢し御幼主の台命を僞ゝて誠忠を被盡候老公に惡名を蒙らしめ無罪の忠臣ゝ多殺害し其外罪多く有之候右ニ付私共　朝廷より　勅書御頂戴之御恩ニ報奉ゝて違　勅の罪ゝ正し東照宮に御報恩之爲に掃部頭殿ゝ殺害いたし候

一尋共方共掃部頭殿を殺害致候趣ニ候得共殺害ハ不致存命に被居候

答決而左樣ニハ無之相違ふく殺害ゝたし候諸人見分罷在候通ニ候

一尋殺害ハ不致候　答殺害ゝゝし候

一尋共方共何日比水戸表を出奔いたし候哉

答先月中出府之者茂有之候得共始終水戸に往來致し候

一尋老公之內命を承而致候事ニ可有之包隱事なく可申立候

答內命ニ而者無之私共老公に申立候事ハ不宜よしニて種々教諭被致候付不得止事此始末ニ及候勿論私共御屆ニ罷出候程之事に候へハ猶更隱し候儀者無之候

一尋共方共江戸に參何方に罷在候哉

答吉原品川四ツ谷等之遊女屋に日ゝ逗り旅宿と申方ハ無之候

一尋何樣之風躰に罷在候哉

答多分ハ士體ニ無之大小者風呂敷包刀屋體ニ致し途中往來ゝゝし候

一尋何方ニ到着致候哉

答芝愛宕山ニて勢揃致し候

一尋三月三日と申事者臨時ニ申合候哉

答兼而申合置候

一尋何故三月三日とハ相定候哉

答人數揃兼候事有て三月三日迄猶豫ゝゝし候

三月五日在府本藩人甲斐武一郎水戸探索書を提出す

〔安津免久佐〕

三月三日櫻田變事ニ付水戸表外聞被差出候處同五日右之內甲斐武一郎罷歸候上書之越常州土浦迄罷越承繕候次第左之通

一正月末二月始比水戸藩中四拾余人長岡宿水戸ゝ二里出張仕居候處爲捕押方重役被差出候而々久米猶太郎　祿二千石朝比奈彌太郎　三千石伊藤長內島村幾次右四頭を初貳百人余捕押方致候處狼藉亂妨ニ及久米猶太郎重手を負半死半生と承申候島村を初其外下役之面々十三四人余茂手負死人有之出張仕居候內八九人深手ニ而即死十人余手疵を負貳拾人余ハ其場ゝ去逃り行衛相分不申右出張仕居候家居人ハ閉門戸締等嚴重ニ被仰付置候由承申候

一鳥井瀨平四千石若年寄兼帶　先月中旬比登城下り之砌狼藉者兩三人鑓を以突懸り候ニ付右瀨平手を負候由鳥井供方者共相働候ニ付少々打取殘黨逃去申候右之者押方として水戸より所々に日附役同心等を被差出置公義にも御屆被置候由

但森五六郎打取候山御預ニ相成候節此方様に申上候事

一松平將監様前中納言様御子之由當中納言様御養子又ハ御控ともいふ近々御參府之筈ニ而御連供重役七人朝比奈彌太郎久米猶太郎伊藤長内糸川某其外三人夫ニ准シ御同勢多シ御持筒百挺玉薬を込切火繩其外武器類御持セニ相成候由承申候猶石井九郎列先に罷越居申候間同人列方委細之儀ハ御達可申上候已上

三月五日　　甲斐武一郎

三月五日在府本藩老臣は櫻田事變の顚末を詳叙し且つ警備地交代兵士を留めて不慮に備へたる事狀等を藩政府に通報す

〔登攘錄櫻田並東禪寺一件〕

以別紙申達候水戸様御領内水戸より一里半長岡驛と申所へ猶又多人數致出張不穩趣ニ相聞厳重ニ御手賦有之候へ共萬一御府内他領へも罷出法外之所業ニ及候哉も難計深御心配有之由ニ而土屋様御列都合御八家へ先月廿二日水戸御堅被仰付候由別紙一ノ書付脇方より手ニ入拵物共相見不申甚以致懸念候付御用人を以奉入覧置候處一昨節句之朝五時過ニても可有之血ニ染疵を蒙居候士四人表御門より駈込御鍵取ニ罷出申候ハ私共ハ水戸家來大關和七郎森五六郎杉山彌一郎森山繁之助と申者ニ而只今於途中井伊掃部頭様を討取候共儘當御屋敷へ罷出候追而公義より御裁許被仰付候儀ハ素より覺悟の前ニ而夫迄之間御差支無之候ハ、御役害ニ預度との趣ニ付早速御役々咄合御取扱筋等一刻も公邊へ御窺ニ相成御指圖ニ被應候外有之間敷と相決直様吉田平之助御城へ罷出御内意申入候次第等同人書取二ノ印の通ニ御座候且又水戸様へ者御問柄之儀も有之候間右之趣中根平八郎被差越候處不一方御取込之御様子ニ而被成御承知候段御返答有之候様子ニ御座候畢而不慮之儀ニ付御難題ニ相成候段申達夜ニ入御使者罷越別紙口上書之通彼是致候内世上一統騒々敷相成井伊家之模様何程ニ可有之哉差寄咄合等之趣左之通

一右四人之者共跡を追井伊家の御人數大勢龍口へ罷出候も難計其節ハ公義へ御窺被置候譯を以程能及挨拶候儀ハ勿論ニ候得共一息切斷ニ取込無理ニ可致推參哉も難計候付龍口御門々々堅之儀御小姓へ及達御用之外外出難叶旨をも及達候事ニ御座候

一御留守居方定附近藤良藏と申者丁度大變之場所ニ行逢見聞之趣三ノ印御留守居書取之通ニ御坐候

一有之場所並御城近邊之有様爲外聞歩御小姓差出置候處四之書付五之書付の通ニ御坐候

一水戸様御家來同志之面々都合十七人井伊様御登城を心懸御行列兩脇を被通丁度其朝未明より雪降ニていつれも種々ニ形を變し傘を差居候處其内より御駕ニ鐵炮を二發打込夫を相圖ニ其儘一同ニ傘投捨切懸一同切結候暇ニ御駕の双方より刺し候上引出御首を取銘々一刀宛手向候由一統之風聞第一ハ駈込の四人の咄ニ而相分り申候

但井伊様御供之面々者何れも冠笠合羽ニて急ニ拔捨ても難成十分之働出來兼候由ニ御坐候併八人之刀及一覽候處及ハことごとく受服切服二三寸と續候處ハ無之程井伊家も餘程働き相見候へ共不意之事大敗ニ及候と相考申候事ニ御坐候

一右十七人の内死骸手負等江戸表へ相分居候分都合十四人差引殘三人程及不足申候是は井伊様御首を持水戸へ逃去候ニ相違有之間敷と致風聞候四ノ書付ニ有之候首は井伊様御供頭之首と申事ニ御坐候

一井伊様より二十人三十人宛追々ニ御人數御繰出ニ相成候抔と申事相聞候付猶又歩御小姓外聞差出候處長州様御屋敷脇ニて白股引着の者四五十人外ニ士と相見候者二十人計り罷通候付見送參候處井伊様御屋敷へ入候由是ハ御下屋敷などより罷越候者歟又はいつ方へか參候而歸候哉其境ハ聞へ兼申候

一相州御備場重士並大筒手之面々交代の時ニ付暫懸留之儀及達候

一駈込の四人外ニ四人都合八人此方様へ御預可被仰付旨夕八ッ半時分御沙汰ニ相成右之手續ハ六ノ印清田新兵衛書取之通ニ御座候御受取夜ニ入候而之途中甚無心元候付翌早朝御引渡の儀も致心配候へ共是非々々急ニ御引渡と申事ニ而致

方無之殊ニ於龍口脇坂様より御引渡と申儀も追而相分御近邊ニ付左迄懸念ゝ者及間敷と急速ニ御人數之手賦致し暮前より被差越候處右御引渡四人之内一人ハ相果殘三人御引渡ニ相成夜五ツ時頃無異儀龍口へ御引取相濟申候則黒澤忠三郎蓮田市五郎齋藤監物と申者ニて忠三郎は面ニ卷木綿有之是ハ格別深手ニハ相見不申跡二人は餘程の容體ニて不遠落命と相見申候

一御預人之儀諸事先年大鹽平八郎一件ニ付て御預之節の通と御指圖有之候付此節ハ御稽古場ニ被差置候方可然と相決書夜ニ不限出來之儀及達警衛初且御近火之節立退之手賦共夫々及達候事ニ御坐候

一種々不穩取沙汰いたし夜中萬々一不慮之儀差起候茂難計候付他御屋敷の御人數も龍口へ呼寄鐵炮玉藥之儀も夫々致用意候

一御廣間向士席以上以下共御殿惣詰之儀及達申候

一御屋敷内火用心等之儀御成之節之通と及達候事ニ御座候

一相州重士並大筒手懸留之儀及達置候處江戸表へ呼登之儀猶又達ニ及候

一井伊様御家來手負死亡人等之儀七之印書付入御披見申候是ハ永田町山城守殿手醫師田村宗哲と申者糀町ニ居住いたし此節の療治被頼候由に而委敷致承知書付遣候様子ニ而黒木舞蔵より手ニ入申候

右之外得貴意度儀も有之候へ共一昨朝已來意外之混雜ニ而御役々一統書夜の差別無之何分ニも書綴出來兼申候何様於水戸家ハ目差所の井伊侯を打取遂本懐候付追而公義より之御取扱さへ御氣に協候ハ、各別之儀も有之間敷哉井伊侯之方ハ關老方よりも重疊御家之事を御示有之候儀ハ平之助書取ニも有之候通ニ而其末昨夕八之印御屆書之寫手ニ入何分難解書面ニハ有之候へ共先是ニ而平穩之儀も大概被下候付是又各別之事ハ有之間敷と咽合候事ニ御坐候此後の模様次第ニハ猶又屋敷早打飛脚を以可申入左様御聞置候様存候以上（本文中別紙一の書付とあるより八の印餘屆書寫に至る八通は惣て前に掲る所のものなり）

三月五日

惣連名殿

有吉市左衛門
溝口藏人

三月五日在府本藩老臣は藩主齊護の意を受け命を待たすして東行するを停止すべき旨を藩政府に通牒す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

以別紙申達候水戸様御家中拾七人於途中井伊掃部頭様を打取候儀者委細別封ニ申達候通候處右付而者昨今種々様々の巷說有之其内一二ヶ條得貴意申候先月十八日水戸御領内ニ而同御家中の面々三百人計相互大炮抔も相用及戰爭一人ニ而五六人討取候者も有之或は川ニ追込候も有之烈敷騷動爲有之山又者御城内之事と茂申候是等は少々者形有之と申人も有之左候而此節之拾七人右之騷動を避間道より致出府本懐を遂候抔と唱へ且又水戸より五六里も隔り居候筮間之城を水戸之御人數大炮を以取圍罷在右之城主ハ此節水戸御堅被仰蒙御方ニ而御手障ニ相成候故先つ近邊より御取拔の御打立なとゝも風聞いたし右の事柄實證ニ候ハ、柳原之御在所抔ハ至而間近候間如何様卒可申來處何之注進も無之由且一昨朝步御小姓三人外聞として水戸海道ニ差出内一人ハ少ニても聞取次第一刻も罷歸候様申聞置候得共今以其儀無之彼是好事家より申觸候事ニも可有之哉右躰の風評承脇々より如何様ニ仰山ニ申候哉も難測候付入御耳置申候將又其風聞ニ不限江戸表之儀何様不穩時節と申處より又々御國許人氣騷立一と御備位ハ被差登候方抔と申候埒ニも可相成哉此砌大勢之御人數俄ニ御取寄被置候而ハ極々御爲筋ニ不相成儀被爲在候間御下知不被爲在内ハ決而御人數被差登之御取扱ハ無之様萬々一屹といたし候注進も有之彌以御人數御取寄と申埒ニも至候ハ、只今ニも屆を猶又差立候歟或ハ早打御飛脚を以御下知可有之夫迄之間は愈以右之通御心得候様御沙汰被爲在候間左様御心得候様存候しかし騷々敷世の中ニ付當春交代之面々暫之間被掛留笘ニ有之候へハ相州ニ而御物頭以下重士大筒手迄ニ而大概八九拾人足輕を加候へハ

百壹貳拾人も有之江戸表ニ而士席以上七拾人計獨禮以下猶更多人數双方打混大凡三百人餘者地場よりも相增候積ニ御坐候右樣之境遠境隔り候而者兎角時情貫兼何ゟも甚以心配致候事ニ御坐候近來は猶更意外之事而已觸來於其御地も御驚愕之程察入候以上

三月五日

御家老
御中老宛

有吉市左衛門
溝口藏人

三月六日幕府は這般の事變に鑑み特に曲輪内諸藩邸の警戒を嚴にせしむ

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆記萬延元年九月）

大目付ニ

御曲輪内屋敷々々之儀者非常之手當格別ニ心懸居候事ニハ可有之候得共以來別而厚く相心得平常人數等手厚ニ用意致し置萬一異變等之節者早々繰出し候手筈可被申付置候

右之趣向々ニ可被達候

三月

三月六日本藩龍口邸の警固を嚴にす

〔安津免久佐〕（三月六日晩聞取書寫の一節）

一六日ハ何歟物騒敷有之御屋敷内嚴敷御手當西御門者通路留外忍板戸を立締被仰付御玄關前ハ大筒龍吐水抔持出有之候事

此儀ニ付而ハ御預人評定所往來之内井伊樣より取ニ參候抔との風聞且右御屋敷内不穩趣永田丁より御知らせニ付本行之通ニ候事

〔夷事輯錄〕

江戸來狀之内

龍ノ口御玄關前詰方并御備御道具左之通

一幕番所御物頭貳人　大筒手貳拾五人

但御飾付ハ鉄炮十挺弓十挺數鑓十本ハ平日之通

一車付大筒左右ニ五挺宛

一行軍筒左右ニ四十挺

一龍吐水左右ニ二十一

一ゑ〜子　五　挺

一御廣間ニ御備ヒストン三百丁計り玉藥共ニ

一小筒數十挺　御鑓等も御手入ニ相成候

一御間内詰方幕番所御門々々ニ增詰人被　仰付諸御人數具足着いたし不申迄只今軍有之とも支ニ不申樣ニ御座候以下略ス

〔撥反雜記〕（長瀨助十郎書留の一節）

一三方之御門嚴重相堅め諸方之御使者并步使其外諸出入ニ至迄相改東西之御門ゑハ御廣間御番方兩人步御小姓一人相詰

表御門ハ御使者等參申候得者御番方立會ニ而相改其上ゝて罷通申候御門内ゝハ百目筒二十挺相備打手者幕番所ゝ相詰居御用之外ハ御門留被仰付御門受持名前左之通

表御門御物頭曾我淺之助　外様組五十挺　差添大田黒岩太　十五挺大筒引廻し　奥田傳左衛門

重士二十人

津田太納　宇野孫太郎　中島次右衛門　加々見健次郎
小川彦作　加來三左衛門　永田武左衛門　高田永左衛門
吉本又三　齊藤平右衛門　阿南岩雄　澤村小平太
廣瀨牛之助　奥田權三郎　千原庄太郎　長瀨兵右衛門
宇田孫四郎　岩濱只雄　大浦恒三郎　寺本隼太

右者銘々槍をもつて表御門へ相働可申

歩御使番二十人

右は表御門へ得物々々をもつて相働可申

西御門御物頭瀨戸熊助　外様組三十挺　差添小野長四郎　大筒打手十五人引廻し　池部軍次

重士十五人

木原繁左衛門　山本五郎助　宮脇源兵衛　野入彦次郎
大島五郎八　大村伊右衛門　八木七郎助　堀口角助
田上素左衛門　到津十之助　澤村吉之允　本庄角之允
白杉新平　田中章之助　宇田鉄之助

歩御使番十一人右表同様相働

東御門御物頭魚住善次兵衛　外様足輕三十挺　差添兼坂熊四郎　大筒手十五人引廻し　平野專右衛門

重士十五人

柳瀨尉助　古賀杢兵衛　門川太兵衛　氏家榮喜
林兵助　小野呈左衛門　村島作左衛門　續毎
平野常四郎　吉岡甚之允　熊谷早之允　田中鍵之進
芦田祖之允（本ノマヽ）　上野堅吾　交野鎌吉

歩御使番歩御小姓十一人

右同様

三月六日我藩龍口邸の警衛として相州大津詰の砲手二隊江戸に向ふ

〔撥反雜記〕

一書曰別紙貳通昨日大津營ニ而入手ニ申候ニ付入貴覽申候實ニ〳〵不怪騷動ニ而上下鼎沸注進樵之齒を引かごとく此元より江戸邸警衛として昨朝未明より大早打ニ而一番手大筒手拾五人被差越貳番手拾五人ハ昨晩發途仕申候猶追々とハ僕共も被差越候由ニ御座候間其覺悟仕居申候大分色めき立勇敷世の中ニ相成申候當春交替相濟居候御物頭初御中小姓手大筒手より外様組まて惣而御留人ニ相成當年中ハ一人も罷下候儀ハ不被爲叶段昨夕御達ニ相來迷惑ふる事ニ御座候此末如何相成可申哉實ニ薄氷之勢ニ而御座候猶承次第早速得貴意可申候草々已上三月七日鴨居詰大埜鉄兵衛（別紙二通は今採錄せず）

三月六日夕幕府改めて水戸人士を越中守家來に預くとの令達を傳ふ

〔御預人一途〕

細川越中守に
水戸殿家來
大關和七郎
森五六郎
杉山彌一郎
森山繁之助
黒澤忠三郎
蓮田市五郎
齋藤監物

右吟味中其方家來に預置候間手當向等委細之儀は池田播磨守に可被承合候

三月

三月六日藩主齊護は水戸藩に對する彦根藩の復讐を慮り閣老内藤信睦に就きて預人返還のことを内願す

〔御預人一途〕

一三月六日御用番内藤紀伊守樣に御使者御留守居を以被差出候御内意之御書付左之通御手寄松平和泉守樣にハ溝口藏人御留守居同道參上御家老水野宗右衛門に而會右御内意之御書付寫差出委細演達いたし和泉守樣に申上至極御尤に被成御承知委細可被成御含旨宗右衛門を以被仰聞候

今度御預に相成候水戸殿家來七人者數茂井伊家不天之讎に而如何計遺恨に可有之右に付而者御内密御示被置候趣茂有之哉に相伺候得共在所合驛付候臣下追々とハ相集有命之有樣目之當致見分候而者片時茂難忍武家者相互之事に付公之私を以引渡呉候樣抔と延合來候茂難量夫者相斷候儀勿論と候處萬一大勢押寄强而致所望候場に茂至候ハヽ無是非是より茂夫に應候取扱致シ不申候而者難相成忽兩家之確執と罷成候者必然之譯に御坐候且又第一之心遣者評定所往來之途中に而自然之節者讐衛之者共必死に相防候者素之儀に候得共聊に而茂御預人に申分致出來候而者猶更武家之面目難相立公義に奉對候而茂重疊奉恐入候間直樣井伊家を相手にいたし屹と相當之處分を遂候より外無之彼是當時之儘に而者兩家之禍を釀候而已に無之事に寄候而者天下之動亂に茂相關り如何樣成筋に成行候茂難計甚以致案勞候依之此節之御預人者乍恐差上申度候間於公邊如何樣卒御手當に相成候樣有御座度此段無據御内意奉願候以上

三月六日　細川越中守

三月六日水戸藩兵を江戸に向はしむ

〔撥反雜記〕

一書曰今度常州笠間表聞繕として被差越候に付則取書左之通

一笠間御城下へ鉄炮を以及亂妨候哉之風評有之候儀去月十八日水戸領長岡宿と申處より徒黨之人數相集追々亂妨之儀有之候間退散可仕樣御下知有之候へ共其儀相用不申候に付打拂として御人數被差出御城下錫下町と申所に而大に騷動仕候由に御座候依之笠間御城下へも鉄炮抔打懸申ゟる風聞仕候者と相考申候

一水戸樣御目付役之由加藤慶助と申人惣引廻に而一昨六日水戸表出立人數上下凡貳百人余今日小石川御屋敷へ着仕申候猶又引續き五百人計富田三保之助と申人引廻候而罷登り可申由に御座候將又彼地御固之儀ハ笠間樣別段御人數等ハ不被差出兼而持口之御番所へ增人數に而相詰居申候士浦樣も御同樣笠間樣御領内吉田村と申所に御人數三十人計固居申候右之外見聞之儀無御座候以上

三月八日

三月七日將軍使を井伊邸に遣し直弼の病を慰諭し物を與ふ

〔魚住文書尊攘雜錄〕

三月七日

上使　酒井右京亮　藥師寺筑前守

鮮鯛　壹折　井伊掃部頭に

氷砂糖　壹壺

右病氣爲御尋被下候之ヶ格別之譯柄殊ニ當時御役をも國家之御爲ニ（マヽ）も難換儀厚相心得

三月七日幕府は水戸人士返還に關する本藩主の具申に對し諭達を與ふ

〔御預人一途・尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

細川越中守に

御預人の儀ニ付深く心勞被致候段被申聞候趣尤之次第ニ者候得共井伊家之儀者格別之家柄ニ茂有之家來末々迄動搖不致樣精々厚く被仰付置候間其旨被相心得此節柄公邊格別御事多之儀ニ候間分而被勵忠勤候儀と被心得厚く勘辨致し可被取計候尤萬一之儀も有之候ハヽ公邊より早速其筋役々出張可致且又評定所ニ差出候途中警固之儀茂少人數ニ者可有之候得共其筋役々をも爲附添候樣可致候間可被得其意候事

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

（水戸藩）市左衛門殿御自筆三月七日江戸立上々早打御飛脚四月十九日着

以別紙申達候今度御預ニ相成候水戸樣御家來孰も井伊家不天之讎ニ而いかゝ重役より申聞候而も眼前ニ存命之有樣致見聞候而之片時も共儘難差置と一途ニ存込如何樣成及所業候茂難計右之面々御引受ニ相成居候於　此方樣者重疊懸念之至ニ付御願人ハ不殘御差上之方可然と咽合昨夕御用番內藤紀伊守樣ニ別紙寫之通御願書被遊御差出今書御留守居兩人　御城ニ罷出御模樣相窺候處つまらぬ御差圖有之候付猶精々申談工而も附居候事ニ御座候此段入御耳置申候以上

三月七日　有吉市右衛門　溝口藏人

御家老中　御中老宛

三月七日幕府水戸藩に對し江戸藩邸取締の爲め人數召致の願を許す

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

一三月七日內藤紀伊守殿御宅へ家來呼出ニ而御達　松平肥後守　久世大和守　土居采女正　土居大炊頭　牧野越中守　戸田綏之助

水戸殿屋敷取締等之爲在所表ゟ人數被呼寄度旨再應被仰立候ニ付別紙寫壹通相達候間見置可申候尤人數高等被差出候ハヽ、猶可相達候事

水戸殿ゟ被仰立候書面寫

在所表ゟ役々被呼寄候儀ゝ難相成當地之者を以操合セ取締候樣可致萬一此上呼寄度儀も候ハヽ、其節度々伺之上取計候樣御書付を以御差圖之趣水戸殿被致承知昨夕及御達候通何分當地住居之者人少ニ而間ニ合不申屋敷々々之取締方も不行屆御府內手廣之場所類賊共探索等も手廻り兼殊之外被致心配家老共をゐてハ甚恐入候次第萬一此上不測異變出來候樣ニ而ハ不相濟尤此度役々爲差登候迚も取締行屆候樣ニも難行屆事ニゝ可有之候得共可及丈之儀ハ盡心力成丈ケ此上公邊御苦難不相成樣取締方之儀深被存入役々爲登之儀申遣候事ニ而不日着ニも可相成中納言殿被致心配候場合幾重ニも御賢察之上今般之處ハ御聞請相成候樣被致度此後之儀ゝ其時々伺之上御差圖次第爲取計申候間是等之趣御汲取之上宜御沙汰被成下候樣致度此段猶又申上候樣被申付候　中三月

右御挨拶

再應被仰立之趣無御據筋ニ相聞候間可成丈ケ人數少被呼寄候儀ゝ不苦候得共先達而被仰立之次第も有之候ニ付而ゝ御領分之者共無故御府內並他領迄も罷出候者公邊ニ而召捕候積夫々手配被仰付置候事ニ付屆無之內罷出候樣ニ而ゝ行違之儀出來可致も難計ニ付御人數高姓名出立日限等前以被仰立御聞濟之上被呼寄候樣可被成附而ゝ被仰立候者之外ゝ一切出府不致樣急度御申付可被成旨可申上候事

三月七日藩主齊護は時局に鑑みる所あり在府重臣に命じ一隊の精兵を東行せしむべき旨を藩政府に急報せしむ

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

本朱書

三月七日江戸立上々早打之御飛脚四月十九日着御備組一手御呼登之事

今七日上々早打之御飛脚差立得貴意申候水戸之御家來申談掃部頭樣を及殺害候一件之儀付而ゝ一昨五日三日半切之雇飛脚差立委細申達候通候處水府之御人數等間之誠を取圍候抔ゝ之風評ゝ全々虛說水府ニ事有之候儀ハ相違無之ゝ相聞今度外聞ニ差出候をの罷歸差出候書付寫二通入御披見申候此節之大變ニ付而御人數登方之儀　御沙汰之趣一昨日申達置候通候處其後御双方之勤勢種々探索承合申候處勿論取留メ候儀ニゝ無之候得共　公邊ゟ井伊家ニ御知行ゝ無相違御取續之筈ゝ付一統決而騷立不申樣ゝ之御沙汰者畏り居候而彦根ニゝ御舍弟被爲居候を御供いたし御家中不殘出府いたし候樣申聞ニ相成候とも相聞又　公邊ゟ水府ニ御人數被差出被下候樣願ニ相成居其御人數出候上引續井伊家之人數を操出之積之由抔ゝも相聞大炮之臺或武具杯段々御屋敷ニ持込候樣子ニ茂相聞申候勿論此後大變ニ相成候樣　公邊之御取扱ゝ有之間敷候得共不穩時節ニ付　上ニ茂殊外被遊　御配慮當春交代之面々未々迄惣而懸留之手都合ニハ仕置候得共御手當請持之御備組片手夫々不足之內劍槍之藝ニ達シ候而壯健成をの五十人程被差登度左候得者何事ゝ申時分ゝ一稜御用ニ相立可申段被遊　御沙汰候付段々咽合候處此節之一件御國許ニ相知候ハヽ、一統騷立且ハ御席中茂嘸々御懸念第一壯健之無足御撰方穩ニゝ相濟申間敷些大遣ニハ可有之候得共一向ニ御備組一手被差登候ハヽ、御安心ニも相成壯健之無足も餘計ニ付參り可申御出方ニゝ係り候得共ケ樣之時節御用心之御爲ニ付有之通被指登候ハヽ、　雲上を初　上々樣ニ茂可被遊御安心ゝ申談有之趣奉伺候處左樣ニ有之候ヘハ大ニ被遊　御安心共通申遣候樣　御沙汰被遊尤一同罷登候而ゝ仰山ニ有之候間十切內外都合能御見計被差立候樣尤內實ハ此元御警衛ニ候得共表分ゝ當時異船頻々渡來ニ付相州詰として被指越先御陣屋ニ着江戸表御模樣次第御取寄可被仰付此砌之事ニ付道中筋別而穩ニ罷登候樣ゝの儀も　御沙汰被爲在候間左樣御承知御手當請持之御備組一手働人數迄用意濟次第相州詰として被差越旨被及御達候樣存候尤被指登候人數且一躰之振合ゝ別紙積書を以申達候右ゝ急速出立ゝ申御趣意ニゝ無之仕廻方等も有之且ハ御備組を被召呼

候事ニ付以御飛脚申達候事御座候以上

三月七日

有吉市左衛門
溝口藏人

御家老中
御中老宛

〔仝書〕

一御備頭　一御番頭　一無役着座　一御鉄炮頭組共　一御物奉行
一大組附　一御物頭列　一御番方組脇　一御番方　一炮術師役並差添大筒打人共

右之通此節御呼登被仰付候

上ニ付札

本文大筒手之儀江戸表自然之節ゑ相州ゟ御呼寄ニ相成候得ハ懸留之人數ともニハ百八拾人計有之候付御國許ゟ御差登ニゑ及間敷と申上候得共餘分之節ハ重士並歩之處ニも可被召仕候間矢張御呼登ニ可相成旨被仰出候事

三月七日我藩監守の水戸人士を評定所に出頭せしむ

〔御預人一件〕

一三月七日大關列前條評定所ニ御呼出ニ付御留守居御物頭召連罷出候事

但御預人之内齊藤監物も御呼出之處數ヶ所之深手癒口ゑ不相變候得共食氣乏次第ニ氣力虛脱煩渇悶亂之症ニ有之氣遺敷寄躰之旨手習師申出召連難罷出段前ゟ御城使より兩町御奉行所ニ御屆仕今朝も同篤之寄躰ニ付召連不罷出段評定所ニ御城使より御屆仕候

三月七日水戸藩士富田三保之助等約一百人出府の途土浦を通過す

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕（内藤紀伊守へ廻の由）

水戸中納言樣御屋敷御取締等之爲御在所表ゟ御人數被呼寄之儀被仰立候ニ付去ル七日御達之趣且兼而御達之儀も御座候ニ付采女正樣御在所土浦表御城下高津口眞鍋口兩番所へ爲取締御家來之者被差置候處去ル七日御同所樣御家來富田三保之助加藤啓助宮田雄助重立數十人至而平穩ニ而通行仕惣人數百人程ニも有之哉全常休之旅行ニ而江戸へ出府之段申聞候旨御在所表ゟ申越候未御達以前ニ御座候得共多人數旅行之儀ニ付此段御屆申上候以上

土屋采女正樣御家來
尾木汀

三月十日

別紙

御側御用人　富田三保之助
御目付　加藤啓助
宮田雄助

三月八日幕府我藩監守の水戸人士を松平稠松外四家に分預せしむ

〔御預人一途、尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

細川越中守ニ
水戸殿家來
大關和七郎

右者去ル三日不取敢其方家來に預置候處吟味中大關和七郎黒澤忠三郎者松平稠松家來に蓮田市五郎者本多主膳正家來に森五六郎者稲葉伊豫守家來に杉山彌一郎者堀丹波守家來に森山繁之助者田村磬二郎家來に預置候間引渡方等之儀者松平伯耆守久貝因幡守池田播磨守山口丹波守駒井山城守に承合候樣可被致候

三月（八日）

森　五六郎
杉山彌一郎
森山繁之助
黒澤忠三郎
蓮田市五郎

別紙相達候御預人引渡方之儀直樣引渡候儀ニ者無之候間支度次第可成丈手廻し致し請取候積可心得旨松平稠松本多主膳正稲葉伊豫守堀丹波守守田村磬二郎家來に相達候事

右之通相達候間爲心得相達候事

（松平稠松外四名の領地石高等に就きては三月九日大關等引渡の條を參照せよ）

三月八日幕府井伊氏の家臣を慰撫し堅忍下知を待たしむ

〔御預人一件風説聞書等〕

井伊家に

此度不慮之次第家來末々迄如何計殘念ニ可存と無此上御心勞被遊及亂妨候者共御大法有之急度被及御詮議ニ候事ニ候條萬一家來共騒立候樣之儀有之候而ハ天下之動亂ニも可及共方家之儀ハ格別之譯柄殊ニ當時御役を茂相勤格別之精忠を盡し御爲不一通相心得候儀ハ兼々御力ニも憶召（マヽ）候程之儀ニ付家來共ニ至迄心得違之者ハ有之間敷候得共萬一麁忽之族有之候而ハ家柄と申實以不相濟候事ニ候間國家之御爲ニハ難換儀厚ク相心得家來之末々ニ至迄難忍を相忍ひ動搖不致候樣幾重ニも取鎮度御下知相待候樣被仰出之

三月八日

右之通候事

三月八日本藩の預人齋藤監物死す

〔魚住文書〕

一八日　朝五ツ半比齋藤監物死夜ニ入撿使（御徒目付等）等來死骸受取

〔御預人一途〕

御預人之内藤監物儀數ヶ所之深手ニ付手醫師共に申付療養仕候得共次第ニ差重養生相叶不申今晝果申候尤右之段町御奉行池田播磨守樣に申上死骸取扱之儀茂御同人樣に相伺申事御坐候此段申上候樣越中守申付候以上

細川越中守家來
吉田平之助

三月八日

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

齋藤監物

推倒一世之智勇

右之齋藤監物ハ痛手ニ惱み初よ丁音聲もゝて兼候程之容體ニ候處或夜手眞似を以筆墨を乞切延之一枚紙ニ推倒の二字を書打倒れ後また起き直りて末之五文字を書つゝけ遂ニ終りし也

〔撥反雜記〕（久野勘太郎聞取書）

一齊藤監物深手ゝて其砌より言語等も不分明程之事ゝ而日々と弱り七日ゝ至りてハ水も通り兼候程の事ニ而御醫師より
も今夜中之見込無之との申分のよし成程其通ニ而七日夜ゝハ倒伏最早落命歟と見受居候處ムクト起上り御覗紙を乞候
間直ゝ遣し候處詩一首（一首の内に二三字不分明）書留猶筆を持暫勘考之躰ニ相見候内又倒伏此節ハ落命と存居候處明日ハ不殘評定
所へ御呼出之由通達之聲ニ而又起上り音聲も至而幽ゝて評定所ノ〳〵とか申而又倒ゝ其後無程尚起上り水を乞一杯快
く呑て靜ゝ落命之由其勇氣精神之丈夫等衆人感歎のよし

〔御預人一途〕

昨日御屆申上候御預人齊藤監物死骸取扱方之儀町奉行池田播磨守様ニ相伺候處昨夕御組與力同心並御徒目付御小人目
付等被差越死骸見分相濟猶又同夜請取人同心被差越候付死骸相渡申候此段申上候樣越中守申付候以上

細川越中守家來　吉田平之助

三月九日

三月九日幕府は竹橋外三門の通行を禁止する旨を布達す

〔御同席觸寫大目付様御廻狀寫控〕（安政五年筆起萬延元年九月迄）

大目付ニ　竹橋御門　清水御門　田安御門

右御門々々以來御役人之外明後十一日より通行不相成候事

牛藏御門

三月

三月九日我藩は大關和七郎外六名を松平稲松外四家に引渡を了す

〔撥反雜記〕（大神氏來狀の一節）

一水浪士歌ふヽ有之候得共九日御預替之日ゝ至り人々筆紙を持懸何ふりとかきくれ候樣申候間少々認申候（中略）又四五日も
居申候ハヽ面白き話も可有之ゝ殘念之事ゝ候（櫛列曰こゝに森か歌運田の哥からうたあれどほやく初卷に擧たるに同じけれハ錄さず猶奇談新聞も有之候ハヽ可申上候）
以上閏三月十五日

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

龍口藩邸御預中御園ゝて左之通を通すヽ

なむのそのおもひは消し春の雪　大關和七郎

きみのため打てくたくる玉鉾のうけて見よかしやまとたましひ　森五六郎

はるはるとこゝろ越路のけふこそはおもひもはれてむすふ夢かな　黑澤忠三郎

ひとすしに思ひも晴し今朝の雪　杉山彌一郎

君のためおもひのこさぬものゝふのなき人かすに入るぞ嬉しき　　森山繁之助

世捨頻波回世運　一朝斬破奸臣頭　微軀綻爲塵粉滅　凛々英名千載流

おもふ事ありて

ふりつもるおもひの雪のはれていまあふくもうれし春の夜の月

歳酒乗数慈母愁　花枝風興樂無窮　三更参覲鷲起坐　不在家庭在他郷　風イ

右　　蓮田市五郎

〔撥反雑記〕（長嶋政十郎書留の一節）

一此節御預人居申候間諸事御取扱宜敷警衛等も念を入評定所へ召出之時分も警衛人数百五十人計ニ而一人々々ニ御物頭一人嗣士一人御添歩御使番歩御小姓も相添四人ハ麻上下被渡下其外日々之食事且看病疵療治方迄無残所事ニ而不軽難有がゞ共上引渡之日ゑ　若殿様より思召ニ而御酒頂戴御座候間各落涙仕ゞ様之明君之御恵生々世々難忘ゞ様之身ニ御座候得者御恩を乗報儀も難成只々難有ゞ而已申候而別泣ニ成申候得者私共迄も　君之恵之行末頼母敷共ニ落涙仕候

〔人主書〕（長野勘太郎聞取書）

一九日ニ御預人七人共ニ（内豊後ハ遂命ニ付公儀ゑ受取ス藩ハ丁ニ）左の御方々様（御預替之由ニ而夜ニ入四時比迄ニ御向々より御受取ニ相成候由

御国元中富山十萬石　江戸屋敷下谷池の端　松平備松様ゑ　二人

同　江州膳所六万石　同　南八丁堀　本多主殿正様ゑ　一人

同　豊後日田代官方六千石　同　櫻田新橋外　靖国新番守様ゑ　一人

同　遠州社松三萬石　同　下谷練小路　同断社松守様ゑ　一人

同　奥州一関三万石　同　愛宕下田村小路　田村右京大夫様ゑ　一人

一御屋敷表門之節ハ表玄関之前各屋敷迄之御高塀死花迄も無忘れ不申と落涙深御礼申上候由

一右之通脇方様ハ御預替之儀ハ　此方様より御内々御願被為在候ともゝ又ハ幕閣ニ御警衛のため御国より御加組御百姓之御屋敷之儀とも又ハ井伊家より大勢押懸押不靈ニ乱妨ニ及候儀も難計萬一左様之儀も有之候節ハ大筒小筒等御打放之時ゝ至候儀も可有之左様之節ハ御近所御屋敷々々ゑ矢先危く候而之等之次第ハ愛而公儀より御沙汰ゝ相成居候様ゝと

の御願ニより微ゝ公儀より脇々様へ御預替之由風説〕但し水行御預時等之儀ハ公儀ゝても不安為御儀職と被候間右評

判筋之事ニ而ゑ様ニ相成候儀有之候歟絶度乗り候儀ニハ無之其段ハ申譯いたし置候由

〔街談紀聞〕

一同九日之夕松平親松様御初前御五方ゝゞ籠口御屋しきゝ御人数被差向候得河岸御門内ニて引渡相済夜六時過各引取

候事

〔夷事稿録〕

江戸来狀之内

九日六人之者共諸家様ゝ御預ニ相成候故夕刻別段之御料理且御酒をも被下候由今日之暇乞之事故歩御小姓抔よりも酒

み進候處何レも難有頂戴致間ニ之大醉仕候者も御座候由未々御預人に右之次第御申渡無之以前被者共定而傳馬町ゝ参

り可申と歩御小姓ゝ申候由右之心内之暇乞大勢有り〳〵参り殊ニ浦賀詰抔も参候事ニて右之覚悟何ゝも仕り候と相見

申候迄而右之次第受持之御物頭より申聞候處何ゝも不怪落涙致當時迄　御手厚御取扱之事難有其上警衛之面々にも同

落同様ニ心安存居候處今日迄之御別申々難忍迄落涙致候故警衛之面々并歩御小姓迄難別み惜涙ゝゝら暇乞等も致し何

そ殘し置候得と何ゝも望候處初ハ相新候得共後ハ醉ニ乗し詩歌發句抔仕申候森山ハ別て大醉右直筆ハ私所持仕居申候

右の哥み書ゝ候而直ニ醉倒ゝ申候由迄而諸家方へ御預之事申聞上下抔着用之時分ハ一向醉居候様ニハ相見不申候別て

大隅杉山黑澤抔人品宜敷相見申候

大浦常（郎常三）紙面

細川越中守家來
吉田平之助

〔御預人一件〕

御用番内藤紀伊守殿へ御屆

越中守家來ニ御預置ニ相成候水戸様御家來六人町御奉行池田播磨守様ニ今日引渡相濟申候此段申上候様申付候以上

三月九日

三月九日在府本藩老臣は藩政府に對し水戸藩士管守の任を解かれ特に增兵の要なきを以て精兵東行の議を廢すべき旨を開陳し且つ藩主の親書を附して更に急使を發す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

以別紙申達候御國許より一御備御呼登且御預人御差上御願之儀ニ付而は委細早打御飛脚を以申達置候通ニ而去ル三日右之御願書被差出候後松平和泉守様ハ御兩敬之御間柄ニ茂有之候間別段御内意被仰入候方可然と藏人ニ右御使者被仰付同夜五時分より罷出委細御家老水野宗右衛門ニ申遂候處和泉守様被成御承知至極御尤千萬しかし不容易事柄ニ付御即答ハ難被成旣と御含被置明日御登城之上御咄合可被成との御返答承罷歸其翌日ハ早朝より評定所ニ御預人御呼出ニ付其後御留被置被下候様御内意之儀御留守居ニ申含清田新兵衛吉田平之助兩人御城ニ差出置候處重疊御評議有之候儀と被考夕刻ニ至御願之筋御許容無之趣他筆御用狀之通御差圖有之候間兩人よりも精々申遂候末不天之歎ニ候へハ萬一井伊家より大勢押寄理不盡之及仕方候ハヽ天下之動亂引起候ハ午心付も是非相當之所分を遂不申候而者武家の面目難相立左様之節者如何可有之哉と皆葉を詰候處夫者可致様無之との御事ニ付其儘引取候處上ニ茂不一方被遊御宮悉候付

薄々咄合昨八日早朝より藏人氣御留守居同道猶又和泉守様ニ差出前文同人ニ申遂候者御預人之儀ニ付昨夕御差圖御書取之趣并留守居ニ御演述之次第等不案意午も内役之面々ハ大概敬承仕候躰ニ御座候得共表方旗本之人數ニ至候而者邊土生立之習俗雜動頭立候者も同様ニ而申々即入不申大炮小炮玉槽共一齊ニ相整へ必多物仰山ニ相成候付御丸内之事ニ茂候間屹と心持いたし候様相示候處御願立之趣御許容無之儀者深き御趣意も可被爲在午去萬一理不盡ニ押懸來候ハヽたとへ天下の動亂ニ陽り候而も致方無之との御演述相伺候上者御所柄ニ而も聊頓着ニ不及願日御近邊の御方々様ニ者自然之節發炮をも可致との儀早々御案内之御使者ニ而茂被遣置度抔と申張候且又御城ニて兩人ニ御教諭之趣を以根元井伊様ニ者御當家格別御忠節之御家筋ニ付決而麁忽之儀者有之間敷若又押懸來候ても彼是取扱候内ニハ公義より御人數も可被差出と申聞候處水戸様ニハ御親族之上御後見之御家筋ニ而さへ如此節事有之且又櫻田異變之時分も公義の御人數ハ申ニ不及彼御屋敷より幾の間駈付候間合も無之右様之儀頼ニ難相成次第ハ眼前ニ其證跡有之候抔と申候而何分表方之人氣押へ出來兼候間止を不得御國許より一御備之御人數呼登之儀昨夜半早打飛脚を以申遣候事ニ御座候遠境相隔居候而者兎角事情貫兼右之飛脚着之上御國許之懸勤如何可有之哉武忽之者共人氣ニ茂係り候様成行候而者重疊被成御懸念候付最前御内意御願書も御差出ニ相成候得共相叶不申被成方無之しかし御間柄之儀ニも候間此上如何様卒御配慮被下候様との趣を以申達候處御取次ハ申ニ不及和泉守様ニ茂不怪御驚愕被成候由ニ而多者如何様と歟御差圖可有之との御返答有之宗右衛門公用人南八右衛門御國士氣各別の儀度々感心いたし万々一之時節ハ御賴母敷と申候引取居候處昨暮過ニいたり御預人不殘他ニ御預替之儀他筆御用狀之通被仰出孰茂大ニ安心第一上に茂殊之外被遊御安堵候右之通ニ候へハ外々之御并様方も御同様に而別段御手當ニ者及申間敷共上水戸家井伊家の模様も外聞書付等之通ニ付旁御人數被差登候ニハ不及方と咄合別紙書取を以奉窺候處上に茂御同様ニ被思召上旨ニ而被遊御下候付右之趣爲可申達猶又上々早打之御飛脚差立候事ニ御座候右付而者此節御直書を茂被成下且明日早打之御使者中根平八郎を茂被差立筈ニ御座候去ル三日以來ハ一統書夜の混雜無申計今晩御預人御引渡ニ相成明日ニ茂至り候ハヽ大風の取ゑ候様ニ相成可申

扨々稀代之世の中ニ而御座候委細者平八郎者之上御聞候様存候以上

三月九日

有吉市左衛門
溝口藏人

御家老中
御中老宛

〔仝書〕

御趣意書取

今度之御預人御差上之一條者萬一之儀有之此方様方天下動亂之端を御引起ニ相成候様ニも成行候而ハ難相濟と申御趣意押立之御願ニ候處其儀不被爲叶候付止を不被得御國許方一御備之御人數御呼登儀早打之飛脚を以被仰遣此末如何成行可申哉甚以被遊　御懸念御譯ニ而猶又和泉守様に御問柄旁々頼談被仰進ノ處より右之御趣意相立御預替之儀昨夕御沙汰之通ニ付不取敢吉田平之助儀和泉守様に罷出御挨拶申述候處御人數被召呼之儀之如何様共御差圖難被成思召次第之事ニ候へとも必竟一統之動搖引起候様ニ茂有之候而之大切至極之儀ニ付御預替之御沙汰ニ茂相成候間屹ト其御心持之被爲在度是非とも御人數被召呼候ハヽ獨道筋江戸表とも人氣ニ係リ不申様平穩之御取扱ニ相成候様吳々御含之有之候由御座候依之重疊咽合候者及狼藉候水戸之家來不殘　此方様方御引受實ニ井伊家惧之府と申もの二而片時茂油斷難相成騷立候得共右之者共御預替ニ相成候上ハ江戸表一統之諸侯方御同様ニ而更ニ案勞之筋之無之乍然水戸家井伊家之確執之申迄も無御座萬一兩家の間より動亂を引起候共難計其方を段々探索仕候處別紙外聞帳而之通ニ候へハ水戸ハ一躰之御紀綱茂立不申兩黨我儘之振廻誠ニ言語同斷其内天狗黨之方衰微と相見一國同志之せり合ニ而不遠自滅ニ之相違有之間敷井伊家之方茂是又別紙之通ニ候へハ　公義方も重疊ニ御手を被盡於彼方も御趣意之屹ト畏り居候と考候付先ヲ平穩ニて有之自然御府内ニ申分致出來候ハヽ直様相州御人數被召寄候而可然此人數都合四百人計りニも及可申旁此節迚も御人數御呼登之儀之御不用ニ被　仰付候而之何程ニ可有御座哉尤御國許人氣騷立候様ニ至ル候而之中々制し出來兼候次第等追々御内意ニも相成居候事ニ付先ヲ早打飛脚差立御人數差留之儀　御自書を以御國許に被　仰下委細之御使ニ而御下知可有之との趣を以引續御使番壹人是又早打ニ而被差下夫ニ而茂押而罷登候ハヽ又々大坂迄御使被遣同所方引返候様二重ニ茂三重ニも御手當之御取扱ニ相成右之趣和泉守様に茂御内意被　仰入置候ハヽ初發方之御趣意も相貫内外共御都合可宜哉何程ニ可有御座哉

〔仝書、神庫文書密書四百卅九印〕

急度申入候今度井伊家不慮之儀言語同斷之事候就而は御預人被仰付此節者別而不容易儀ニ付段々無據内意申立候末處々に御預替之達有之先者安心之次第候最前之儀ニ而者自然天下之動亂とも相成可申哉彼是人少ニ而者難相濟候付急度備手差登候様及沙汰置候處此節御預替ニ相成於公邊ハ一統重疊穩ニ相濟候様各別厚御趣意茂有之に付俄ニ人數抔呼寄候様ニ而者御趣意ニ戻可申との儀松平和泉守より内々心入之筋有之其上逐日人氣も鎮候哉ニ付人數差越之儀ハ急度見合候様可取計候委細者藏人市左衛門より可申入候也

三月九日

越中
家老中
中老中

中根平八郎に御渡ス相成候御書取也

御預人引讓相濟候付而者當屋敷平常ニ復し水戸表並井伊家之模様ニおゐても格別異ナル唱不相聞候付備人數差登ニ不及旨早打を以申遣たる事ニ候處萬一他之風聞等ニ係大勢罷登候様ニも有之候而者獨道筋且者江戸表之人氣ニも懸折角御預替之御趣意ニ背候間態ト其方を差立候條家老共より精々相示候様屹ト可申達猶藏人市左衛門より可申聞候

三月九日在府本藩士大浦恒三郎櫻田事變當時の我藩邸の狀況を家鄉に報す

〔夷事輯錄〕

私儀ハ四日曉山本方より紙面參り明早朝龍ノ口に同道可致との事故殘りめし二水を懸ケ給候而明六前二山本方へ誘候處未タ寢居られ候故私儀ハ直ニ先ニ參り申候龍ノロニ而ハ御小姓頭ゟ御小姓組ニ勤向承り相勤候樣との事故任其意根役に咽合候處東西御門之堅メ御廣間御番且又此節御預りもの七人兩間ニ被差置候故右兩所之警衛等勤申候初而かた衣を宮脇ゟ借受着用仕申候衣裳ニハ困り候得共此節ニて如何樣の品たり共差支無之との事故母樣の御遺物之唐木綿ニ綿を入置候故此節之便利ニ成申候被召仕合ニ奉存候黙休殿中之混雜非ニ盡かたく萬端御推察可被成下候五日ニ之　公儀ゟ御目附御小人目附與力同心七人手疵改メニ見へ申候七人之者に之御取扱誠ニ難有事而已彼者共之心中を押計り難有さニ涙ゟ出申候三日即日ゟ羽二重ニ而錦入三ッ袴帶下帶肌着共外手拭煙草入等迄被爲拜領御支度等も被入御念候樣ニ見及申候右之外療治步御小姓より仕り此計ニ而も如何計り之御物入歟知レ不申候（或紙面ニ此步小姓金創致候を餌預人不審致尋候ニ付平日稽古仕せ候樣以前ゟ之餌格之段答候段は不怪感心致しケ樣之事ハ諸侯何も斯是有度事とて繰り返し感心致候由）五日新規ニ御園出來致候間何ゟも直り申候同所之模樣壹人ニ三枚敷壹人々々間變り嚴重ニ相見申候此所ニハ御小姓組ゟ貳人宛御駕役兩人步御小姓兩三人共外手傳數人御昇杯數人代り之交代仕書夜相詰申候今日壹五人評定所に御呼出しニ付何ゟも上下を被下着用ニて駕ゟ參り申候一人ニ木使副使名前別紙ニ奉申上候通ニ御座候共外大勢同夜貳人深手ニて參り不申候六日ゟハ私共儀ハ御門も相止ミ七人之者も引移候後ハ受持立候事故頓斗際ニ成候得共始末御殿ニゟ相詰候樣との事ニ而唯今通り書夜相詰居申候夜具並ニ御支度ゟ拜領ニ相成難有然し大混雜故最初ゟ御支度も時々ハ間ニ合兼候位ニて渡邊一大ニ世話ニ相成岩崎庄手厚世話ニて上の堅同樣私にも大方辨當遣し申候私ゟも朝飯杯ハ參り給申候事も有之候私儀ゟ頓斗天下浪人ニて自然之時之御手當故先今日之處ハ大ニ氣安大勢打寄之事なら何之心配も無御座御屋之面々ハ段々心配も多く見受申候私にも小堀治ゟ內意も申候得共私身分ニてハ迚も表御使者等ゟ出來不申右之譯ゟ衣裳之事申聞候處同意之由ニ御座候然し此節拵之事故私丈ニて相勤候樣之事ハ如何樣ニも被召仕候樣申達置候處共後定府共段々御屋被仰付候得共私儀ゟ內意故歟改而被仰付共今以無御座然し今日何之勤もなく軍御手當ニ御殿ニ寢ても立てもかつて次第ゟて不時之變も御座候節迄ハ自由仕居候樣根役杯もゟ參出來不申警衛ゟ以前同樣御物頭御小姓組都合十二人何レも馬上ニて參り申候

一浦賀ゟ交代之人數御呼登ニ相成今七日品川ゟ着仕候右ゟ鐵炮手財津門人平野支配ニて半手着仕候處不慮之事差起り言語同斷右之譯ハ平野引廻し曉ゟ品川出立本通り銀座邊參り候時分ハ未タ夜明前之由然處井芹尉之助と申者壹人少し跡ニ下り參り候處を何者歟相手不相知殺申候平野心配推察仕候上田ゟ今日ゟ浦賀出立之由故此節之心配は無之段御序ニ武藤殿に御申可被下候私考候ニゟ甚タ不審之事ニ存候今參り之熊本人に遺恨之者可有之譯も無御座定而落人杯の所爲歟萬一ハ井伊家の人數と見違ひ爲申者ニてハ無之哉（跡達而相分同人數之內何某自殺致し居此者取爲ニ無之由）乍恐井伊樣トハ不怪　御相口之樣成御評判も先年ゟ御座候故重疊煩敷此上如何之大變も難計何卒無事を祈申候此節之儀ハ太守樣ニも御苦惱ニ被思召候由重疊御尤之御儀不穩世の中ニ相成申候既ニ昨夕も大筒手急速之御調被仰付共外弓鎗鉄炮之諸道具迄も御調ニ相成り居申候明日明後日迄ニゟ彦根並常州之事も委敷相知レ可申模樣分次第猶可申上候

一長岡ニ而混雜之內ニハ薩州人も壹人居候由外櫻田太變先日申上置候と相違分ハ駈込四人御玄關ニて之挨拶ハ虛言土足ニて直ニ御廣間ニ上り水を乞申候由次第ニ譯もよふ〳〵息きれ申出候との事ニ御座候共後之御取扱誠ニ四十七人之小形大關と申者ハ人品宜敷何ゟも行儀等もよく相見申候色々申上度事多御座候得共中々混雜ニて認メ方出來不申候猶本飛脚立之節委敷可奉申上候

三度目之早飛脚

一六日迄之所ハ兩度之早ニ申上置候通ニ御座候七日ニ承り候ニゟ井伊御前樣大變後自殺ニ相成候故共時分御供之面々不

殘切腹仕候由外ニ御家來廿人余も御家出奔仕候段長田丁ゟ御知せニ相成申候跡ニ而承り候得ゝ是又浮説ニ而候事六日ニハ御預人六人評定所に被召出候處歸り前如何之御模樣か神谷方御小姓頭なり私に至急ニ固メニ參り候樣申付候故刀おつとり走り出候處跡ト三人か參り申候故都合四人連評定所にかけ付居候處跡ゟ大勢參り六人之御預人警衛いたし無事ニ罷歸申候一且ハ余程本氣ニ相成申候七人之内壹人ハ死申候樣人數十七人之名前ハ二度目之早ニ申上置候外ニ薩人壹人井伊樣打留候付加り居申候名前者頓斗忘ゟ申候有村次左衛門事なり追記

右神谷ゟ至急ニ固メニ參り候樣差圖ニ相成候譯ハ御城使依田類右衛門御城ニ而井伊家ゟ人數を出し途中ニて御預人を强而受取申含之由を承申候ニ付早打ニ而御小姓頭手元に申遣候ニ付右之通騷キニ相成候由

七日浦賀ゟ鉄炮手御中小姓共ニ百人計り八日迄ニ着仕三郎右衛門にも逢申候今日ゟ表御門内大炮小炮ニて御固メニ相成申候御屋敷内外半時越しニ火廻有之諸事嚴重成事ニ御座候表御門東西御門共ニ自然之時之受持定り申候私ゟ表御門受持ニて御座候

一兩日跡水戸ゟの外聞八日九日ニ罷歸委敷書付寫取候得共此節上々早之急速立ニて中々認出來不申水戸表余程之混雜既ニ昨日爰許に貳百計り之人數到着仕候由跡に五百計り彌打立申候との事ニ御座候今度混雜之起りゟ昨年京都ゟ拜領之勅諚を返上之事井伊樣ゟせかまれ候ゟ事起りたる由當中納言樣方ハ大方勅諚返上望之由御隱居方ゟ嫌之よし水戸表に浪人もの此節四五十人長岡迄出張致し候を取靜メ之爲メ多人數被差出候處に右之面々逆寄ニて双方多人數手負打死爲有之よし其外御用人の下城ニ仕懸手負セ候共切殺候共承り申候誠ニ大變井伊家も定而今明日ニハ多人數罷登可申候此末如何治り候哉ト奉存候

一重疊恐悦之事ハ御預人皆々諸侯方に御預ニ相成申候今日向々ゟ受取ニ參り申候筈ニ御座候恐悦々々右之次第ハ此方ゟの御願ニよりて如此被仰付候との事ニて御座候

一七人之刀を見候處大關黑澤兩人弾相働たると相見その折レ方壹寸越し計り杉山之大兵故ゟ不輕長刀余程强力と相見何ゟも及の折れぬゝ無御座候井伊家も相働候ものと相見申候何樣暫時之間ニケ樣ニ刀之ゝの折レ候而ゝ中々たゝり不申候何ゟ此處ニ兵法ニ熟不熟も有之ものト深く存付申候

一今日之早不審私之考ニ而ハ御人數御呼上シ之事も今日之御預人脇ニ直り候故御留メ共ニてハ無之哉ト相考申候先少しハ安心之樣成ル事ゟから迚も水戸家ゟ井伊家ゟ唯ハ濟申間敷五十四万石之御勢ニて此節拵御物入之算用抔ハ入申間敷ものと被存候萬一私推察通り御人數御留メ共ニて御座候ハヽとゝ樣御存生ニも被爲在候ハヽ嘸々御氣ニ叶申間敷と存候事ニ御座候何樣脇に直候事ハ恐悦至極ニ存候嘸々御元ニ而ハ評判たら〳〵ニて御氣遣イと奉存候間別段無理ゟる事ニて漸壹封相頼短書差出申候右迄早々以上

三月九日　　大浦恒三郎

尙々十七人之内兩人ハ井伊樣に被捕申候由實ハ手負を連歸り申候との事ゟれか事之起ト相見申候

三月十日幕府令して隅田川新大橋筋の航通を警戒せしむ

〔御預人一件風説聞書等〕

一三月十日酒井右京亮殿御渡

御船手に

此節之儀ニ付非常御取締之ゟめ隅田川邊ゟ新大橋前迄に水主乘組番船四五艘晝夜間配置自然怪敷船等相通候儀之勿論川筋向前にも如何敷儀見聞ニおよひ候ハヽ早々注進いたし候樣可取計候事

三月十日幕府松平時之助堀田鴻之亟に命じ豫め水戸藩士の出府に備へしむ

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

一三月十日紀伊守殿御宅へ家來御呼出ニ而御達　　松平時之助（大和郡山藩主）
　　堀田鴻之亟（下總佐倉藩主）

去ル三日掃部頭登城懸水戸殿家來共及狽籍候ニ付而ハ此上水戸表ヵ若多人數出府致候儀有之候者時宜ニ寄及沙汰候間早々人數差出候積兼而手筈申付可被置候

三月十日在府本藩士遠山三右衛門水戸騒擾に關する聞取書を提出す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

水府動亂之始末一昨々日中居撰之助方ニ而水戸ヵ此間罷越候者之話略記呈上仕候

今度動亂之起源ハ一昨年　綸旨水戸へ被成下候處如何樣之御趣意哉ゑ相分不申候得共其砌從　公義御咎ニ而一旦事濟之躰ニ有之候得共右之　綸旨　公義より　京都へ御返進ニ相成候間差出候樣度々被仰渡候へ共水戸家より御返上被成旨ニ而今以御指出無御座御當主樣よりも段々御配意ニ而御差上之儀被仰遣候得共何分水戸表之勢御返上ニ相成兼再々應御役人中水戸へ被差越候由趣意ハ相分り不申候得共何樣右返上有無之事共根元と相見候由

一去月十四日若年寄格御側御用人鳥居瀬兵衛と申仁登城退出懸暮六過頃御城外南矢來と申處ニ而何者ニ候哉鑓ニ而突申候瀬兵衛も元來剛氣成人ニ而直ニ拔合候處二之鑓ニ而聲を被突たるゑ柄を切折申候由終ニ胴を被突相果申候家來共も相働候へ共何分夜中不任心狼藉者ハ立去申候尤三人と見受候由

一前條之儀ニ付老侯ヵ長岡宿へ出張いたし居候者共へ親類を被差越御示敎有之早々元屋敷へ引取可申旨重疊御諭ニ相成候へ共一向ニ聞入不申夫ヵ討手召捕方之儀御評議有之朝比奈彌太郎御老中格ニ而惣大將ニ而御先手二組新組二組其外共都合七組程ニ而長岡宿出張之天狗派之者とも未タ起上り不申處を召捕可申計略ニ而十八日曉御人數押出ニ相成候處下町紺屋丁と申處ニ而長岡之者共逆寄ニいたし候處へ行逢及鬪戰申候討手之方鐵炮百丁弓貳拾挺長柄三十筋人數五百計と申事天狗派之方も鐵炮三四十丁ハ有之たる樣子町中ニ而鐵炮を打合接戰ニ相成候得共何分暗夜雨降味方打も有之たる風聞ニ而手負死亡ハ存外少く有之たる樣子長岡勢ハ惣而七十餘人討手ハ五百計故長岡勢打敗レ敗走之樣子夫より板子宿迄立退其先ハ散々ニ相成たる樣子右之通ニ付豊人も召捕出來不申由

一柳葉組之者ハ檜木山ニ取籠是ハ多人數之樣子此手之者笠間城へ取懸り可申風聞專らニ御坐候柳派天狗派奸賊派抔と名ケ大方五ツ手計ニ分レ居候由一昨年切腹被　仰付候結城寅次郎（本ノマヽ、結城家之正統水戸地藩來之家柄ニ而知行五千石）之組も有之由唯今之樣子黨を立候而々ゑ實ニ狂氣之ごとき樣子ニ相成居候由

一三日之騒動ハ天狗派之所爲と承り及申候

井伊家之樣子

奥樣御自害と申儀ハ例之風聞之由御驚より御病床ニ被爲入候由大炮引入世田谷領百姓御呼寄之儀も何樣外聞を御取繕被申趣ニ承り及申候只今御防禦之儀ニ候ハヽ大炮相用候道理無之水戸家へ押懸可申筋猶以無之左候へハ迚も實用之心持ニハ無之相見申候御家中欠落之者有之候由ニ相聞へ申候得共是も尤とゑ不被存唯今何レを目當ニ復讐可仕哉老侯を目懸候儀ニ候ハヽ折角水戸表へ忍寄候とも迚も只今迄本懐可申樣も決而無之無謀之儀と奉存候今一兩年も相待油斷を生候時節を伺申ニ而無之而者と奉存候尤臣子之分何樣切齒銘肝之時暫時も安居ニ忍ゑ欠落仕たるニ可有之迚も事を成候儀ゑ万ニ一ツも無覺束奉存候却而水戸殘黨乘風烈放火なと仕都下を騒動致せ候儀ハ万一有之間敷とも難申油斷仕時節とゑ相見不申候

薩州人之儀日下部伊三次幷右之山慥ニ承り申候若ゑ其者歟と奉存候尤同藩ニ養子ニ遣有之由伊三次を乖候廣布西福寺之住職話申候

三月十日

萬延元年

蓮性院樣御附也

遠山三右衛門

藏　人　様
侍　史

猶々種々風評仕候儀虚實相分不申候水戸人噂も實事と奉存候間奉申上候以上

三月十一日幕府櫻田刺客の尋問を行ふ

〔撥反雜記〕

一書云三月十一日之問答
問一老職之重き御役人殊ニ忠臣之御方ニ候處其方共意趣有之共手向ひ致候ハ則　公邊へ御敵對申候も同様ニ而不屆至極ニ候
答一乍憚重御役人之被仰聞候迄も無之相心得居候但忠心之御方之由被仰聞候得共是は甚相違之御詞と奉存候
問一何故相違と申候哉
答一忠心之も國ニ忠と君ニ忠と二通有之儀之御承知之事と奉存候
一心得居候
一外國と御條約被成候ニ付夷人とも勝手ニ江戸中往來仕剩登城御目見迄被仰付洋銀通用其外　日本初よりいまた無之御閉之恥辱ニ相成候義をも御免之成候ハ御忠と可申哉却而大なる不忠と奉存候又　御主君之勅命ニも御從ひ不被成先將軍様之御趣意を御背被成　祖宗之御定をも御破被成切死丹之寺迄取建の儀を御免被成候ニ付當　將軍様を御不忠御不孝ニ陷り奉り其外之下賤之者の迷惑難儀致候事ハ御攝無之只目前之無事を御好被成追々之　將軍様之御威光薄く相成候様之御取計被成猶此外惡政多く有之候是を忠臣と可申哉大ふる不忠と奉存候
別人問一何ゟ之致候而も重御役人へ手向ひ候者　公儀に御敵對申候道理ニ而不屆至極之事ニ候
答一仰之通重御役人へ手向候儀と悪入候付則御仕置を受候心得ニ而自訴仕候事ニ御座候乍併右御老職様ニは乍恐此上もな

き重ね
天子様ゟ御隱居可被成御取計且前ニ申候通　御主君之　勅命ニ御從ひ不被成　祖宗之御定をも勝手御破被成　將軍様を御不忠御不孝ニ陷れ奉候と何と可申哉重御役人ニ相違無之候得共逆罪ハ相遁れ無之候右ニ付私とも不肖ふゝら御閉之爲ゝ　天ゝ代て逆罪人ゟ誅伐仕候勿論重き御方ゝても善事を被成候と惡事を被成候とハ差別有之事と奉存候
問一其方共　天子様を我々之　御主君様之趣ニ申候へ共我々は　天子様之御直臣ニと無之　將軍様之臣下ニ而候是と其方共之心得違と存候
答一御役人様之御詞とも不被存候乍憚各様之御官位ハ　天子様より御頂戴ニと無之哉尤　天子様と　日本閉之摠御主君ニ被遊御座候得共賴朝卿以來　將軍家へ御政事御任せニ相成　將軍様と土地を御預被遊候御事ニ御座候是は文盲之外ハ童子も心得候事ニ御座候
問別人一去年以來外國人を多く殺害致候ハ其方共ニ而可有之候
答一私共薩州人ゟとの内ニ而九人迄殺害致候其外ハ心得不申候
問一何故無罪之夷人を切害致候哉
答一夷人ゝ罪ゟしと被仰候へとも是は乍憚御不明と奉存候尤私共不申上候とも追々世間ニ而罪之次第ハ心得居候事ニ而誰も夷人之切られ候を悦ひ候人情ニ而も御推察有之度候
問一左様ニハ候へ共　公儀ニ而御免被成置候を勝手ニ殺害致候と不屆至極ニ候
答一私共重御役人ニ存寄御座候ニ付刀を試度兼而心懸候得共無罪之者を切害致候而と不相濟義と存兼々遺恨も有之且無禮をも仕候付幸と存候而夷人を切試申候勿論夷人無禮仕候趣御屆申上候得共夷人は其儘被差置私共を却而御叱被成候程之儀ニ付旁切試候事ニ御座候
一追而可相尋間今日ハ退出可致

萬延元年

三月十一日幕府は當分の内内藤若狭守等をして江戸市中を警戒巡視せしむ

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕（安政五年筆起萬延元年九月迄）（三月十日附を以て同月十一日達）

覺

御持之頭　内藤若狭守　豐田藤之進

御先手　大久保喜右衛門　太田運八郎

其方共組與力同心當分之内江戸中晝夜相廻り少しも怪敷體之もの見請候ハヽ召捕可申候其方共も相廻り武家屋敷に入候共附込候而召捕月番町奉行に可被相渡候事

右之通相達候間向々に可被達置候事

三月

三月十一日幕府酒井左衛門尉等に令して櫻田の殘黨に備へしむ

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

酒井左衛門尉（羽州鶴岡藩主）　奥平大膳大夫（豐前中津藩主）

一三月十一日紀伊守殿宅へ家來御呼出ニ而御達

去ル三日於外櫻田及狼藉候者共有之未殘黨之者も有之趣ニ相聞候間萬一異變之儀有之候ゑ兼而其心得ニ而罷在候樣可被致旨在府同席之面々へ早々通達可被致候事

阿部伊豫守（備後福山藩主）

三月十一日松平大隅守片桐石見守戸田七之助櫻田事變に關し責罰せらる

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

御留守居より差出之書付下廻ニ來ル

松平大隅守　名代　岩瀨市兵衛

去ル三日其方居屋敷前ニ而重役人ニ對し多人數及狼藉候者有之候處人數等茂不差出趣相聞心得方等閑之儀不束之事候此段可申聞旨御沙汰候

片桐石見守　名代　三浦美濃守

去ル三日外櫻田ニおゐて及狼藉候者共之内日比谷御門罷通候節人數差出追懸候由ニ候へ共手延之取計勤番之家來共心懸不宜等閑之段畢竟常々申付方不行屆故之儀ゝ相聞不束之事ニ候依之差扣被　仰付之

戸田七之助　名代　小倉新左衛門

去ル三日外櫻田ニおゐて及狼藉候ゑの共之内馬場先御門面番所へ罷越候者手負人ニも有之早速捕押可申處手延取計勤番之家來共心得方不宜等閑之段畢竟常々申付方不行屆故之儀ゝ相聞不束之事ニ候依之差扣被　仰付之

右於紀伊守宅同人申渡大目付伊澤美濃守相越

三月十一日　　戸田之七助

去ル三日狼藉者相通候節馬場先御門面番所張居候家來共先爲慎置候樣可被致候

三月十一日水戸藩宮田瀬兵衛願書を本藩邸に提出し櫻田一擧の同盟者たるを以て均しく幕府の法に服せんと欲するの意を陳述す

〔御預人一途〕

萬延元申年三月十一日

一今日水戸樣御家來之由ニ而歎願之筋有之罷出候おもむき西御門申出候由ニ而當局に相通候付御坊主間に相通御城使致應對候處左之通書面差出候事

乍恐以書付奉歎願

常州水戸久慈郡太田ノ鄉馬場村

宮田瀬兵衛

歳四十七

右私共儀高橋多一郎幷關鐵之助等に全元より同志之者ニ相違無之何卒格別之御仁惠を以て十八人之者同樣御仕置被仰付被下候樣偏ニ奉願上候以上

安政七年庚申三月十一日辰中刻

御屋形樣　上

〔今書〕

宮田瀬兵衛演舌之趣左之通（三月十二日家老中に提出す）

一自分同類三千五百人餘有之いつゑ茂十八人之者と同志ニ而領主より度々嚴重被申付候を相背き今度之動亂を發右故十八人と同罪之御仕置ニ被仰付度右之通ニ付御當代中納言樣前中納言樣ニ公邊より御遺恨無之樣是等之處何分御取扱被下度との趣

但高橋多一郎關鐵之助此二人最張本ニ而於外櫻田自殺致候段申聞候得共十八人之內に右樣之名前相見不申候付其段申聞せ候處一圓不審之由申聞候

一三千五百人之者者いつゑ茂百姓に而苗字帶刀御免之者に而右瀬兵衛茂同樣之身分に候由

一外櫻田之變事を於在所五日ニ承り直樣出府今朝迄小石川御上屋敷若年寄岡田新太郎方に止宿いたし居候由

一前文三千五百人之面々十八人之者同樣仕置被相願候との御申出ニ候處右之趣者三千五百人之面々に遙々申談之上ニ候哉之段相尋候處此儀者此節改而不申聞兼々一統覺悟仕居候儀に有之尤在所出立之節先自分一人惣代として江戸に罷出其御筋に訴出候筈ニ付いつゑ御指圖可有之夫迄之處決而動搖不致樣早々可申談旨悖に得斗申含致出府候由

一水府御役方に今日御打立之始末ハ一應申達ニ成候哉之段相尋候處いつ方に茂不申聞今朝屋敷出奔致し罷出候との趣申聞候

一前條願之趣殊勝ニ相聞候付取扱可申候得共水府御役方に一應及御懸合候上ならては難取計右ニ而故障無之哉之段申聞せ候處左候而者志望之差障り相成候儀ニ而然る上者御取扱者奉願間敷由申聞公邊御役方に自訴可致との事ニ相成其末御月番樣に奉伺埒ニ相成候事

三月

〔仝書、尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

御用番内藤紀伊守様に被差出候書付寫

常州水戸久慈郡太田ノ郷馬場村
宮田瀨兵衛

右者今十一日越中守居屋敷に罷出別紙書付差出申候右者不容易儀ニ付留置番衛を茂附置申候如何取扱可申哉此段奉伺候様申付候以上（別紙は前に掲げたるを以て茲に略す）

細川越中守家來
吉田平之助

三月十一日

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

三月廿九日江戸立屋閇三月十一日着水戸之者御屋敷に訴出候一件

以別紙得御意申候去ル十一日晝時分龍口西御門に帶刀之者壹人罷越水戸之百姓宮田瀨兵衛と申もの二而歎願之筋有之罷出候段申出候付御留守居方ゟ致面會候處濱舌之趣別紙之通ニ而一旦ハ大ニ相驚段々嗤合候ハ差寄右之次第水戸様に被仰遣候方ニも可有之哉左候ハ、是非御請取ニ相成中納言様方御身之上奉氣遣候瀨兵衛趣意ハ相立申間敷さゑハ迚此方様ゟ御取持ニ相成候筋ニも無之候間右之趣瀨兵衛に申聞せ候處不怪感佩いたし至極御尤千萬ニ付御役人様御屋敷に罷出訴可申旨申出候得共不容易罪狀乍承其儘歸し候儀ハ相成間敷と御城使等差添池田播磨守様に連越候處御用番様より御差圖無之候而ゑ難受取との事ニ付是又筋々之御手數ニ相成翌十二日之朝播磨守様より與力等被指越御受取有之其末他へ御預ニ相成候由御座候初發ハ孰茂大ニ致心配候處其夜ゟ翌朝御引渡迄ニ様子跡達而承候へハ種々之嗤茂前後不揃ニ而可笑敷事計り有之且付添之歩御小姓ゟ刀を拔見候處言語同斷錆付居候よし何様百姓ニ而も少々氣然為ニ而狂亂いたし候をのニ相違ハ有之間敷此砌ゆへ詰らぬ事ニも致警衛御一笑可被下候右躰之儀も御聞取様次第ニゑ御懸念可有之と有之儘入御耳置申候右一卷之書付都合四通差遣申候以上

三月廿九日

有吉市左衛門
溝口藏人

御家老中
御中老宛

三月十二日本藩は宮田瀨兵衛を町奉行池田播磨守の屬吏に引渡す

〔御預人一途、尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

御用番内藤紀伊守様に被差出候書付並御書取寫

常州水戸久慈郡
太田ノ郷
馬場村
宮田瀨兵衛

右者今十二日池田播磨守様御組與力同心に引渡相濟申候此段申上候様越中守申付候以上

三月十二日

細川越中守家來
吉田平之助

（右一通）

別紙御屆申上候宮田瀨兵衛同志之者共茂有之自然此後茂越中守方に追々申出候儀茂難量御坐候處此度同様之趣ニ御坐

候ハヽ、其都度々々取扱筋奉伺候上池田播磨守様に引渡方等仕候而者諸事繁多ニ相成及遅々夜陰深更ニ茂至り可申双方共以て都合茂不宜爲差別儀茂無之候ハヽ、御用番様に不奉伺直ニ播磨守様に御懸合之上引渡候様仕度奉存候左候ハヽ、右之段兼而其御筋に御沙汰茂被成置被下候様仕度此段奉伺候以上

三月十一日

細川越中守家來
吉田平之助

（十三日付札指令）

兩三人位迄者書面之通取計可申候尤多人數ニ候ハヽ、引渡方之儀相伺候上差圖次第取計候様可仕候事

〔街談紀聞〕

此潮兵衛菅沼新八郎様に交代寄合御預ニ成尤不本心之様子ニておゐしたる言行あると茂有之候錄鈔ニ不及

三月十二日幕府櫻田事變に際し會津藩の處置宜しきを得たりしことを賞す

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

一三月十二日紀伊守殿宅へ家來御呼出ニ而御達

去ル三日於外櫻田及狼籍候者有之候處早速人數相揃置差圖相伺候段家來共心得方宜常々手當向行屆申付方格別宜故之儀と一段之事ニ思召候此段可申聞旨御沙汰ニ候

松平肥後守

三月上旬より中旬に互り櫻田の彦根藩邸に於て粮米焔藥陣幕其他の準備に勤む

〔夷事帰錄〕

井伊様御屋敷御手當聞取申候次第

一兵粮米六千俵余り木挽丁御屋敷ゟ櫻田上屋敷ゟ當月八日比ゟ十一日迄日々牛車ニ而積入申候分

一材丸太并六歩板四歩板之類當月五日比ゟ十二日迄御上屋敷中屋敷兩所ゟ積越申候分大八車貳百挺余是ハ未タ日々積入居申候

一よしす何程と申高ハ知ゑ不申候是ハ市々ゟ積越申候

一當月末下野佐野庄御領知ゟ百姓三百人余赤坂御中屋敷ゟ御呼寄ニ而當九日比百五拾余御呼寄都合五百人計右銘々前帶ニ木札を付御上屋敷諸役を仕候由

一尾張町貳丁目夷屋ゟ御注文之品々

一陳幕　三百張　一白股引　百足　一法被　五百枚

右之通夷屋ニ而出來仕候由ニ御座候此分ハ兼而御備不足之足ト承り申候

一御國元ゟ人數未タ着仕不申並交代之者途中ニ而飛脚ニ行逢急ニて着仕候分者十日比ゟ十二日まてニ段々着仕候由承申候

一人數詰込之次第帶刀以上之者ハ御上屋敷ゟ詰込仲間以下御中屋敷ゟ詰込申候様子ニ御座候

一千駄谷御下屋敷ゟ當月五日比鹽焙廿箱余御上屋敷持越申候段所之者ゟ承り申候右之通見聞仕候以上

三月　村田熊喜
齋藤衛門次

外ニ油梅干たくあん味噌抔も夜中ニ右御屋敷ゟ取入申候由

三月十四日幕府は閣老參政等の事務分擔を定む

〔撥反雜記〕

一三月十四日和泉守殿御渡

御廣敷　御守殿　御住居　御取締　和泉守

醫學館　講武場并越中島調練場　大森町打場　組々調練　木多越中守

學問所　天文方　大小砲鑄立　內海御差圖　紀伊守　牧野遠江守

蝦夷地御開拓　蕃書調所　中務大輔　遠藤但馬守

京都御警衛　大坂表御臺場築立　對馬守

御軍艦操練　大船製造　酒井右京亮

右之通申合取扱候事　三月

三月十四日水戸齊昭藩士を論して猥に出府するを禁す

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

三月水府老公御書下ケ

此度於江戸表以之外之儀出來致心配候右ニ付諸生共無願ニて罷出候もの有之候而ハ　公邊へ對し不相濟候間江戸表ゟ申來り候歟政府ゟ達し有之候ハヽ早速相登り可申候夫迄ハ壹人なり共登り候而ハ不相成聚とハ不分候得共承り候處ニ而之井伊道路ニ而彌被打候由併病死之振合ニ相成家督無相違可被仰付候間彌家督無相違上之此方屋敷へ寄來り又ハ中納言登城先等ニ而及迎候事ハ有之間敷候井伊ハ家來筋此方ハ主君之筋ニ候得共　公邊ニ而只御捨置不被遊井伊ニ候得若しイ之。先之家來此方家來と出會之節及及傷候事抔之何共安心不致候何ゟとも此方ハ仇持と申者ニ候間一同弘道館ニ出武術出精可致江戸ニ而政府より達無之內之罷登候而ハ。不相成候此段子弟等へ我等ゟ不殘論候樣ニと不相成候間皆々之者へ今晩中ニも可被相論候

三月十四日イニ

教職中

右之書付水戸下町泉屋仁右衛門持參ニ付寫置

三月十四日薩藩德田嘉兵衛水藩鵜飼喜三郎等京都に於て捕へらる

〔夷事輯錄〕

三月十四日京都ニ而被召捕候名前

薩州　德田嘉兵衛　同人三男

水戸殿家來吉右衛門二男　同　貞五郎

鵜飼喜三郎　町儒　中島永吉

劍術師範

高橋等を隱シ居　歌　讀　　島　男　也　　金子孫四郎
キ短筒六挺隱居　　佐　倉　靜
右稻葉伊豫守家來に　　佐藤鉄三郎
右鵜飼兩人之昨年之御仕置ニ遠島被仰付置候處如何し
て忍登居候哉ト奉存候　　右田村繁次郎家來に
同廿三日京都ゟ着直ニ兩家に御預　　右兩人ハ伏見ニ而被召捕候事

三月十五日將軍親しく列侯に諭し意を内外の時局に注き怠ること勿らしむ

〔神庫文書御密書天十三印散櫻錄〕

一三月十五日被仰渡
今度開港以來各國之船々入津異情も難計且今般不慮之儀も有之油斷之有まゝが猶又手當向念入候樣上意ニ候
紀伊殿御取合　　加賀中納言殿
松平三河守
松平兵部大輔
本多美濃守
松平淡路守
藤堂大學頭
松平飛彈守
右之通御座候

但此以前別段尾張殿も紀伊殿加賀殿下總守殿被爲召前文之通上意有之候由其日加賀殿ニ之御不快ニ而御登城無之今日御登城ニ付被仰渡候

三月十五日所司代酒井忠義櫻田事變の連累者有村雄助等追捕に關する顚末を幕府に報告す

〔撥反雜記〕

一酒井若狹守より宿次ゟ以申來候趣
松平修理大夫家來有村雄助と申者去ル三日其御地出奔いたし東海道筋罷登候趣ニ而其御地より修理大夫追手之者罷登り四日市驛ニ而追付召捕其節水戸殿家來同道之者有之右之一同召捕伏見表修理大夫屋敷迄連越水戸家來兩人之者同處屋敷ゟ差置同人當地屋敷留守居之ものへ引渡可申との懸合有之趣一昨十三日風聞有之候付早速當地町奉行へ心得申渡大坂表之儀ゟ松平豐前守へ手當方等心得申遣伏見奉行林肥後守へ右風聞有之候間早々承糺無相違候ハヽ同所御役所へ爲差出嚴重召捕置候樣申渡則肥後守方ニ而同所屋敷家來之者呼出相糺候處右風聞之通相違も無之候得共右雄助儀ゟ去ル十二日直ニ薩州へ差下水戸殿兩人者名前金子捨次郎佐藤鐵三郎と申者之由ニ而伏見表屋敷へ差出候旨申立候間右兩人ゟ早速伏見御役所へ爲差出取圍置雄助儀ゟ薩州表へ早々申遣引戻し同所御役所へ爲差出候樣可申渡旨肥後守へ相達申候此段申達候以上
三月十五日　　酒井若狹守
松平和泉守殿　　内藤紀伊守殿
脇坂中務大輔殿　　安藤對馬守殿
右之兩人ゟ關鐵之助增子清兵衛と申本名之處本文之通變名致候由　三月廿日到來

三月十五日水戸藩は櫻田事變につきては藩主の苦衷を察し一切言論に渉る可らざる旨を其領内

に令達す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

水戸御領在方一統へ
御觸面之由
以書附申觸候

太田直藏

此度於外櫻田邊井伊掃部頭殿登　城先騷動之儀元御家中之內拘り之者も有之重御役家之儀ニ付
兩君樣茂深御配慮被遊候間人々致遠慮唯等一切いたし不申候樣御達有之候條其旨相心得村中寺社門前ニ至候迄無洩可
申觸候見屆早々順達可致候以上
三月十五日

三月中旬本藩吏員秋吉久左衛門藤林健左衛門彦根城下を視察して其形勢を報告す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

聞取書

私共儀東海道ハ十一日木曾路ハ同晩ニ鳥居本宿ニ着仕申候
一彦根御城下之樣子承繕申候處江戸表之早打去ル五日夕七時分ニ着仕候樣子ニ御座候
一同六日より春交代之振合ニ而下り初り物頭安中半右衛門組足輕二十四人引連之罷下申候夫方引續日々乘駕八九挺歩行
之而々四五十人被差立申候　付札、物体究り交代三月五月九月之處此節一同引上ケ交代之振ニ御座候由
一同十日壹萬石格家老木俣清左衛門四千五百石長野伊豆被差立毎之振合とハ違先鑓次鑓引馬釣具足迄ニ而孰も飾道具等
一切無之候家老兩人ハ切棒駕馬廻等と物而乘駕ニ而駕之內何之も草鞋脛用意之由ニ御座候
一家老駄荷之內ニ簑五駄程用意ニ相成申候
一同十二日立ニ長持五拾掉程被差立七島莚包ニ而御座候人足之申分ニ之歩具足共ニ而ハ無御座哉と申事ニ御座候至而輕
相見申候
一御城下之樣子精々承繕申候處御家中ハ平日通ニ替候模樣も無御座一躰靜ニ而此節之御模樣ハ何之御觸も無御座由ニ御
座候へ共江戸表之變左右着仕候而方御城下一躰堅固ニ相成御府內ニ入込居候旅人ハ皆送出ニ相成入口々々ニ番所を構
へ御領內之者たり共用向ニ而罷通候處迄一々送り御座候由ニ御座候
一番場宿ハ彦根領堺ニ而江戸變左右方假番所を構弓鐵炮を飾申候樣子ニ御座候處私共行懸り候時分之番場宿之張番ハ引
上ケ申候鳥居本宿入口ハ町家ニ張番を構弓鐵炮ハ無御座棒張迄ニ而御座候右之外相替候事も聞取不申候右之次第を以
言上仕候以上

歩御使番也
秋吉久左衛門
藤林健左衛門

三月

三月十六日我藩吏員高橋彌四郎井伊家の動靜を探り報す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

此以下下タ廻ニ來候書付
伊勢屋德兵衛方丸屋（蠟燭屋門名）卯平ニ猶承合候趣左之通
井伊家之家中當時之模樣ニてハ今ニも人數押出候手賦と相見一番手ハ何某二番手三番手と手組を相整居用意之品々夫
々手當相濟尤大炮ハ目立候付濱丁中屋敷へ圍置中以下之鉄炮ハ取揃有之紀尾井坂詰も不殘上屋敷へ引越候付大御袋も
見締として引越ニ成居候由當時之處を以丸屋情相考候處ニてハ決而人數押出候樣ニ申人氣ニハ相見不申　公邊方之御

下知次第と覺悟之躰と見受候由

一去ル四日彦根出立之御奉行御用人同十二日着府ニ相成勿論發足までハ一亂之樣子相知レ可申樣無之惣躰御城御普請之内非伊家受持之場所有之候付彦根ゟ大工等職人百人計此節一同ニ被連越候由ニ而於岡崎一亂と承り夫ゟ兩人ハ一騎駈程ニ而此元着ニ成候事此躰を見候者ハ家老之ものと申觸レたるニ而も可有之候由

一若殿ハ去ル十二日乘出之願濟ニ相成居候由此節駈登候家老ハ木俣清左衛門壹人と相見未タ二十臺之人之由外ニ重役も登り可申右家老着之上と申候而も外ニ子細も有之間敷矢張

御下知ニ從ひ尤諸藩之内ニ討手ニても被仰付候時宜ニも到り候ハヽ是非一番手ハ可奉願との風説もいたし候由一旦之處ニて腹ニ居へ兼候躰ニ有之たる處當時ニ成候而ハ御家が大事と申處ニ心決いたし候ものと致推察居候由家老着ニ相成候ハヽ程を見合内輪之模樣ハ尙御繕知せ可申いつゟ十七八日比ならてハ着いたし申間敷由

右之通虛實ハ何程ニ可有之哉伊勢屋聞取之趣右之次第ニ御座候事

三月十六日　　御奉行所根取也　　高橋彌四郎

〔魚住文書〕

井伊樣異變ニ付東海道美濃路被差越去ル八日朝箱根ニ而右御家中足輕躰人數五十人位ニ行逢申候ニ付跡達承繕候處今度御本丸御燒失ニ付掃部頭樣存寄ニ而暫大工被差下候由ニ御座候

一十日夕鳴海宮之間右家中物頭壹人上下拾人位見受其外侍分五六人足輕躰五十位ニ行逢申候同十一日朝墨俣川向ニ而侍分拾人位足輕躰六十人位ニ行逢申候同夕垂井今須之間ニ而足輕躰四十人位同夕御家中一ノ家老木俣清左衛門上下前後ニ同勢七十人位同刻三家老長野伊豆上下前後ニ同勢四十人位ニ行逢申候其外鑓壹人ニ拾本又ハ五本皆侍分ハ具足壹人宛持せ鑓ハ油紙包ニゞ小者躰之者數十本持道々ニ而行逢申候凡十日ゟ十二日三日之間人數七百人余も可有之樣ニ覺申候彦根家中之樣子ハ何之觸出も無之平日通りニ而此節下りハ三月五月九月三度之交代を一同ニ罷下候模樣ニ御座候

一人馬觸之十日ゟ日數十日之間五十人五十疋之買上を以通行いたし候

一彦根城下之出口々々張番所出來至而嚴重之事ニ而旅人一切入レ不申由ニ御座候

右之通見聞仕候

三月十六日　　吉田鶴太

三月十六日我藩偵吏某水戸藩の形勢を探り報す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

安政七庚申年三月十六日

一八州御取締出役先へ大惣代ゟ左之通宿繼を以内注進いたし候段申出候事

乍恐以宿繼御注進奉申上候

一先頃江戸表混雜ニ付水戸表御城下近邊其外在中樣子柄内探索向被　仰付候間左ニ奉申上候

一水戸樣御家來其外在中神主申合凡人數六拾人餘城下ゟ江戸表へ通筋長岡村ニ右人數相詰居候付　上意を以多人數出役罷越候由然ル處御威光ニ恐其節之一統之者一應ハ散々逃去其後又候相集一同議定いたし其内貳拾人相撰江戸表へ罷出當月三日御登　城之折柄狼藉之所業ニも相成候由且人數名數承り別帋ニ相認奉差上候其餘相殘候人數之者在中立廻り物持を見掛押借同樣之働折節有之候風聞既ニ當領分境鹽子村と申所百姓忠兵衛宅へ當月三日白晝三拾人一同拔身ニ而中ニハ血刀を携至極亂妨之始末ニ而金子無心申掛依之家内一同驚入逃去老母一人相殘居候ものの無據有合之金子拾兩差

出被奪取其上所持之鉄炮是又奪取夫より何レへ歟逃去當分行衛相知不申候

一御城下表之儀用心嚴敷見付又ハ城之内出入之口々多人數相詰鑓鉄炮鑄相固其外城下入口新番所出來通り之ゝ其壹人別相改一宿ハ格別二夜泊ハ親子兄弟たり共留候儀ハ不相成旨被仰出嚴重之事ニ御座候

一御城下近邊其外在々人氣樣子柄先頃江戸表右混雜手柄之心得ニ而噂を申人氣ニ相叶候哉當分至極取收り宜敷相見申候

一先頃結城ヘ相懸り多人數船ニ而相下り候そのゝ樣子柄探索向被　仰越此者之儀ハ先頃長岡村ヘ相詰候者之内歟も相知不申候又者御床机廻りと唱候者有之候哉凡八拾人程有之若も此者ニ候哉聢と相知不申候其餘之儀ハ罷出不申趣ニ御座候

一水戸樣御家來ニ而長倉と申所ニ御館有之松平采女正樣先月廿六日御城下出立ニ而小石川ニ御登被爲在候處右混雜ニ付當月三日江戸表被成御出立其節小石川御當君樣ゟ御意之樣子ニ而在所より江戸表ヘハ當分罷越候儀御差留之御沙汰御領中ヘ御達ニ相成候趣ニ御座候

右廉々内探索仕候次第柄宿村繼を以御注進奉申上候

安政七年申三月

三月廿一日遠山三右衛門水戸藩の形勢を坂本彦兵衛に報す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

柳原御家來秋田助太郎ゟ聞取之趣

一水戸老侯先年千字文之大炮御製造且追鳥狩之砌士民ゟ金五兩充差上候得者名字帶刀御免ニ相成候由夫故他邦と違各別鄕士多く有之文武藝も被仰付候付土民之本業者不行屆ニも相成自然と零落之基ニ而大ニ致後悔候者も多分有之由扨又近年追々小金宿等ニ出張之面々も表面者穩ニ無之候而者御爲ニ不相成との事ニ御座候ヘ共裏面よりハ出張居不申候而者御爲不宜と申候事ニ而追々之押出數日之間罷出居候間耕作之方不行屆歸り候而も妻子育居兼候位ニ而彌以所々ゝ集り惡事を企候由右之證據を柳原樣御領之内水戸領と境之處此方之地を彼方より作廻り候ゝその段々有之廻村之節荒畑ニ相成居候ニ付相尋候ヘ者前文之通申出候由且御領民之内相應ニ貯有之候ゝその宅ヘ頃日數人拔刀炮器抔を携ヘ參候付不得止百兩計遣候由孰ゝも水戸浪人ニ而無賴ゞも導き顏を存候ゝのも有之候得共後難を恐默止居候樣子御座候

一同し天狗組之内大天狗組小天狗組と流派有之大之方ハ身分有之ゝの小之方ハいつゝニ鄕士等ニ而可有之との考ニ付右之組者孰も一途ニ相心得强ク有之由柳組と申も一派有之候而御本方ニ而も無之其餘いつゝゝも不倚格別推張事を爲す勢も無之候ヘ共極々不宜組ニて種々之事をも設ケ人氣動搖之儀を申觸し申候由一を以申候得者何と歟申宮ニ額を上ケ天狗大敗走ニ而或ハ討ゝ或ハ北ケ鼻ノ先ニ膏藥を附候繪を掛候付天狗組大ニ逆し彌騷立候躰之事も有之ケ樣之所業いたし候事之由ニ御座候處々聞方之趣大同小異何樣小形ハ有之事ニ相違ハ無之右之通之人氣故迚茂急ニ平穩と申見込無之趣右之外稜々承り候ヘ共信用いたし候程之儀無之由申出候事

二白先時ハ貴答拜見仕早速申居ヘ申遣置候右ニ付而少々私見込之儀も有之明日共透を得候ハヽ一書拜呈可仕候以上

昨日者拜容雀躍之至ニ奉存候扨申上置候通歸懸ケ共家ヘ立寄候處此間一條後兩人共彼藩邸ヘ引取候話ニ而御座候夫より土井樣御屋敷ヘ立寄古河表之樣子抔承り候趣取交左ニ錄上仕候共間ニハ間違も可有御座候得共大意ハ相違不仕儀と相見申候先之此段迄草啓仕候以上

三月廿一日　　遠山三右衛門也

坂本樣　彦兵衛也

〔仝書〕

一水戸表之樣子承り及候處上巳之大異變後漸々人心穩成方ニ相成檜ノ木山等ヘ引籠候面々も悉く立去り實者水戸城下銘

々家居ニ罷歸候者も多く有之たる哉ニ風聞仕候是迄銘々論說を立流派相分レ自然と組々名號を下し候儀ニ候處元來何も自己之私より生候儀ニ無之事ニ候得者此節之一條承り及此上者御主人樣御身上之安危ニ係り候儀と是迄銘々流儀を立候趣意惣而打捨一致ニ相成候由尤只今之處者水戸城御手配被仰付段々御本丸を始御城下出入迄も御備有之ニ付不穩景色ニハ拜見候得共內輪之處ハ至極平穩ニ赴キたる由今暫くいたし候ハヽ水戸表之勢ハ全く無事ニ相成可申との事ニ御座候兄弟間牆外防共侮と申意味合と相見申候水戸表今迄騷動之起源者全く　綸旨返上有無之論より事を生シ候由ニ而大變前松平大學頭樣文官水府表へ罷越元より御末家之事ニ付段々知識之者も有之內輪之樣子承り糺之書付有之候得共昨日彼方手許ニ無之兩三日中借申筈ニ付いまた右書付御手ニ入不申候ハヽ近日差上可申候今日者當番殊外繁雜ニ而先者右迄認差上申候以上

三月廿一日　　三右衛門

彦兵衛樣

三月廿一日我藩吏員武田和平松本重助井伊家の動靜を探り報す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

聞取書

一井伊樣御屋敷內之模樣承繕申候處木俣清左衛門昨廿日夕八時過霞ヶ關御屋敷着仕候由ニ御座候

一井伊樣へ數年御出入仕候人今朝木俣へ面會仕候節同人ゟ咄之趣此節之異變扨々殘念ニ存候早飛脚國許へ着仕候處家中一同動搖いたし候付嚴敷申渡漸取鎭去ル十一日彦根表發足仕候處狼藉者之餘黨凡三千人計も御座候由風聞承り候間於道中共餘黨共若仕懸申哉も難計因而鉄炮等玉藥も仕込持越且又自身駕ニハ年齡相應之家來を乘せ自身ハ垂駕ニ乘り引下り附添之躰ニ而罷下昨夕着いたし直ニ評定ニ取懸り漸今曉八時分御小屋へ引取候との事ニ御座候由

一御屋敷內殊之外嚴重ニ而御門々々大炮を備へ御家中銘々之小屋々々も具足鎗等備何時ニも爭戰不支樣備有之候由且又世々木御屋敷ゟ武器類數多取寄日々玉藥之仕入等有之由ニ御座候

一御前樣ハ御自害御家中公用人始五六人切腹被仰付候由之風聞實否承合候處全風說のミニ而實ハ御屋敷內ゟ而右樣之風聞承不申との由御座候

一御袋樣養敎院樣と申候由喰違御屋敷ゟ霞關御屋敷へ御引移之由實否承合候處是も右同樣ニ而一ト先御見舞として霞ヶ關へ御入之處無程喰違へ御歸之由ニ御座候

一掃部頭樣御嫡子當年三才鹿麿樣と申候由ニ御座候

一先ノ掃部頭樣御末子　御名不知當年十三才此御方此度御家督有之哉之風聞御屋敷ニ於て承候由ニ御座候

一木俣清左衛門明日御老中樣御退出之上御役宅へ出仕之由ニ御座候

一今度狼藉仕懸候日下强助井上清太夫（付札　此兩人之儀大關和七郎列ゟ差出候姓名書十七人之內ニハ相見不申候事）此兩人於場所召捕御屋敷へ連歸り置兩所へ入有之兩人共至而薄手を負壹人天窓七針位かた同斷嚴敷番を付有之由御座候

一霞ヶ關喰違兩所共職人大勢入込新タニ小屋懸等仕候由ニ御座候

右之通彼方樣ニ數年御出入仕候人之咄直と承候間此段御達申上候以上

三月廿一日　　武田和平　杉本重助

三月廿三日本藩吏員は江戸詰の總人員を調査して長岡佐渡に報告す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

江戸龍口白金共外御屋敷々々詰込并定府共人數左之通

一貳千九百八拾七人　　內　士席以上　三百七拾六人

獨禮以下　　貳千六百拾一人
相州詰人數左之通
内
士席以上　　九拾壹人
獨禮以下　　貳百八拾五人
惣合三千三百六拾三人
右之外ニ當年被差登管之外様足輕以下人數左之通
一百人　外様足輕當春登
一九拾八人　右同當夏登
一五拾人　御長柄之者當春登
一七拾人　右同當夏登
一五拾人　右同當秋登
三月廿三日
右者佐渡殿より御尋有之及吟味候處大概本文之通ゝ付引切書ニ〆入披見候事

三月廿四日本藩政府は藩兵東行中止に關する本月九日附在府老臣の通牒に答へ藩主の親書に對する請書を送る

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

將監殿御執筆
此度中根平八郎被差下御預人御引讓相濟御屋敷平常ニ復し水戸表幷井伊家之模様ニ於も格別異ル唱相聞不申候付御備御人數被差登候ニ不及旨早打御飛脚を以被　仰下候得共萬一他之風聞等ニ係大勢罷登候様ニも有之候而ハ街道筋且ハ江戸表之人氣ニも懸折角御預替之御趣意ニ背候間態ゝ平八郎を被差立候條精々相示可申旨被　仰下御　意之趣何ゟも奉畏候右御請島庄右衛門を以申上候付如是御座候已上
三月廿四日
被仰越通致承知御紙上之趣奉達
三澤志津摩
析木内匠
小笠原備前
大木舍人
有吉將監
長岡監物
長岡佐渡

尊聽候以上
閏三月廿五日　同月廿六日立御飛脚　四月十九日御國着

溝口藏人殿
有吉市左衛門殿

〔仝書〕

被成下御書謹而奉頂戴候今度井伊家不慮之儀ニ付而者御預人被蒙仰別而不容易儀ニ付段々被仰立候末諸家様ニ御預替之御沙汰有之先者被遊御安慮候得共最前之儘ニ而者自然天下之動亂とも相成可申哉彼是御人少ニ而者難相濟御備手被差登候様被仰付越置候得共此節御預替ニ相成於公邊者一統重疊穩ニ有之候付俄ニ御人數抔御呼寄ニ相成候様ニ而者御趣意ニ戻可申との儀松平和泉守様より内々御心入之筋有之其上逐日人氣茂鎮候ニ付御人數被差越候儀者急度見合候様取計可申旨尊書之趣何ゟ茂奉畏候右御請申上候條宜御取計可被下候以上
三月廿四日
三澤志津摩
朽木内匠

萬延元年

溝口藏人殿
有吉市左衛門殿

小笠原備前
大木舍人
有吉將監
長岡監物
長岡佐渡

三月廿五日本藩政府は櫻田事變の報知に接し藩主の親諭ありと雖も臣子の至情默止するに忍びず豫め若干部隊を東行せしめて事變の急發に備へんことを在府老臣に通議す

〔尊攘錄櫻田並東禪寺一件〕

今廿五日東海道三日半限之屈飛脚差立申達候去ル五日共御地仕出之屈同七日同九日御差立之上々早打御飛脚追々着先以水戸侯御家來同志之面々十七人井伊樣御登城を心懸御行列兩脇を罷通雪降ニ付種々ニ形を變し御駕ニ鉄炮打込一同切懸切結候暇ニ御駕之双方より刺候上引出御首を取立去候由右之内四人此方樣に駈込共末脇坂樣に駈込之者共都合七人御預相成候付而者差寄御取扱振を初公邊ニ之御伺且世上不穩飛說有之外御屋敷之面々龍口に御呼寄相詰之交代を御取寄等種々御心配有之候趣委細被仰越誠以不慮之大變ニ而右之御左右致承知候而者唯々御地之儀懸念仕此末如何成變事差起可申哉と重疊案勞仕去ハ迚三百里隔居候得者直樣御人數被差向候共急場之御間ニ合兼其上御人數俄ニ御取寄被置樣之儀は御爲筋に不相成候間御下知不被爲在候内ハ決而御人數被差登之取扱無之樣委曲御示諭之趣も有之日夜御左右相待居申候處去ル十九日ニ早打之御飛脚着些大造ニハ可有之候得共一向ニ御備組一手可被差登哉と御伺之處左樣ニ有之候得者被遊御安心旨被爲在御沙汰候付而者此元ニ而之取扱筋等稜書を以下細被仰越夫々致承知當三月中迄一番手取崎忠左衛門受持ニ付即刻御呼出組共用意濟次第早々相州御備場詰被仰付旨申渡之趣は他筆御用狀之通御座候翌廿日大筒手師役兩人呼出是又申渡候ハ今度之一番手者先年相州表に至急ニ被差登候御備組ニ付少者馴合居申候鹽梅も有之且ハ政府之手捌も行屆先年之樣ニハ混雜ニおよひ不申一統仕廻方速ニ而既に池部啓太門弟大筒一手ハ昨廿四日出立夫より御番頭等勵御人數迄引續大概七八切ニ出立仕せ候筈之手賦仕道中筋此砌別而恒方等ハ發足之面々一切々々書付相渡申候積ニ而種々申談候内ニも井伊家之一條不天之儀眼前ニ存命罷在候而者片時も安兼候得共右ニ付而は深御心配筋も有之段々御手を被附候趣も被示越候付其後之御樣子如何程可有之哉と實々御氣遣申上御便奉待居申候處同廿日夕猶又早打御飛脚着仕右御預人他之諸侯方へ御預替被仰出同九日之晩夫々御引讓相濟候處におゐてハ御屋敷之儀更ニ御心遣之儀も無之其上水戸表井伊家之模樣も段々相分候間御人數御呼登御不用ニ被仰出候段奉敬承先々上ニ茂嘸々可被遊御安堵奉恐悦候右ニ付而者被成下御直書を茂候付御備組之面々並大筒手共此節者用意ニ不及旨夫々申渡候中根平八郎儀も同廿日着御書取被爲在御下知之趣奉敬畏候右之通御直書且御書取被仰付候御請奉伺御機嫌を茂度島庄左衛門儀當春出府被仰付置候を引揚今日船中急き東海道ニ而差立申候事ニ御坐候此段爲可申達如是御坐候以上

三月廿五日

御家老
御中老　連名

溝口藏人殿
有吉市左衛門殿

猶々去ル三日御預人以來ハ晝夜之無御差別一統之混雜ハ勿論萬事ニ亘御指揮之内ニハ深キ御心遣も有之御心勞之極深察仕候藏人殿へ之和泉守樣へ追々御使をも御勤御心魂被碎候儀之申迄も無之併諸事御都合能無事故御引渡相濟候段ハ安心仕候追々之御便毎ニ諸方ゟ之聞書且外聞之者ゟ相達候書付等被差越委細御知せ被下御地之事情等具ニ致承知水戸家井伊家之確執之申迄も無御座候後道之處共掛念仕候水戸侯ハ全躰御起綱立不申一國同士之せり合積ル處如何成行可